



意味の意味と戯れる  
PART II



星野廉





# 目次

すくえないことで、すくわれる * . . . . .	3
言葉とうつつのあいだを行き来する * . . . . .	13
レトリックだけでなりたっているような文章 * . . . . .	25
「AとB」での主役は「と」なのです * . . . . .	45
動くものを手なずける * . . . . .	51
意味のある影、意味のない影 * . . . . .	65
反意語の同意語は同意語ではないか * . . . . .	79
樹影、言影、幻影 * . . . . .	87
「何？」ではなく「何か」 * . . . . .	99
たつ、立つ、竜、凧揚げ、竜田揚げ * . . . . .	111
「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】 * . . . . .	119
世界にシンクロする * . . . . .	131
意思表示としての動作	

* . . . . .	143
赤ちゃんが立つとき	
* . . . . .	153
ことばの綾、うつつの綾	
* . . . . .	163
血液と水分がみなぎる春	
* . . . . .	171
影を見る	
* . . . . .	179
「何か」と「何」から身をかかわす	
* . . . . .	187
意味が立ちあらわれるとき	
* . . . . .	197
見慣れたもの	
* . . . . .	205
「何か」に「何か」を	
* . . . . .	211
世界の意味、意味の世界	
* . . . . .	215
「たったひとつ」感、「たったひとり」感	
* . . . . .	231
駄洒落と比喻と掛け詞	
* . . . . .	243
偶然にまかせて書く	
* . . . . .	253
ある度を高める、ない度が高まる	
* . . . . .	263
言葉の綾を編んでいく	
* . . . . .	279
言葉の綾を織っていく	
* . . . . .	289

Mの世界で生きる	
＊ . . . . .	299
空回りで空騒ぎする	
＊ . . . . .	307
ほのめかしとしての世界	
＊ . . . . .	315
夢は第二の現実	
＊ . . . . .	329
意味の論理楽・その2 【引用の織物】	
＊ . . . . .	339
意味の論理楽・その1 【引用の織物】	
＊ . . . . .	373



すくえないことで、すくわれる





＊

すくえないことで、すくわれる

星野廉

2022年9月25日 11:29

目次

意味は言葉として「ある」

意味が指すものは気配

ギャグとしての意味

立ちあらわれる意味と出会う

外から移ってくる気配

すくえないことで、すくわれる

意味は言葉として「ある」

意味、意味あい、あじ、味わい、うまみ、おもむき、内容、意、味、義、含み、ニュアンス、中身、実体、本質、意義、語義、メッセージ、コノテーション、デノテーション

意味とは言葉です。意味という言葉が指すものを言葉にすることは難しそうですが、意味について語るさいには言葉をもちいるしか方法がありません。その意味で意味は言葉なのです。だから私たちは意味について知りたいときには、言葉を聞いたり見たり読んだりすることが圧倒的に多いのです。

以心伝心は無理ですから、広い意味での言葉（話し言葉、書き言葉、表情、身振りなど）をつかって、人は意味を伝えようとすると言えるでしょう。そもそも意味を伝えようという気持ちなしに、人は言葉を発しているようにも見えます。

意味はある意味疲れるのです。とくに現在は意味に憑かれて生きている人が多いように見えます。

いずれにせよ、大切なことは、意味は言葉として「ある」ことです。言葉の裏にも、言葉の向こうにも、言葉と言葉のあいだにも、言葉として「ある」のです。「ない」ものを「ある」と決めたからに他なりません。誰がって人がです。意味にこだわるのは人だけです。

言葉に言葉を重ねて「かたる」しかなさそうです。

### 意味が指すものは気配

言外の意味、行間を取る、行間を読む、〇〇の余白に、含蓄、蘊蓄、意味が曖昧、意味深、ほのめかす、におわす

こうやって見ていると、意味が指すものは気配ではないかという気がします。気配をまぼろしと言い換えても大差はないのではないのでしょうか。気配やまぼろしは、複数の人に共有されるように見えることもありますが——共有されているわりには擦った揉んだが多すぎないのでしょうか——、それはそう見えるからであって人の頭の中をのぞくことはできません。

意味という言葉があるだけで、意味が指すものは見えないという意味です。こんな状況で、意味を探る意味はあるのでしょうか。いまの文で、後者の意味は価値という意味の意味ですが、こういうことも話をややこしくしているようです。

意味を考えることは、言葉の綾との戦いにもなります。もつれるからです。これはとても大切な意味を持ちます。言葉の綾との戦いという比喻をもちいましたが、この戦いには勝ち目も勝ちも勝者もありません。意味がないからです（この戦いには意味がないからだとも、意味というものはないからだという意味にも取れます）。

シャドーボクシングだからです。相手は影という意味です（相手は影だという意味にも、相手は「影という名の意味」という意味にも取れます）。

いまのが言葉の綾との戦いです。体感していただけたでしょうか。

＊

日本で「現代思想」と呼ばれることが多い分野で活躍した、フランスの思想家たちは、言葉の綾にとっても意識的だった記憶があります。もちろん、フランス語の話です。

(※駄洒落とか、掛け詞とか、言葉の遊びにも取れるような文章が多いために、他の言語への翻訳は不可能であり、良質の注解付きの翻訳や、翻案や、解説書が、日本では求められていました。)

一方、アングロ・サクソン系の哲学者たちが、言葉の綾とからみ合うのを避けたり、言葉の綾をまるでないかのような顔をしたがったのは、ルイス・キャロルの作品に懲りたのかもしれない。いまのは半分冗談ですけど。

その点、フランス語を母語としていたジル・ドゥルーズは立派だったと思います。

なお、フランスの「現代思想家」たちがこぞって、ドイツ哲学の読み直しのような作業をしていたのは興味深い事実です。

かつて日本でいち早くフランスの現代思想を紹介する役割を果たした人たちの多くが、哲学ではなく文学の担い手であったことも興味深い事実だと言うべきでしょう。

幸いだったとも言えるでしょう。フランス語で書かれた著作を、詩や小説などの文学作品に対するのと同様の手法で——いわばテクスチャーのあるテキストとして——言葉の綾まで読む必要があったからです（ところで言葉の綾を翻訳できるのでしょうか）。いまのことは知りません。

### ギャグとしての意味

意味の意味、意味不明、ナンセンス、ノンセンス、無意味

無意味もナンセンスも辞書にその意味というか語義が記載されていることは興味深い事実です。私なんか、これは一種のギャグではないかと思うことがあります。

人は、意外と、気づかずに真面目な顔をしてギャグを飛ばしているのではないでしょう  
か。なんとなくギャグをかましているのです。迫真の演技とか名演技は、巧まらずして  
生まれるものかもしれません。

## 立ちあらわれる意味と出会う

意味が、意味は、意味に、意味で、意味を

いろいろな言葉とイメージの断片が浮かびます。收拾がつかなくなってくるので、“意  
味を”みたいに、ちゃんと「 “ ”」でくくってネット検索をするといろいろな文字列に  
出会えます。

文字列と出会った瞬間に、意味が立ちあらわれるのを不意打ちするつもりで検索をす  
ると、出会った瞬間の衝撃のために軽い目まいに襲われそうになります。意味が立ちあ  
らわれる瞬間をとらえようとすると、思いのほか体力が必要で驚きます。

また文字列を長く見ているとかなり不穏な気分におちいります。ただでさえ、剣呑な  
のにこれ以上危うくなるのは避けたいところです。もちろん、私のことです。意味と付  
き合うのは疲れるのです。突かれるからです。

## 外から移ってくる気配

意味の形、意味の姿、意味を聞く、意味に触れる、意味を味わう、かぐわしい意味の  
かおり

形・姿、触覚、聞く、聴覚、触れる、触覚、味わう、味覚、かおり、嗅覚というふう  
に、五感と意味のからみ合いを言葉にして、そのさまをイメージしながら体感を呼びよ  
せるのもおもしろいです。言葉のもつイメージの喚起力を利用して、いわば意味を体感  
するのです。

意味の意味から意を取りのぞいて味を味わうというか.....。

意味には味（み・あじ）という言葉が見えるのですから、これがいちばんまっとうな味わい方かもしれません。こうなると、対象は言葉（とりわけ話し言葉と書き言葉です）だけではなくなる気がします。それに期待するのです。

意味を言葉（話し言葉と書き言葉）から剥ぎ取るというか……。体感と語感に意味を掛けるというか……。五感には互換性があり（いまのはたとえというかレトリックです）、交感し交換し交歓するようですし（いまのは駄洒落ですね）。

何かを口にして、ゆっくりと噛む。そのときに舌や口だけでなく、全身にゆきわたっていく「何か」の「感じ」とか「ふるえ」、そしてどこも名指すことができない部分に「外から移ってくる気配」——それが意味（たぶん意味マイナス意）ではないかなんて、このところよく考えます（こうやって言葉にしてみると不穏に感じられますけど）。

＊

その「外から移ってくる気配」は必ずしも話し言葉で言えるとは言いがたいのですが、だからこそ、言葉を発するさいにもちいる舌と、意味はそんなところでつながっているような気がします。舌先三寸。言葉をつかえば何とでも言えるからです。外とは関係なくです。

舌は、言葉が外へと剥がされ離れていく先端なのです。舌を離れた言葉は放たれた瞬間に消えますが、相手がいるかぎり、ふるえとして伝わり、相手の中でかろうじて反復されます。完全な形では反復されないという意味です。必ずズれます。

餅として映り（ここでズれます）、相手の中で写る（ここでもズれます）ことで、空間的にも時間的にも移るのです。それが繰り返されます（ズレが重なります）。

話し言葉が空間的にも時間的にも変容しながら移っていくのはみなさんがご存じのとおりです。このズレに歯止めをかけているのが書き言葉だと思います。書き言葉は固定を指向するからです。話され放たれた瞬間に消える音声と違って、掻き刻まれ書かれた文字は残るからでしょう。

書き言葉に先立ったはずの話し言葉が、いまや書き言葉に先立たれています。話し言葉にも書き言葉にも先立った人類が、両者に先立つかもしれない危機に瀕しています。これが意識しないギャグにならないことを祈るばかりです。

＊

上の文章では、舌 (language/tongue) にまわりついているイメージをつかった比喻で話を進めましたが、言うまでもなく、ここでは普遍など目指してはしません。あらゆる言語はローカルなものです。

どの言語も、その言語独自の語彙と文法と言葉の綾によって、その枠内でつづられますから、どんな思考も、ある特定の言語をもちいて最終的に既述するかぎり、いわゆる普遍とか客観は、努力目標＝絵に描いた餅でしかありえません。記述＝既述＝奇術＝詭術というわけです。

ちなみに、機械を相手に使用する言語やプログラミングも、特定の機械にしか通じないという意味でローカルなものです。

ローカルなものでしかない母語とたわむれながら (たぶんもてあそばれているのでしょう)、ローカルに思考と試行と恣行と私考を重ねることが、私にとっての「考える」なのです。そんなわけで、以下では、翻訳不能な母語でのローカルな掛け詞＝駄洒落 (駄洒落は掛け詞の別称であり蔑称でもあります) をもちいて話を進めていきます。

## すくえないことで、すくわれる

### 両義性、多義性

意味が固定されるというのは抽象ではないでしょうか。単一の意味というのも途方もない抽象だという気がします。抽象が悪いと言っているのではなく、そういうものではないかと言っているだけです。

人がとらえる事物が多層的多義的なものであるとすれば、人の知覚や認知機能には限界がありますから、事物をとらえそこねるしかないでしょう。つまり追いつけないので

す。複数どころか二つの属性や側面を同時に意識することさえ難しい気がするのは、まばらでまだらな個人の個人的な見解なのかもしれません。私のことです。

二つ、複数、多数の側面をすくい取れないといって、救いがないわけではないでしょう。むしろ、かりに全部すくえば壊れてしまうにちがいありません。限界があるからです。

世界（そんなものがあるとしての話ですが）に意味を見てしまう。森羅万象（そんなものがあれば）に意味（そもそも「ない」ものです、人の頭の中にしか）を探ろうとしてしまう。人はすくえないことで、すくわれているのです。

想像してみてください。つぎつぎと意味（「ない」にもかからわず）が立ちあらわれる状況を。その意味をすくえないことにいら立つさまを。気が触れるしかないでしょう。穴だらけで漏れっぱなしの筈（ざる）であることに感謝すべきなのかもしれません。見ざる、聞かざる、言わざる、掬わざる。

もう充分ではないでしょうか。

欲の深さには限りのない一方で、サル.....じゃなくて、ザル.....じゃなくて、ヒトはうまくできているなあと、すかすかでまだらでまばらで盛れっぱなしの私は感心しないではいられません。

\*

※申し訳ありません。このところ体調が悪いので、ログインする時間を制限しています。みなさんへのリアクションが遅れがちになりますが、ご理解いただければ幸いです。

#意味 # 無意味 # ナンセンス # ギャグ # 救い # 知覚 # 五感 # 言葉





言葉とうつつのあいだを行き来する



＊

言葉とうつつのあいだを歩き来する

星野廉

2022年9月17日 07:57

四方を山に囲まれた町で生まれ育ったのに、私は山について知りません。自分のまわりの人たちは、遙か彼方に見える山々の名前をよく知っています。登山口の近くにある観光地で、登山もさかんな土地なので、本格的な登山の経験はなくても、日帰りで近場の山や高原にドライブに出かけるのが当たり前になっているほどです。

幼いころから山には興味がありませんでしたが、交際がきょくたんに薄い人生を送ってきたことも、私が山に詳しくない原因のひとつだといえそうです。そんな私がいまになって山に興味が出てきて、相変わらず引きこもってはいるものの、以前だったら見向きもしなかった山についての番組を食い入るように見ているのには理由があります。

小説なのです。山を描いた小説をとおして、山への興味が湧いてきたのです。老年になってのことですから、何だか妙なというか、間が抜けた話だと自分でも思います。

＊

介護が必要だった母が亡くなった五年前から、車に乗せてもらって外出する機会が増えました。私にとって初めてのことの連続でもありました。初めて出席する葬儀で初めての喪主——正確には近親者だけによる「送り」でした——、母の他界にともなつての初めての手続きの数々、初めての公証役場、初めての高速道路、初めての遠出、初めてのイオンモールとアウトレットパークと回転寿司とドン・キホーテ、初めてまたぐ隣県との県境、初めての泊まりがけの旅行、初めてのホテル。

ここで笑わないでくださいね。五年前といっても、当時の私はもう老人とっていい歳でした。「初めての○○」を列挙していますが、誇張ではなく本当なのです。まるで浦

島太郎みたいですけど、事実なのです。「葬式デビュー」と「旅行デビュー」という小説を書こうと思ったくらいです。引きこもりって、こんなものですよ。みなさんの周りにも、いませんか？　すぐ近くに、こういう人がひっそりと生きているかもしれませんよ。

住んでいるのは山に囲まれた土地なので、遠出をするとすると国道や高速道路をつかうことが多くなります。助手席から景色を眺める楽しみを覚えました。道路、高架道路、山、川、橋、不思議な地形、トンネル、ダム、中都市、大都市、郊外の住宅地、商店街。何もかもが目新しく面白くてなりません（そういえば、去年はさらに遠出をして、約五十年ぶりに間近で海を見ました）。

中でも、山の連なりや山の風景の細部に目がいくようになりました。そして眺めながら思いました。いったいどうなっているのだろう、と。

＊

いま住んでいる家の窓からは山が見えます。近所を歩いても必ず遠景には山があります。かつて住んだ施設や住宅もそうでした。小学校から高校までの通学路からも近くにそして遠くに山が見えました。とくに気にとめなかった山が、この歳になって、急に気になる存在になったのです。

同時に、これまでに読んだ小説に書かれていたはずの山の描写を、自分が読み飛ばしていたのに気づいたのです。古井由吉、藤枝静男、そして幸田文の作品を読みかえすようになりました。すると出かけるのが楽しくなったのです。

三人の作家の文章には山の描写がよく出てきます。山だけでなく地形や地勢に関する記述も頻出します。読みながら感じたのは、読むと見えるようになる、見えるようになるとさらに読みたくなる、さらに読むともっと見えるようになる、ということでした。

ここで拙文を引用します。

＊

想像してみてください。漢文で習う漢詩に描かれた風景や風物は古代中国のものなのです。日本語で対応するものを探すのは難しい部分もあるに違いありません。

國破れて 山河在り  
城春にして 草木深し  
くにやぶれて さんがあり  
しろはるにして そうもくふかし

かろうじて覚えている漢詩に、上のようなものがあります。教科書に出ていたのを暗唱しているのです。すらすらと口をついて出る言葉に、あっけにとられます。こんなものが自分の中にあったのか。気がつきませんでした。不思議でなりません。

手術の後で、「あなたの体にこんなものがあったよ」とお医者さまに言われたような気分と言え言えずでしょうか。記憶とか暗唱というものの痕跡は、普段は気づかないままに残っているのですね。

話を戻します。

この漢詩に描かれた風景は昔々の中国のものなのです。それを昔々の日本人はどう受け止めたのでしょうか。戦（いくさ）はどんな民族にも見られますから、昔の日本人もまた自分たちの体験に照らし合わせて読んだのかもしれない。

このように外国語で書いてあることを読み理解するためには、書かれていることに対応する物や事を想像しなければ、容易に習得できないのではないのでしょうか。

漢文という中国語を日本語で読める技術を開発したり、詩吟という芸術に改造したり——、昔の日本人はすごかったのですね。

(拙文「もう一つの言葉」より)

\*

上で引用した漢詩の一部に、山、河、草、木という字が見えます。この国に住んでいる人ならおなじみのものですね。でも、目を世界に転じてみると、必ずしもそうしたものが当たり前の景色として身のまわりに見えるわけではないことに気づきます。

砂漠、草原、雪原、島。山だけ、川だけ、草だらけ、木だらけ。地球上には多様な地形や地勢があります。そして、それぞれの土地に太古から住む人たちはそれぞれの言葉をつかってきました。土地と言葉は深く密接にむすびついているということでしょう。

雪という言葉がない言語もあれば、雪に関する言葉や言い回しが、たとえば日本語とくらべて驚くほど豊かな言語もあるといいます。

＊

老人になって、山に興味を持ったものの、複数の持病をかかえる私の体力では登山は無理です。山の出てくる小説をたんねんに読むだけでなく、山についてのテレビ番組をそれこそ食い入るように見えています。

自分が山について書こうと思うと、山についての言葉や用語や言い回しを知らないことに気づきます。それでも、書いてみたいと思うときにどうするかというと、真似るしかないのに気づきます。

見よう見まねで先行する文章にならい練習するのです。「ならう」は「習う」「倣う」と表記できます。ちなみに、「学ぶ」と「真似る」、つまり「まなぶ」と「まねる」は同源だそうです。

文章に関していえば、知らないものは出てきません。まねる、ならう、まなぶしかないのです。言葉は外にあります。外から入れるというよりも、借りて入れるというほうが適切な気がします。借り物ですから自分のものにはなりませんし、独り占めも無理です。

山について書こう、山を描写しようと考えていて、あることが気になったので調べてみました。

＊

”それまで走ってきた道路をそれ、山沿いにカーブしていく道に出た直後のことでした。”<sup>35</sup>

”外に出てみると、ここはやはり山の中腹であろうという印象を強く受けました。”36

”たしかに、なかなか骨の折れる道ではありましたが、丘を百ヤードほどジグザグに登るだけのことで、私にはとくに無理という道ではありません。”38

上の三つの文はカズオ・イシグロ作で土屋政雄訳の『日の名残り』（ハヤカワ epi 文庫）からの引用で、数字はページ数を示しています。

それぞれの文にある「山」は英語の原文では hill (hillside) です。mountain ではありません。

でも、この翻訳された小説を読みながら「山」という言葉が出るたびに、私の頭に浮かぶのは日本の山々、それも故郷の山々なのです。たとえ、「低い」とか「なだらかな起伏」という言葉が添えられていても、なのです。英語力が乏しいうえに、うかつな私だけの思いなのかもしれませんが、お分かりいただけるでしょうか。（※ただし、原書で読むと hill とあるからなのか、テレビや映画で見た英国の低い「山」が浮かんできます。とくに小説の場合には、原著とその翻訳は別物だと感じないではられません。）

「あることが気になった」と、さきほど書いたのは、英国には mountain と呼べるほどの高い山がほとんどないという意味のことをなにかで読んだような気がしたからでした。かつてそれを読んだときに、えっと意外に思ったのを覚えています。

おおげさにいうと、そのときには、自分の考えていた「言葉と事物の関係」が揺さぶられたような気持ちになりました。

あと、mountain という語に関して『日の名残り』で興味深い箇所があるので紹介します。

”もちろん、見た目にもっと華やかな景観を誇る国々があることは、私も認めるにやぶさかではありません。私自身、百科事典や《ナショナル・ジオグラフィック・マガジン》で、壮大な溪谷や大瀑布、峨々たる山脈など、地球の隅々から送られてきた、息を飲むような写真を見たことがあります。”41

「峨々（がが）たる山脈」は原文では raggedly beautiful mountains となっています。言うまでもなく、これは英国の山ではなく、語り手が写真で見た「外国の」山々（複数形ですから山脈とか山岳地帯とも訳せます）の事です。

ここでまた引用させてください。

＊

さらに言うなら、日本語の「山」と英語の「mountain」、そして日本語の「川・河」と英語の「river」は一対一で対応しないらしいのです。

國破れて 山河在り

たぶん、中国語の山と川・河も、そうではないでしょうか。

日本語であれ、英語であれ、中国語であれ、漢文であれ、言葉というものが、ざらりとした違和感に満ちたものを感じられませんか。つまり、言葉は借り物なのです。個人レベルでも、国や地域や民族レベルでも、です。

(拙文「もう一つの言葉」より)

＊

ちなみに、カズオ・イシグロの『遠い山なみの光』（小野寺健訳）の原題は、A Pale View of Hills です。綺麗なイメージの邦題ですね。

翻訳『日の名残り』の文章は、敬語と丁寧語の使い方が正確かつ的確であるだけでなく、ため息の出るほど美しいです。原文とは別の作品と言っても言いすぎではないほど優れた日本語の文章だと思います。

『日の名残り』と The Remains of the Day を読みくらべると、多くのことをならえ、まなべるにちがいありません。

＊



「山というもの」をイメージしてみてください。

「山というもの」と「山についての言葉や言い回し」のあいだには、本来はつながりはありません。一対一の対応はないという意味です。言葉と物とそのイメージは同じではないともいえます。言葉は事物には追いつけないともいえるでしょう。

このことは、物と影、物と鏡像、物と写真や動画の関係を思いうかべると分かりやすいのではないのでしょうか。言葉とは、いわば物の影であり、物が鏡に映った像なのです。物や事は、辞書に収めることができる言葉よりはるかに複雑です。

「mountain（あるいは hill）というもの」と「mountain（あるいは hill）についての言葉や言い回し」においても同じことがいえます。

「山についての言葉や言い回し」と「mountain（あるいは hill）についての言葉や言い回し」のあいだにも、本来はつながりはありません。一対一の対応はないという意味です。

とはいうものの、山を見たり歩いたり登ったりしないと「山というもの」が分からないとは言いきれないと思います。「山についての言葉や言い回し」が助けてくれるからです。

そうであれば、山について書かれた文章を読みましょう。

また、山という言葉をつかう人たちと、mountain や hill という言葉をつかっている人たちが分かりあえないかという、そんなことはありません。翻訳や通訳という魔法のような技術が助けてくれるからです。地球という星に散らばって棲息するヒトという種は、この魔法があったからこそ、ここまで来たのだと断言できます。

そうであれば、「山」と訳された文章を読みましょう。もとは何語で何という語か知りませんが、たくさんたくさんあるはずですよ。

山について書かれた文章とは、小説だけの話ではありません。百科事典でも辞書でも図鑑でも雑誌・新聞記事でも専門書でも詩でも短歌でも俳句でも観光パンフレットでも、

何でもいいのです。

もちろん、言葉にこだわらず、映画やテレビ番組や動画を見るのもいいでしょう。映像も広い意味での言葉なのです（事物の影であり像だという意味です）。

\*

「山」は必ずしも「mountain」ではない、「hill」の場合もある。富士山を見て、「ボケイノー」と叫んだ米国人を思いだす。

フランス語の montagne と colline、ドイツ語の Berg と Hügel にも、それぞれ特有のイメージがあるにちがいない。ところで、アラビア語ではどうなのだろう。そもそも山のない土地の言語では、どうなるのだろう。

こう考えると、アメリカ、オーストラリア、カナダ、南アフリカの英語はぜんぶ英語なんだから、mountain も hill もぜんぶ同じだろうなんて言えそうもない気がしてきた。

【※想像してみしてほしい。図鑑や百科事典や標識やピクトグラムの「絵」として流通している、たとえば動物や植物や人物の姿が、世界で一樣に理解されるなんてことはない。そう考えるのは抽象でしかない。

例を挙げれば、牛と豚と駱駝は、文化や宗教や環境によって異なるイメージと意味とメッセージを持つ。「豚は豚だろ?」「男は黒で、女は赤のシルエットでいいんだろ?」「何でも見える化（視覚化）すれば世界に通じる」「絵と写真は世界共通語だ」「図と身振りという非言語的コミュニケーション（ノンバーバルコミュニケーション）を使えば、言語の違いによる問題は解決する」という短絡はそれこそ非国際的な発言でしかない。

ある物（実物であれ絵や写真であれ）で何を連想するかは、地域や集団や文化で異なり、個人でも異なるという問題は解消されないから。というか、解消されてはならない。

試しに、rice で「バターで炒めた茶色い米」を連想する人や「(青々と繁る) 稲」だと思っている人に、「お茶碗に盛った白米のご飯」の絵を見せてやってみるといい。これが

「rice」です、と。】

「川（河とどう違うのだろうか?）」を和英辞典で調べると面白いかもしれない。「牛（なんで丑もあるの?）」を調べるともっとびっくりするだろう。英和辞典で、rice を引いても勉強になるにちがいない。「稲、米、米粒、ご飯、めし、ライス、これ全部がライスなの?」

あなたのイメージする「山」と私の心にある「山」は重なる部分もあれば重ならない部分もある。でも、同じ「山」という言葉をつかう。

そうであれば、「山」という言葉に助けてもらって、お互いの心にある「山」を見てみよう。言葉以外に、人と人、集団と集団、民族と民族、国民と国民をつなぐものは見当たらない。

たしかに音楽があるし、絵もある。でも、細かい心の贅や、複雑な思いは、言葉でしか伝えられない気がする。誤解があってもいいじゃないか。いくらでも話しあう余地があるはず。

言葉は物や事ではない——。それは百も承知。でも、もううんざりだ。そう考えて楽しいことは何一つないから。幸せになれないに決まっている。

＊

以上の常体の文章は独白でした。

もう一つ、独白の文を書きます。

読むと見えるようになる、見えるようになるとさらに読みたくなる、さらに読むともっと見えるようになる——。

いまの文は偽らざる実感です。山に限りません。何かについての文章を読むことで、その「何か」が見えるようになります。見えるようになると、おもしろくなり、さらにその「何か」について読みたくなる。その「何か」への興味が刺激されてわくわくするのです。さらに読み、さらに見えるという好循環が生まれます。

この「見える」は「分かる」であり「知る」なのかもしれません。

＊

あなたは日本語が読めますか？

この問いは「分からないのにそれを見ている、見ているのにそれが分からない」を考  
えるうえでヒントになる気がします。

自分の体験に照らしあわせてしきりに感じることは、

分からないのにそれを読んでいる、読んでいるのにそれが分からない――

なのです。

こんなことを、記事に書きました（拙文「「そうかもしれない」」）。

分からないのであれば、見よう。見て分からなかったら、読んでみよう。読めば分か  
るかもしれない。少しでも分かれば、今度はもう少し読んでみよう。

言葉は世界と現実を見るためのフィルター、世界と現実が映しだされたスクリーン。  
言葉に助けられて、うつつのものが見えるようになるかもしれない。

言葉とうつつ（現実）のあいだを行き来することで、言葉の世界が広まるかもしれな  
い、うつつの世界が広まるかもしれない。

#読書 # 言葉 # 文章 # 日本語 # 読書 # 読む # 見る # 描写# カズオ・イシグロ # 土屋  
政雄 # 英語 # 翻訳 # 漢文 # 山 # 海

レトリックだけでなりたっているような文章



＊

レトリックだけでなりたっているような文章

星野廉

2022年9月15日 11:33

目次

\*\*タイトルを決める

活用を活用して書く

動くために動くを使う

外国語に翻訳できないような文章

レトリックだけでなりたっているような文章

レトリック詞集

＊イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。

＊書いても書いても書いてはいない。

＊分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

＊映る、写る、移る

＊記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

＊この符合、符号、付合は、只事ではない。

＊そっくりなところがそっくり

＊(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

＊あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。

＊「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう

＊写す、映す、移す、撮すと言うより

＊playerではなく prayer であるべきなのに。

＊指す、差す、刺す、射す、挿す

＊「あなた」＝「I love you. (only you)」＋「I miss you. (without you)」説

＊なぞるをなぞる。

＊ことのはに さきだつひと

最後に\*\*

## タイトルを決める

動くものを手なずける

昨日に投稿した記事のタイトルです。私の記事には動詞が目立つと言われたことがありますが、それは意識してやっていることなのです。

動きを懐柔する。運動をとらえる。運動を固定する。運動を固定化する。動きを記述する。

「動くものを手なずける」の代わりに、こんなタイトルでもよかったと言えますが、あえてそうはしませんでした。「動く」と「手なずける」をどうしても使いたかったのです。

動くを手なずける。「動く」を手なずける。「動く」を記述する。

この二つも候補だったのですが、「動くものを手なずける」に落ちつきました。

## 活用を活用して書く

そんなことで悩んでいたのですが、わざわざ舞台裏をお話ししたのは、まさにそういうことを、今回は書きたいからにほかなりません。ややこしくてごめんなさい。

私は考えたり書いたりするときには、動詞とか用言に導かれることが多いようです。いま用言という言葉を使いましたが、私は文法用語には疎いです。英文法は好きでしたが、日本語の文法が苦手でした。なんだがぴんと来なかったからだと思います。

いま辞書で用言と体言を調べてみましたが、大きな違いは用言は活用して、体言は活用しないということみたいです。これなのです。私が動詞に惹かれるのは。

簡単な例を挙げます。

愛。これは名詞です。中国語ではどうなのかは知りません。日本語での話です。



愛する。これは動詞と見なしていいでしょう。

愛——。私の中では、これで終りになります。思考停止におちいるのです。「愛なの」「そうですか」、「愛である」「ははあ」、「愛です」「あ、はい」という感じです。

愛する——。えっ？ 誰が何を？ 何が何を？ 誰が誰を？ いつ？ どこで？ どうやって？ 愛さない。愛せない。愛せば。愛しちゃったのよ。愛してる。愛していた。愛するだろう。愛していいですか？ 愛していないんですか？

動詞だとどんどん活用というか、頭の中で「愛する」が変化していくのです。ひとさまのことは知りません。こんなことを話す相手がないのです。今回初めてこんな話をしています。

ちなみに、この記事は小説です。正確なタイトルは「【小説】レトリックだけでなりたっているような文章」です。私は研究者でも探求者でもありません。「小説」とすると言いたいことが自由に言えるので、このところ味を占めてやっています。

記事は楽しく書きたいものです。

### 動くために動くを使う

要するに、私は動詞を使うことで思考停止を避けているみたいです。名詞ばかりを使っていると、考えられないし、書けないと言えるでしょう。ひとさまのことは知りません。知りたいともあまり思いません。自分の世話で精一杯なのです。

そんなわけで、私の書く文章には動詞や用言がよく出てきます。活用する用言に助けってもらって書いているのです。活用を活用するというか。

\*

His love of dogs led him to the hatred of people.

イヌへの愛が彼を人間への憎悪へと導いた。

イヌを愛する気持ちが彼を人間嫌いにした。

イヌを愛する気持ちが高じて、彼は人間嫌いになった。

イヌを愛するあまり、彼は人間を憎むようになった。

自作のぎこちない英文を自分なりに日本語にしてみたのですが、いわゆる「直訳」から「こなれた訳」へと変わっていく過程が分かるのではないのでしょうか。私はかつて翻訳家をめざしていたのですが、上のような訳の違いをいろいろな先生から教えてもらいました。

名詞構文とか動詞構文なんて言葉を使って説明する先生もいた記憶があります。要は、英語は名詞構文が多いから日本語では動詞的に訳せ、ということでした。そのほうが日本語としてこなれているとか、分かりやすいからだとか教わりました。いま考えるといかにもいかがわしい説明です。

そうした訓練が、いまになって私の書く文章に表れているのかもしれませんが。いずれにせよ、原文があってそれを読みやすい日本語にするような練習をしていたのです。現在の私の文章が読みやすかったり分かりやすいかはまったくの別問題ですけど。

＊

私にとって考えるとは、言葉を動かすことのようにです。動詞でも名詞でも、どんな言葉でもです。言葉をいじると言ってもいいかもしれません。人が何をどう考えているかは、人の中で起きていることですから、確認できません。自分でも確認できないし、他人といっしょに確認することもかなわないという意味です。

思いは言葉という形で出してみても、はじめて確認できます。言葉は、外にあるのです。

外にある言葉は聞こえるし見えます。ただ、意味を取ろうとした瞬間に、言葉は見えなくなり聞こえなくなります。人の中に入るからでしょう。中にあるものを言葉と呼ぶ勇氣は私にはありません。

(言葉が人の中に入ったと考えたとき、その言葉がどうなっているのか、不思議でなりません。確認できないという意味で、中の「外」というふうにイメージしています。ブラックボックスというか、分かりようがないという意味です。)

「言葉らしきもの」が、目に見え、聞こえ、場合によっては触れることができる場合に、私はそれを言葉と呼びます。見えない、聞こえない、触れることができないものを、私は抽象だとしか考えていません。

抽象は動かさせません。

＊

誰もが生まれたときに、すでにあるもの。つねに人の外にあって、それでいてときに人の中に入ったり出たりして、思いどおりにならないという意味で、人にとって「外」であるもの——。言葉のことです。

いま引用したのは、私はよく使う文章です。ちょっといじってみます。

誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの——。言葉のことである。

このいじった文は自分では絶対に書かないものなのですが、動詞よりも名詞を使うことに加えて、もう一つ特徴があります。あえて漢語を使っているのです。

私はできるだけ、いわゆる大和言葉、つまり和語を使うようにしていますが、これは名詞を避けて動詞を使うことと深くつながっています。いま思えば、大和言葉をなるべく用いるようにと言われていたのも翻訳を修業していたころでした。

誕生の時点で既に存在するもの。常時、人の外部に存在し（外在し）、それでいて時に人間の内部へと出入りし、思惑に抵抗するという意味で、人にとって「外部」であるもの——。言語のことである。

太文字にしたのが漢語的な言い回しです。私は漢語の多いこの手の文章が苦手で、頭

に入ってくる。どうしても読まなければならないものは、自分なりに和語の多い文章に「翻訳」します。日本語を日本語に訳すのですが、これは冗談でもレトリックでもありません。

長い引用になりますが、最近の記事から取った以下の文章をざっとご覧ください。

\*

「わかる」と「はかる」は字面と発音が似ていますが、「わかる」にくらべて、「はかる」はあまり考えたことがありません。でも、身のまわりを見ると「わかる」だけでなく「はかる」が多いのに驚きます。

とくに、病気になったり老いると「はかる」を意識するようになります。病院に行くとわかりますが、検査は「はかる」のデパートです。「はかる」をたくさんして、その結果が「わかる」というわけです。尿検査だけでも、たくさんの「はかる」があり「わかる」があるようです。結果の項目（リスト）を見るとわかります。

それにいまは、家でも毎日体温を測っています。はかればわかって安心するわけです。いや、「はかる」の結果をわかりたくないと思うときが、ままありますね。気が滅入りそうなので、思い出話をします。

いまになって思うと、学校という場所は「はかる」と「わかる」に満ちあふれていました。そもそも、学校は「わかる」と「はかる」に二分されると言ってもいいのではないのでしょうか。

なにしろ、はかるとわかる、はかるはわかる、なのです。恐ろしいことですが、「はかる」は、ほんわかとした、いいこと尽くめではないのです。

(拙文「「はかる」と「わかる」に囲まれて生きる」より)

\*

上の文章では、「はかる」と「わかる」という表記をしています。和語をひらがなにし

ているのは意識してのことで、もしそうした表記をしなかったら、上の文章は絶対に書けなかつたらうと思います。

### 外国語に翻訳できないような文章

ところで、上の文章を、たとえば英語に翻訳することは可能でしょうか？　いま考えていたのですが、私にはできそうもありません。

逐語訳（極端な言い方をすると、原文と訳文をできるだけ一対一に対応させる直訳みたいなもの）は無理でしょう。解説を訳文に混ぜるとか、註を付けば、できそうです。

ま、そんな奇特な人はいないでしょうけど……。

必死にかく、もがき、あがくのです。書いても書いても「欠く」しかない世界。圧倒的に言葉は足りないし、見る果てがないし、きるにも切りがないし、分けても分からない。それが「ありえない」なのです。

（たとえば、いま書いた文章はレトリックだけでなりたっている書き方をめざして書きました。書かれていても何も言っていないのです。ひとり受けギャグの世界に似ていませんか？　また、この書き方には外国語に翻訳するのがきわめて難しいという特徴があります。翻訳する人などいませんけど。）

（拙文「ありえない文章」より）

こうした書き方を、用言体とか「ありえない文章」と呼んでいたこともあります。私にとってオブセッションのようです。

### レトリックだけでなりたっているような文章

たとえば、レトリックだけでなりたっているような文章、これを「レトリック詞」（私は詩が書けないので、詩ではなく詞です、当初はナンセンス詞とするつもりでした……）と勝手に名付けたいと思います。

これはどんなものなのかと言いますと、上で述べたことの繰り返しかえしになりますが、たとえば解説をしたり註を付けないかぎり、外国語に翻訳するのがほぼ不能な書き方を

目指します。「勝手に目指せば？」ですよね。我ながらアホなことを目指していると思います。

ひとつだけ言い訳をさせてください。「レトリック詞」は、学生時代にフランス文学（そして現代思想）を勉強していた自分としての総決算なのです。なぜなのかと言いますと、私がいろいろなことを学んだフランスの作家や詩人や思想家の中に、日本語（あるいはフランス語以外の言語）に翻訳するのが不能であるような書き方をしていた人たちが少なからずいたからなのです。

ミシェル・フーコーとジル・ドゥルーズにくらべると、日本語を母語とする者にとっては体感しにくいお話を語る人だという印象を、デリダについてはいただいています。

落語を聞いていて、あるいは海外のコメディ映画を見ていて、どこで笑えばいいのか分からないというのに似ています。「笑うべきところ」を解説をしてもらったとしても、笑いが自然と湧いてくるわけではないのです。

（拙文「【小説】音の名前、文字の名前、捨てられた名前たち」より）

私は、いわばオマージュとして、その人たちの書いた文章の言葉の身振りを母語でなぞりたいのです。たとえば、日本語でデリダする、フーコーする、ドゥルーズする、バルトするというふうに……。いま思わず笑ってしまいました。無知から来る無恥は、まことに恐ろしいものです。鞭で自分をぺんぺんしたくなりました。

私がそうした人たちの足元にもおよばないことは重々承知しておりますが、だからこそ、アホと呼ばれてもいいから死ぬ前にやっておきたいなあ、と思っている次第なのです。じつのところ、アホでなければ、こんな荒唐無稽なことは言えません。

こういうありえない夢があるかぎり書きつづけることができるのだとすれば、この夢が終わらないでほしいです。この夢の中で、ありえない文章をひたすら書くしかない。（……）

終りなど考えないで、めざしているのが蜃気楼であると意識しながら、ただ歩くしかない旅なのかとも思います。

（拙文「ありえない文章」より）

そんなわけで、私は母語である日本語で、「ありえない夢」を追い、「ありえない文章」を書いていこうと思います。アホは直らないようです。

## レトリック詞集

以下は自己引用による、いわばレトリック詞集ですが、出所はあえて明記しません。これまで何度も引用してわけが分からなくなっているのです。

自分でも不明なので、たとえば（「たとえば」が多くてごめんなさい）、「星野廉イツ・ア・マジック。」とか「星野廉記述は、既述であり、」というふうにネット検索するとヒットするので助かります。

こんなふうに自分の痴部（たとえば、自己引用癖のことです）が露わになり、絶句します。

悪いことはできないものですね……。いずれにせよ、便利な世の中になりました。みなさんも、ご自分のユーザーネームでお試しになると面白いかもしれません。

なお、以下のレトリック詞集に意味や内容はありませんので、ざーっと顔＝字面だけをながめる感じで、目を通してやっていただけるとうれしいです。

**\*イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。**

これは便利。超便利。魔法みたいに便利。呪術みたいに便利。イツ・ア・マジック。マジでマジック。マジで絶句。ヒューマニズムよりも、シャーマニズム。コミュニズムよりも、キャピタリズム。デモクラシーよりも、ビュロクラシー。

**\*書いても書いても書いてはいない。**

隔靴搔痒の遠隔操作。まるで夢の中。知覚機能を用いる限り対象には触れることができない。言葉を使う限り直接的に森羅万象を相手にすることはできない。

駆けても駆けても駆けてはいない。掛けても掛けても掛けてはいない。搔いても搔いて

も搔けてはいない。書けても書けても書けてはいない。要するに、そういうことです。

どう足搔いても藻搔いても現実にたどりつけない私たちは、覚めた夢の中にいるのかもしれない。

**\*分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。**

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

**\*映る、写る、移る**

それが見るであり、聞くであり、読むという行為と言えるでしょう。見たもの、聞いたもの、読んだものを、いったん信じないことには——「信じる」は「なぞる」です——、見えないし、聞けないし、読めないのです。実際には「ないもの」を見て聞いて読んでいるのですから、変な精神状態にあると言えるでしょう。

いましているのは、絵、映画、映像、動画、演劇、物語、小説の話です。虚構というものは「ない」を「ある」と一時的に信じ（つまり、思い描くことでなぞり）、しかもそれを自分自身も心の中で表情や動作として演じるわけですから、確かに変なことをしているとと言えます。

要するに、映る、写る、移るです。転写された相手が自分の中に入ってくるという感じ。



**\*記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。**

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

言葉を用いて「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉や言い回しを「なぞる」こと、言い換えれば既述なのであり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術だと言えます

**\*この符合、符号、付合は、只事ではない。**

呪術、呪い・まじない、魔術・マジック・magic、マジ・magie（フランス語です、マジな話が）、まじもの・蟲物。

この符合（※ふごう）、符号（※ふごう）、付合（※つけあい）は、只事ではない。「まじ」めな話が.....。

**\*そっくりなところがそっくり**

そっくりなところがそっくりなのです。そっくりな点がそっくりにそっくりなのです。これもレトリックですけど。

スマホという大量生産された製品のシンクロ振りに、それを使う人の身振りのシンクロが重なるという意味です。つまり、シンクロにシンクロする。

スマホを使っている人はスマホに似てくるというのは、それくらいの意味です。

\*

そっくりがそっくりをそっくりな場所でそっくりなやり方で売る、そしてそっくりな

お客さんたちがそっくりなやり方で買う。そして、自分もまたそっくり化していることにふと気づき、嘖然となる。

おそらくこれが資本主義なのでしょう。というか、資本主義の顔であり表情であり身振りなのでしょう。

**\* (7) AとBは、反意語=反対語=対義語=異義語というよりも、むしろ「同意語=同義語」であるらしい。**

世界を「まだら」状にしか知覚および認識できない人間が、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると事実誤認および錯覚されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、知覚と錯覚、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、「記憶にございません」と「存じ上げております」、きれいと汚い、毒と薬、可能と不可能、シャチョーとペーパー、はじめしゃちょーと林家ペー（※両者とも人間という意味）、林家ペーと林家パー子、お偉いさんと市民、苦労人と元苦労人、玄人と素人、素人のど自慢と紅白歌合戦、濃いと薄い、あそこここ、善と悪（倫理的意味ではなく、この惑星に対しての人間の影響度）、神と悪魔（諸説あり）、異端と正統、温水と冷水、ヒトと動物、なまものといきもの、のろいとまじない（漢字にすると同じである点に留意されたい）、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、など。

**\*あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。**

あやまるものはあやまらない。あやまってもあやまらない。

あやまるものはあやまる。

あやまらないものがあやまる。

あやまらないものがあやまらない。

あやめて、あやまる。

あやまって、あやめる。

あやまって、あやまる。

あやまって済む問題。

あやめて済む問題。

あやめとかきつばたとしょうぶをあやまる。  
あやめばしで、みをあやまる。ごめんなさい。  
あやめばしはあやめた橋。諸説あり。

あやめ亭は落ちついたお店です。  
あじさい亭もすごく美味しかったです。最高でした。

あやまらないそうり。  
あやまらない、あいむそうり。  
あいむそうりと言わないそうり。  
あいむそうりと言わないあいむそうり。(早口言葉)

あやめてもあやまってもあやまらないみちびくひと。  
あやまりをみとめないみちびくひと。  
つじつまあわせにちみちをあげるみちびくひと。(早口言葉)

#### \* 「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまう

「あるとない」と「有ると無い」と「存在と無」は、同じことを言っているというのは抽象です。それぞれが違います。

「あるとない」 < 「有ると無い」 < 「存在と無」

「存在と無」は「あるとない」よりずっと厳めしい、つまり存在感があります。難解な印象を与えますし、実際に難解でもあります。なにしろ、「ないことはない」という振りをして「ないことがある」とほのめかしているのです。「いや」が「いいわ」だったりするSMプレイとそっくりなのです。

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なことを「無は無なり」「言

葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。がちで「ある」ように思えてしまうのです。いわば顔芸です。

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていただけでしょか？

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

無 = あるあるあるあるある.....

漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。ただし、あくまでも日本語においての話です。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。

#### \*写す、映す、移す、撮すと言うより

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

\* player ではなく prayer であるべきなのに。

名づけて手なづけることが難しいもの。そもそも言葉にするのが難しいもの。

difficult to name

difficult to tame

difficult to frame

抽象だから、似ているというよりも、そっくりというよりも、同じであり、同一。同期。

same

なぞ、なぞをなぞるというゲーム。なぞるが目的化して空回りする。

game to play

aim

aimless game to play

何のため？ 名前のため？

aim、name、fame、frame

それは罠だってば！

You're framed!

筋書き (aim) をなぞり、名 (name・fame) を残し、枠 (frame) を残すのに血道を上げる。

ゲーム (game) をプレイ (play・演じ戯れ競い奏で賭け、なぞり) しながら、自分が獲物と餌食 (game・prey) になってしまうのに気づかない。いまは祈る (pray) べき時なのに。player ではなく prayer であるべきなのに。

#### \*指す、差す、刺す、射す、挿す

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。つまり、サディスティックなのです。

川端康成の作品における「指」の役割と象徴性はきわめて大切です。指はなぞり、さすものなのです。何かの代用であることは明らかでしょう。

\* 「あなた」 = 「I love you. (only you)」 + 「I miss you. (without you)」 説

「あなた」 = 「I love you. (愛しいあなた)」 説。これでは「かなた」の意味がすくえません。

じゃあ、「あなた、貴方 = you、彼方 = over there」なのですから、音感的には「あなた・貴方」 = 「I love you.」で、意味的には「あなた・彼方」 = 「I miss you. (目の前にいないあなた)」では、どうでしょう。

つまり、「あなた」 = 「I love you. (only you)」 + 「I miss you. (without you)」 説。

\* なぞるをなぞる。

人のつくるものはどこか人に似ている。なるべくして、そうなっているのかもしれない。

人のつくるものが人の内にある「何か」と似ていても不思議はないのではないか。

人はなぞる。なぞるをなぞる。空(くう)をなぞるように見えて、杵をなぞっている。形をなぞっている。形はなぞっているうちに形となる。なぞった瞬間に形は謎となる。

とつぜんどこかからやって来た感のある文字は、なぞるを固定化する。なぞるを暴力的に固めて居直りつづけようとする。

## \*ことのはに さきだつひと

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかけ

## 最後に

以上、私の文章がいかに内容なんてないよーであることが体感いただけたかと思えます。

文章は顔が命。文章は読むよりも、その顔を見て愛でる。読むよりも、見たり唱えて楽しめばいい。

さいきん、つくづくそう思います。意味に疲れて、憑かれて、突かれて、潰かれて、付かれているのかもしれない。

ひとりよがり自己満足でしかない自分語と化してきた拙文の言葉たちにお付き合いいただき、ありがとうございました。

#文章 # 名詞 # 動詞 # 用言 # レトリック # 翻訳 # 文体 # 文字 # 漢字# ひらがな  
# 大和言葉 # 和語 # 言葉





「AとB」での主役は「と」なのです



＊

「AとB」での主役は「と」なのです

星野廉

2022年9月15日 07:48

「AとB」と書いてあると、AとBのあいだに何らかの関係を見てしまいます。さもなければ、「と」で結ばれているはずがない気がするからでしょう。

ロミオとジュリエット、ピンクとグレー、『男と女』(Un homme et une femme)、女と男、Ebony and Ivory、存在と無、存在と時間、ハリー・ポッターと賢者の石、蜜蜂と遠雷、北風と太陽、点と線、美女と野獣、老人と海、スクラップ・アンド・ビルド、トムとジェリー

どこかで見聞きしたペアだと、そのペアが何であったかで決まる気がしますが、それでも分からない気がする場合もあります。「存在と時間、点と線って、どういう関係かな？」と考えこむ人もいそうです。

私とあなた、猫と犬、山と川、かわいいとうつくしい、砂糖と胡椒、火曜と金曜、歌うと読む、ペンとスマホ、数学と書道、アメリカと平安時代、鍵と砂時計、青と化石、寝台の上の蝙蝠傘と谷間の百合、ジル・ドゥルーズと蓮實重彦

何だかなぞなぞみたいにも、ほのめかしや詩のようにも感じられるものがあります。意味深というやつです。シュールなギャグに感じられるフレーズもありますね。

ところで、思わせぶりな「と」には気をつけましょう。何の関係性も示していない「と」がときどきあります。詩や哲学にありそうな気がします。どちらにも疎いのでよくは知らないのですけど。あと、このアカウントにもたくさんあります。要注意です。

なお、「と」をめぐるの、この辺の話は、蓮實重彦先生経由ジル・ドゥルーズ先生のご意見を参考にしています。（※詳しくは、拙文「ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その5）【引用の織物】」の冒頭をお読みください。）

＊

「と」はつなげます。「つなげる」のはいいのですが、どういう具合につながっているのかは、きわめて「曖昧＝テキトー＝あんまり考えていない」場合が多いですよね。結論から申しますと、

＊「AとB」に真ん中にある「と」は、「何でもありー」だ。

さらに、

＊つなげてみないとわからない

＊つなげてみてもよくわからない

と言えそうなんです。

だから、

＊眺めているしかない

とも言えそうです。ああでもないこうでもない、ああだこうだと言いながら、関係を考えるのです。

関係とは印象だからです。この場合には、抽象と言っても大差ありません。

＊

関係といっても漠然としていますから、具体的に見てみましょう。

まず反対のようなペアです。

大と小・マクロとミクロ・無限と有限・絶対と相対・SとM・もうとまだ・多いと少ない・ポジティブとネガティブ・白と黒・裏と表

次に、動きや状態に注目しましょう。AとBがどうなのかという話です。

引き寄せ合う・反発し合う・シンクロする・矛盾する・くっ付いたり離れたりする・まじり合う

似ている・同じである・異なっている・結ばれている・からみ合っている・重なる・仲がいい・入れ子構造・表裏一体

ずばり「○○関係」だと分かりやすいかもしれません。

相関関係・因果関係・三角関係・ねじれた関係・あやしい関係・くさい関係・不倫関係・主従関係・親戚関係・競合関係・無関係

\*

いろいろなAとBの関係が考えられますね。こうした関係は固定していなくて、流動的である場合も想像できます。彼女と彼は、十年前は夫婦だったけれど、いまは雇い主とアルバイトの関係で、友達同士でもあり、きのうは不倫関係、きょうはきわめて険悪な関係、現時点では重なりあっている、なんてありえますよね。

思うのですが、「AとB」では、AとBは刺身のつまで、「と」こそが主役ではないでしょうか。

ロミオとジュリエット、ピンクとグレー、『男と女』(Un homme et une femme)、女と男、Ebony and Ivory、存在と無、存在と時間、ハリー・ポッターと賢者の石、蜜蜂と遠雷、北風と太陽、点と線、美女と野獣、老人と海、スクラップ・アンド・ビルド、トムとジェリー

たとえば、上のペアでは「と」で結ばれている両者がどんな関係であるかが問題であって、両者は別の両者でもいいわけです。

試しに「ロミオとジェリー」としてみましよう。「ロミオとジュリエット」や「トムとジェリー」とは別の関係が生まれました。「ジュリエットとトム」でも同じことが起きるでしょう。

＊

「と」ってすごいじゃないですか。「と」自体には意味はないようできて、二つの言葉を「つなぐ」という働きがあるのです。

「AとB」と書かれれば「と」は刺身のつまみたいに見えます。でも、この「つなぐ」という働きはほかの言葉にはない気がします。

「と」というごく短い言葉によって、関係性が立ちあられるのです。これを奇跡と言わずに何と言えればいいのでしょうか。言葉が魔法に感じられます。

「と」は助詞と呼ばれてもいますね。助手とかアシスタントみたいじゃないですか。大きな働きをしているのにかわいそうだと思います。

声を大にして言いたいです。

「AとB」での主役は「と」なのです、と。

#ジル・ドゥルーズ # 蓮實重彦 # 助詞

動くものを手なずける





＊

## 動くものを手なずける

星野廉

2022年9月14日 15:27

動詞は、揺らぎとブレを指向します。固定や安定を横目に（見てないわけではありません）、ぶらぶらふらふらします。動詞は、自然の状態であり常態であると思います。名詞に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は動詞的なものに満ちている気がします。

（拙文「名詞的なもの、動詞的なもの」より）

目次

### 動きを記述する

人類はずっと呪術の世界に生きている

動く、動かない、動いていることにする

自分は動かないのに動く

自分が動くことで動かないものを動かす

「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないか

万物流転

動いているものの代わりをしている動いていないもの

ストーリーとドラマを喚起する絵

動きを誘いだす仕組みとしてのストーリー

まとめ

### 動きを記述する

動きを記述するのが困難なのは、そもそも動きは固定化できるものではないからです。「動いているもの」が「固定している」つまり「動いていない」なんて変ですよ。無理があるわけです。土台無理なのであり無理難題なのです。私は論理的という言葉が好きではないので、非論理的だとは言いませんけど。

動きを静止画として表したものが写真（絵でもいいですけど、上手い下手があります）です。動きを撮影したものが動画です。映画では、静止画をコマ送りすることで動いていると錯覚させるそうです。コマ送りが細分化されているほど滑らかな動きに見えるんですけど、詳しいことは知りません。

こうしたことについてはいろいろな分野の人がいろいろなことを書いているにちがいません。私はだんだん本を読むのがつらくなってきているので、自分で考えてでっちあげることになります。そのほうが楽しいからです。苦しいとか苦しむのは嫌です。この歳だと体が持ちません。

＊

動きを表すのに適した表現形式は何でしょう？ 映画や動画かもしれませんが、必ずしもそうとは言えない気がします。確かに映画や動画を見ているその時点ではそれなりの臨場感やリアリティがあって見ている人は感動するでしょうが、その場かぎりなものです。

それを見た記憶がずっと残るわけではないという意味です。そもそも人の知覚や認知機能や記憶は動きを処理するのに適していないからでしょう。いずれにせよ、映画や動画を見た体験が、その人の記憶や思い出として残り、動きがその後も繰り返され再現あるいは再演されるかどうかは興味深いです。

話し言葉や書き言葉や表情や身振りは動きを表現するのに限界があるのは当然です。動きそのものではなく、動きを置き換えたものだからです。動きの代わりに動きではないもので済まして澄ましているわけですが、置き換えたという状況は変わりません。

＊

映画であれ、動画であれ、VRであれ、メタバースであれ、それを見た時点でどんなに臨場感があっても、その記憶がそのままずっと残るわけではありません。一時的な記憶は墓場に持って行けないし、その前の段階である死に際でさえ、そっくりそのまま思い出せないのではないのでしょうか。

これ以上は、おそらく「あの世」とか「来世」とか「輪廻」の話になるはずですが、人

の欲は限りないもので、悟りとか、来世とか、はたまた生まれ変わるなんて贅沢なことを考えるし欲します。

要するに、人は自分が亡くなった（無くなった）のちも、動いていたいのです。動きを記述したいという人の心理は、つまりは永遠に動いていたいという欲求ではないか。そんな気がします。

## 人類はずっと呪術の世界に生きている

要は、再現性、再演性ではないでしょうか。つまり、動きがどれだけリアルに再現あるいは再演されるかです。どこでって、ヒトの頭の中での話です。リアルかどうかという印象が大切なようです。印象は錯覚と近いところにあります。主観（的）という言葉をあててもいいでしょう。

動きを映し、それがなぞるという形で写され、さらには「何か」として自分（正確には自分の頭でしょう）に移ることができれば、ヒトが満足できるという意味での高度な再現性や再演性が生みだされるのではないのでしょうか。くどいですが、ヒトの頭や心や思いの中での話です。

いま流行っている、または流行る気配を見せている、仮想現実とか仮想幻術（そんなものないか）とか、メタバースといったものも、ヒトの頭の中にどう働きかけるかが最大の問題となっているようです。

＊

人類はいまだに呪術の世界に生きていると感じられてなりません。否定していません。否定することは自分を否定することになると思うくらい、私もどっぷりと呪術の世界に浸かって生きています。

インクの染みを見てそれに似ても似つかぬものを読んでいる、画素の集まりを見てそれとは別のもを見ている、大切な人の写真を踏めない時点で、呪術にはまっているのです。これは恥ずべきことでも、憂うべきことでもありません。人類から呪術を取ったら何が残るのでしょうか。

動きをヒトの中で誘いだす、つまりイメージを喚起することが大切だという気がします（催眠術や語りや騙りの延長上にあります）。これは再現ではなく、繰り返すたびに異なったズレやブレや変奏が生じる再演でしょう。ヒトがすることですから、再現は努力目標でしかありえません。

なお、人類にとって呪術の究極的な願いは不死でしょう。その願いのあらわれの一つが、動きを手なずけることだと思えてなりません。

### 動く、動かない、動いていることにする

「映る、写る、移る」と「映す、写す、移す」においては、動きとか波（振動）が大きな役割を演じている気がします。

「動き」は自然の状態であり常態であると思います。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできません。言葉という形で外に出さない限り、他人といっしょに確認できないからです。自分の中で思うだけという意味です。

残念ながら、言葉、とりわけ話し言葉（音声）と書き言葉（文字）は「動き」を表す、つまり置き換えるには適した素材ではないようです。音声も文字も固定化を目指すからです。というか、人は固定しないと動きをとらえられないからだとも言えそうです。

映画が静止画をコマ送りして、動いているという錯覚に頼っていることを思い出しましょう。

動きだけではなく、ヒトは事物の全体も空間的にも時間的にもとらえられません。無限に生きられないからであり、限界のある知覚機能と認知機能をもちいて世界をとらえているからです。

全体の代わりに部分で済まして澄ましている。

手の届かないものの代わりに手の届くもので済まして澄ましている。

このように置き換える（すり替えるでもいいです）ことによって、ヒトは「代わりのもの（別物という意味です）」を「実物や本物」としてとらえるという錯覚に頼るという妙案を利用していると言えそうです。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。（たとえば、静止した画面上で動いて見える像を見ている。動いて見えるだけなのです。）

というわけです。「動いているものの代わりにしている動いていないもの」を人はたくさん考えだしたり、じっさいに作っているようですが、動詞もそのひとつでしょう。

### 自分は動かないのに動く

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている——。この変種があります。

自分は動かないのに動く——。です。言葉にすると不思議なことのようにですが、ぜんぜん不思議ではなく、誰もが日常的に経験しています。乗り物がそうです。地球もそうです。

自分は動かないのに動いた気持ちになる——。これは映画であり、電話であり、テレビであり、パソコンであり、スマホであり、仮想現実なのですが、その芽は、話（実話、夢語り、作り話、ほら話、昔話を含みます）を聞く、絵（落書きとそれ以降のすべての絵）を見るに、すでにあったのであり、いま始まったことではありません。

もちろん、手紙やメモやお経や経典や聖典といった書かれたものを読んでもらったり（読み書きが誰もができるものではなかった時代は長いと言われます）、自分で読んだりすることも、そうでしょう。

人の意識（脳でもいいです）は乗り物に乗って動くしかないのかもしれませんが。もちろん、体も乗り物です。ここではそういう話をしています。

本気に取らないでくださいね。そもそも、こういう話は本気でするものではありません。

### 自分が動くことで動かないものを動かす

自分は動かないのに動く——。これによく似たというか、逆に思われることがあります。

自分が動くことで動かないものを動かす——。漢文のことです。

大陸から持ってきた異物である漢字からなる文章を、列島にある言葉が迎えた。想像するとぞくぞくします。ここからは学校（小学校から高校までです）で習ったことの記憶を頼りに想像します。

文字のなかった列島で話されていた言葉で、文字という異物からなる文字列を読めるようにしたらしいのです。漢文の素読をイメージしているのですが、具体的にどんなことをしたのかは知りません。勝手に想像というか、空想します。

漢字からなる文字列を動かさなくて、自分が動いて読んだらしいのです。上から下という順で書かれている文字を、目を上下に何度も動かしたりして、列島で話されていた言葉で読めるような工夫をしたのは、バイリンガルだったにちがいありません。

しかもエリートでしょう。ごく一握りの文字どおり頭のいい人たちだったと想像できます。頭がいいというのは、記憶容量が大きく、情報の処理が素速いという意味です。直感力（直観力）や洞察力にも優れていたにちがいありません。

自分が動く、つまり自分の目を上下に動かす（おそらく同時に頭の中と体でなぞる）ことで、動かないものを動かす（もちろんそう思い込むのですが）ことに成功したのです。

「動かないものを動かす」とは、自分の頭の中で起きていることにほかなりません。大陸

にあった文字が列島にあった言葉に移ったとも言えそうです。外にあるもの（文字）をなぞって、自分の中（思い）でなぞることにより、移った（おそらく話し言葉から書き言葉へ移行していった、つまり漢字を和語として読み下して読む過程でひらがなやカタカナを作っていた）のです。

異物を手なづけ、飼いならしたとも言えるでしょう。こう考えるとすごい話です。

「自分が動くことで動かないものを動かす」とは、漢文だけでなく、人の知覚と認知のあり方のことではないかなんて大風呂敷を広げたくになります。でも、そうじゃないでしょうか。動かないものを目で追って、それが動いていると感じる、言い換えると「ない」を「ある」にするのは、赤ちゃんがふつうにやっていることではないでしょうか。つまり、赤ちゃんに限らず私たちがふつうにやっていることではないでしょうか。

人は「ない」を「ある」として生きているのです。言い換えると、人は世界という、自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）を「自分が動く」（たぶん体と頭の中で動いてなぞる、です）ことで手なづけ、飼いならしている、つまり自分の思いどおりに「動かしている」つもりになっているのであり、それが人として生きることだという気がします。

かなり脱線してきたので、話をもどします。

**「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないか**

「動詞」は自然の状態であり常態であると思います。「名詞」に相当するものを自然界で見つけるのは難しいですが、世界と宇宙は「動詞的なもの」に満ちている気がします。

「動詞」も名づけられたものであることはまちがいありません。でも、名詞と違って動きや様態に注目している点において、「動詞」の向いている方向は、「名詞」の抽象性とは異なる気がします。

比喩的に言うと具体的な動きを誘いだす「動詞」はずとんと腑に落ちます。繰り返しの言い方になりますが、「動詞」が動きを指向するからでしょう。

「動き」がすっと腑に落ちるとするのは、話し言葉や書き言葉を知らない（学んでいない）赤ちゃんが、表情や動きに注目して、それを目でなぞり、おそらく自分の中でなぞったり、あるいはじっさいにその動きを真似て演じることを思いだすと分かりやすいかもしれません。

私はおとなだ、赤ちゃんではない、とおっしゃる人が多いと思いますが、人は赤ちゃんを卒業することはできないのです。赤ちゃんを続けながら、おとなになるという気がします。

＊

一方の、「名詞」は「頭で理解する」（比喻です）感じで、不自然なのです。動きよりも固定を指向するからではないでしょうか。自然界には固定を指向をするものは存在しない気がします。いわゆる万物流転です。固定は抽象（ここではヒトの頭の中にしかないものという意味です、というか抽象とはきわめて人間的なものなのです）ではないでしょうか。

つまり、「名詞」はヒトの頭の中だけにある抽象ではないでしょうか。

あらゆるものが、動いているのです。ただその動きがヒトの知覚機能を超えている場合には、当然のことながらヒトには察知できないということでしょう。

そういう知覚できないものを、ヒトは器械や機械や器具をもちいて知覚できるような工夫をしています（いわゆる視覚化とか「見える化」とかシミュレーションがそうです）、それが完全であったり万全であるという保証はないわけです。

私はこういう状況を隔靴搔痒の遠隔操作と呼んでいます。簡単に言うと、「手に届かないもの」の代わりに「手に届くもの」で済ませて澄ましているという意味です。「そのもの（本物や実物）」には到達できないから、とりあえず「代わり（代理や似たものや似せたものや偽物、要するに別物）」を相手にしているのです。

写真に写っているものはそのものではないし、言葉は言葉が名指している事物ではないし、目の網膜に映っているものはそのものではない、と言えば分かりやすいかもしれ



ません。

## 万物流転

話を「あらゆるものが、動いている」にもどします。

よく考えると、身のまわりのすべてのものが移動してここにあるわけです。それに、いつまでもここにあるわけではありません。「ここ」にある「これ」は、以前は「こう」ではなかったし、「どこか」にあったはずです。万物流転。万物動転。気も動転。びっくり仰天。はあ。ため息が漏れました。すべての物が長い目で見れば動いているのですね。

## 動いているものの代わりをしている動いていないもの

全体の代わりに部分で済まして澄ましている。

手の届かないものの代わりに手の届くもので済まして澄ましている。

このように置き換える（すり替えるでもいいです）ことによって、ヒトは「代替のもの（別物という意味です）」を「実物や本物」としてとらえるという錯覚に頼るという妙案を利用していると言えそうですが、もう一つ、例文を加えてみます。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている。（たとえば、静止した画面上で動いて見える像を見ている状態。動いて見えるだけなのです。）

というわけです。「動いているものの代わりをしている動いていないもの」を人はたくさん考えだしたり、じっさいに作っているようですが、動詞もそのひとつでしょう。

## ストーリーとドラマを喚起する絵

「動いているものの代わりをしている動いていないもの」を具体的に見ていきましょう。

いきなり映画とかテレビに行く前に、たくさんのそうした仕組みや仕掛けや物があっ

たと考えられます。

洞穴の壁に描かれた絵とか、地面に木の枝で描いた絵を想像してみましょう。

こういう絵は「動いている」のです。静止画であっても、人はそうした絵を見ながら、あるいは描きながらストーリーを口にするはずですよ。

「このシカはね、きのう、あの山のそばにある川で水を飲んでいるところを、うちの息子たちが矢じりで射止めたんだよ。すごく手間がかかってねえ。……」

「こんなものを沼の向こうの谷で見かけたよ。とにかくでかいんだ。人の大きさがこれくらい。……」

「夢でこんな形のいかだに乗った生き物に会った。顔は魚、体はサル、足はカエルみたいにひれがあったよ。こういうふうには……」

「これが、死んだおじいちゃんから聞いた話を絵にしたもの。絵はぜんぶで二十あるから順番に見て行ってね」

「いいかい。葬式の段取りを順を追って描いていくからね。長いけど、これを消さずに残しておくんだよ」

こんな具合にです。絵の上手な人や記憶力のいい人が尊敬されそうです。そういう人が芸術家の走りとか語り部（長い長い叙事詩を朗々と語る人をイメージしてください、あと話のうまい人とか、どこかで聞いてきた話をうまく語る人です、読み書きは必ずしもできなくてもよかったのです、強いて言えば後の物語作家とか作家のことです）だったのではないのでしょうか。

### 動きを誘いだす仕組みとしてのストーリー

つまり絵（視覚的イメージ）とともにストーリー（言葉）を語ることで、動きを誘い

だしているのです。自分と、その絵を見ている人たちの中にです。中というのは、体と頭だという気がします。動きが自分の中に移ってきて、体の中で「なぞる」という感じですが、同時に頭の中でも「なぞる」ように思えます。

このように絵と言葉（口承）が結びついていた時代が長かったと想像するのが適切ではないでしょうか。

絵は動きを喚起する装置だと言えるでしょう。どんな絵もそうでしょう。落書き、絵、イラスト、漫画、アニメ、映画、動画。描く、写す、撮影する、作るの差は程度の差であり、決定的な違いだとは考えられません。

大切なことは、ヒトの作った絵には、ストーリーとドラマがあるのです。ストーリーとドラマはたいてい言葉——話し言葉と表情と身振り（文字はずっと後のことでしょう）——として発せられる点が重要です。

広義の絵と言葉が不可分であるのは、現在も美術の世界で絵画をめぐるおびただしい言葉（ストーリーやドラマや感想や批評や解釈という形で）が語られているのを思いだせばお分かりいただけだと思います。映画、漫画、アニメ、動画もそうです。

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ（play）、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのは。ときどきもするのは。ぞくぞく、あらら、という感じ。そのために作られているのですから当然と言えば当然でしょう。

以上のように考えると、ヒトは動くものを手なずけたと言えそうです。そういうことにして、人類に花を持たせようではありませんか。私も人類の端くれです。

ヒトは動くものを手なずけた。ただし、その底には錯覚、遠隔操作、イメージの喚起（つまり想像、空想、妄想、幻想、幻覚）があることを忘れてはならないでしょう。

動いているものの代わりに動いていないもので済まして澄ましている——。この状況はビクともしていないのです。

## まとめ

動きからなる世界を、言葉はすくえないし既述できないのではないのでしょうか。言葉はつねに遅れます。追いつけないのです。ヒトの知覚と認知機能にとって、世界を「見る」とか「触れる」なんて荷が重すぎるから当然と言えば当然でしょう。

固定化を指向する言葉、とりわけ名詞（動詞も固定化した使い方をすると名詞と変わらない気がしますが、これについては別の記事に書きます）の不自然さと無謀は目に見えているというべきでしょうか。とはいえ、世界を固定化したいという夢が与える高揚感と、そうした固定化を錯覚させる言葉（とりわけ名詞）の魅力にヒトは勝てそうもありません。気持ちがいいほうに流れるのが人情というものです。

#動詞 # 名詞 # ストーリー # ドラマ # 絵 # 言葉 # 話し言葉 # 書き言葉# 文字 # 表情  
# 身振り

意味のある影、意味のない影



＊

意味のある影、意味のない影

星野廉

2022年8月5日 08:12

影も陰も姿も像も反射も、すべてがかげと呼ばれていることに気づきます。  
(拙文「「気づく」は「遅れる」と同時に起こっているのかもしれませんが。」より)

目次

影をうつす、影がうつる

一対一に対応する目映い影

言葉という影が、影という言葉に

正確に、細かく、うつす

現実をうつす

「似ている」の世界、「同じ（同一）」の世界

もっともっと鮮明にうつす

作られた影

筋書きやストーリーのある影

影に影を投影する

筋書きも、目的も、意味もない影たち

影をうつす、影がうつる

影といえば、映画や写真を避けて通るわけにはいきません。

幼いころに映画館で見た映画を思い出します。映画館が真っ暗なのです。いまの映画館は明るいです。

真っ暗な中で見る映画に惹きつけられ魅惑された記憶がかすかにあります。かすかで断片的なのですが、強烈なわくわくをともなう思い出なのです。

映画も本来は銀幕上に投げられた「影」なのです。その影に、人はいろいろなものを投影し重ねるわけです。影に影を重ねる映画の鑑賞はじつにスリリングな体験だと思います。

銀幕上の影に、言葉という影を重ねる行為もです。

＊

写真も影ですね。

私は映画にも写真にも疎いので、知っていることだけを頼りに書いてみようと思います。この記事のためにあえて調べ物はしないという意味です。

できるだけ、いまここにあるもので、ああでもないこうでもない、ああだこうだを試してみるつもりです。

映画、写真、映画用のカメラ、写真を撮るためのカメラ、望遠鏡、顕微鏡、影絵、幻灯、スライド、複写機。

思いつくままに並べましたが、広げすぎたみたいです。それぞれの仕組みについてはよく知りません。まったく知らないものもあります。ただわくわくします。

私は研究者でも探求者でもないので、分からないという気持ちと不思議だという思いを大切に、楽しみながら書いてみます。

気づくは、知るとか悟るとか分かるとは違う気がします。私には、気づくのほうはずっと大切に思えます。目に見えないものを求めて目を宙や彼方に向けるのではなく、目の前にあって気づかないものに目を向けたいのです。



分からないときには知ろうとしたり分かろうとするのではなく、気づかないものに目を向ける。これが私には合っているようです。横着なのでしょうね。

### 一対一に対応する目映い影

話を映画と写真に絞ります。ざっくりと両方とも影だという前提で話を進めます。映画と写真で思いだすのが、写像という言葉です。中学か高校か覚えていないのですが、たしか数学の授業で聞きました。

ぼんやりとしたイメージは、AというグループとBというグループがあって、それぞれの構成要素が一対一で対応しているとか、多対一とか、そんな話だったと記憶しています。

調べれば真偽が明らかになるのですが、あえて調べずに、いま述べたイメージに沿って書いてみます。

大切なのは、一対一で対応するという話です。とても刺激的なイメージです。

昔の写真で、すごい解像度のものをテレビで見たことがあります。モノクロで見るから古い写真なのですが、細部が半端じゃなく鮮明なのです。鉱山の写真だった気がします。

集合写真もあったのですが、百人近い人たちが会しているのです。その一人ひとりの顔がそれなりにはっきりと写っていました。

写真は影なのに目映いくらい映えるのです。「映る」は「映える」。人が写し映した人工の影だから、映えるし生えるし栄えるのです。

一対一に対応することを押しすすめた、人のつくる影はあまりにも目映く、人が追いつけないくらいに鮮明なのです。

## 言葉という影が、影という言葉に

ここで頭の整理のために、「うつる・うつす」を使って作文をしてみます。言葉は文の中で生きるからです。「うつる・うつす」とは？　なんて考えても何も出てきそうにありません。

写真に姿が写る。母と写っている写真はこれしかない。このページに裏ページの絵が写っている。

板書をノートに写した。写本。写経。筆写。書写。複写。写生。

鏡に顔が映る。水面に木の姿が映る。影が壁に映る。障子に人の影が映る。この辺はテレビがよく映らない。テレビにあなたの家が映ったよ。目に映る像。

プロジェクターを壁に直接投影する。プロジェクター映像を白い壁に映す。映写機。

＊

難しいですね。こういうのは苦手です。辞書や用字用語集を参照しないと作文できません。大ざっぱな表記と言葉の使い方がつかめたので、これでよしとしましょう。

＊

影には「物の姿」という意味もあるのですね。

上の例文を見ていると、言葉は影だどつくづく感じます。影という言葉が言葉という影に擬態して、表情豊かに影の舞と言葉の揺らぎを演じている。そんな気がします。

言葉という音声の波や文字の形にも、影という光の濃淡にも、それが外にある限りは意味がないのです。それでいて、外にない限りは見て確認することができない。意味は人の中にある揺らぎではないか。そんな気がしてなりません。気がするだけです。

影は言葉をなぞる。言葉は影をなぞる。なぞるはなぞ、鏡にうつる影のように永遠に解けない謎。

影を前にして、人はなぞるしかなさそうです。

### 正確に、細かく、うつす

上の作文を見ていると、話が大きくなり、どんどん広がりそうな予感がするので、なるべく広げないようにします。

私にとっていちばん大切というか興味深いのは、一対一に対応することなのです。

映画も写真も一対一に対応させるのが目的で作ったものだという気がします。言い換えると、風景や物を正確に、しかも細かく、そのままに「うつす」ということでしょう。

「そのまま」というのは曖昧な言い方ですが、今回は深入りしないでおきます。これを本気で考えるのは素人には無理だという気がします。わくわくしないし、楽しくもなさそうです。

### 現実をうつす

物や風景を写真という形で、一対一に対応させる。

あっさり書きましたが、すごいことです。気が遠くなりそうになります。現実を「うつす」、つまり写し映し移すわけです。そんなことが可能とは思えないだけに、すごいなあと感心してしまう自分がいます。

うさんくさいのです。荒唐無稽にも感じられます。平たく言えば、「うっそー！」です。「ありえない」です。「よく言うよ」とも思います。

現実を「うつす」のですよ。信じられません。少なくとも私には。

＊

現実とは現実。現実と写真は違う。現実と映画は違う。写真は写真。映画は映画。ですよ。

現実とは現実。現実と絵画は違う。絵画は絵画。ですよ。

現実とは現実。物は物。言葉は言葉。言葉は現実ではない。言葉は物ではない。ですよ。

でも、そうじゃないと思っているらしい人が多い気がします。尋ねたことがないので知りません。想像しているだけです。

似ているとは思いますが、同じとは思いませんが、似ているし、激似、酷似、そっくりだと思えるときもあります。

だから、写真や映画やパソコンやスマホの映像や動画を見て、わくわくぞくぞくはらはら、それに心臓バクバクもします。燃えるし、萌えるし、もよおしもします。

でも、両者は違うと思います。同じとは言えない気がします。でも、似ていることは確かです。似ていると同じは違います。

## 「似ている」の世界、「同じ（同一）」の世界

カフカ

ふつう「カ」（カタカナ）と「力」（漢字）は区別できません。「ロ」と「口」も区別できないでしょう。

＊

似ていると同じ（同一）は違います。

影は「似ている」の世界にいる（ある）と言えそうです。器具や器械や機械をつかわないと「同じ（同一）」を確認できない人間も「似ている」の世界に生きているのでしょう。

人は「似ている」という印象の世界（見える世界）から「同一（同じ）」の世界（観念の世界）を夢見ているのかも知れません。

### もっともっと鮮明にうつす

一対一に対応する。

うーむ。対応するのでしょうか。すかすか、まだら、まばらならできる気がします。解像度の問題でしょうか。

これくらい鮮明なら、ま、いっか。ここまでそっくりなんだから、ほぼ同じっぼい。いや、もっともっと、くっきりはっきり、リアルに。

欲張れば切りがないと思います。贅沢を覚えるとエスカレートしそうです。これ以上を望みたいとは思いません。

### 作られた影

写真や映画は作られた影です。地面や水面にうつった影とはそこが違います。

なんでわざわざ作ったのでしょうか。見るためにでしょうね。

何を見るためにでしょう。「そっくり」を見るためではないでしょうか。

「そっくり」を見るためには、正確で細かくなければなりません。解像度を高めるわけです。これは切りがありません。もっともっとになります。

(何にそっくりなのかといえば、現実にそっくりなのであり、同時にそれは人にそっくりであり、自分にそっくりなのだという気がします。このことについては、いつか記事として書いてみたいです。)

\*

作られた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。うつす紙やスクリーンにも枠というか限度があります。

無限に広がった紙やスクリーンにうつすわけにはいきません。人間、そこまで欲張ってはならないでしょう。

映画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間ですが、これは長いものを編集したもののようです。たとえば、ディレクターカットとか言いますよね。完全版も聞いたことがあります。トレーラー（予告編）もあります。

いろいろな編集が可能だけど、最終的にとりあえず作られ配給されたのが「作品」みたいです。それぞれ、長さ、つまり上映時間が異なると考えられます。

いずれにせよ、作られた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。空間と時間を切り取っているからでしょう。切り取ることにより、切り捨ててもいるにちがいません。

やはり作りものなのです。うさんくささがつきまといます。

### 筋書きやストーリーのある影

作られた影には筋書きやストーリーもありそうです。筋書きとは作られたものです。物語であり、フィクションのことです。

写真であれば目的やテーマです。つまり記念写真だとか、エロ写真だとか、可愛い動物とか、報道写真とか、ブロマイドとか（死語ですか？）、カボチャの成長の記録とか、

指名手配とか、漠然と「涼しげな風景」とか、キャプションみたいなのです。

映画であれば、作品名、あらすじ、脚本、受賞歴、批評家や映画誌での評価、ジャンル、成人向けか否か、サウンドトラック……、あとが続きませんが、いろいろありそうです。とにかく、目的やテーマのほかに、話というかストーリーがあります。

ネットなんかの動画であれば、情報カメラによる映像とか、お笑いとか、ユーチューバーの動画とか、PVとか、MVとか……、目的やテーマやジャンルや用途があります。

要するに、地面の影、水面の影、鏡に映った影（像）とは違って、何らかの目的やストーリーがあって作られているわけです。

＊

鏡像というのも、じつは作られた影ですね。そもそも鏡は作るものです。丹念に磨きあげて作ります。作られたものに映る影は特別なものであるはずですよ。

自然界で水面を覗きこむのとは一線を画してしかるべきだと思われまます。

鏡には枠があります。何らかの目的があって、作られているし、それぞれの目的があって各人が枠のある鏡を覗きこむわけですよ。目的があるのですから、その始まりと終わりという時間的な枠もあります。

お化粧、試着、顔色を見るため、歯磨き、うっとりするため、白髪を確認するため、毛の残り具合を確認するため、口内炎の状態を見るため、鼻毛を抜くため……。

ぱっとしない目的とストーリーですけど、ドラマがあることは確かですよ。じつに人間くさいドラマですよ。

＊

作られた影には作られたストーリーとドラマがある。

なんてまとめることができるかもしれません。したがって、筋書きがあるとも言えますし、フィクションであるとも言えそうです。

「そのまま」撮ったと言っても、ある視点から撮影したのであり、機器を用いる以上、修正と調整と加工と編集なしには撮影と再生はありえません。

また、作意も作為もノイズもアクシデントも、撮る者の意図なしに生じるものですから、撮ったものは（写し映したものは）、どうしてもフィクション（作り物）であり、偶然の産物になります。

こうしたことは、私のような素人がここで指摘するたぐいの話ではなく、現場で撮っていらっしゃる当事者の方々がいちばんよくご存じのはずです。

＊

ストーリーとドラマは動きです。広い意味でのプレイ (play)、つまり演技、演劇、ドラマ、遊戯、演奏、競技、パフォーマンスがつまっているとも言える気がします。

だから、わくわくするのは。どきどきするのは。ぞくぞく、あらら、という感じ。撮る側ではなく見る側の私はそれを楽しむだけです。

### 影に影を投影する

作られた影には、作られたストーリーがあるという話でした。そう考えると、やっぱり現実ではないわけです。作った物ですから当然です。フィクション、虚構です。

ましてや、一対一に対応しているなんて、まさにフィクションでしかないわけです。

＊





り、いろいろな物たちがあちこちに影を投げたり落としています。

映ったり写ったり移ったりする影たちもいます。誰かが動けば、何かが動けば影は移ります。揺れます。時の経過とともにもうつります。そうでなくても、つねにかすかに震えているのが分かります。

そこには筋書きもドラマもありません。

意味に疲れているからでしょうか。私は最近、意味のない影たちの意味のない揺らぎに心を動かされます。ほっとするのです。

影を前にして、人は迂回するしかなさそうです。おそらく言葉という影にまどわされながら、でしょう。人が（に）先立つ影に、人が導かれるはずがありません。人は影には追いつけません。気づくのにもいつも遅れるのです。全体像を目にすることさえできないのです。

ぼけーっと影をながめながら生きる。これは人に備わった健全な知恵だと思います。さもなければ壊れるでしょう。だから、ぼけーっとしているのです。私のことです。手遅れかもしれませんけど。

#言葉 # 日本語 # 影 # 鏡 # 絵 # 文学 # 芸術 # 映画 # 写真 # 意味 # 迂回

反意語の同意語は同意語ではないか



＊

## 反意語の同意語は同意語ではないか

星野廉

2022年8月3日 07:52

「消える」と「残る」が同時に並行して起きている。反対語なんて言葉の綾。ある事象の一面だけを取りあげた片手落ち。そんな気がします。事実誤認とまでは言いませんけど。冗談はさておき……

(拙文「「消える」と「残る」が並行して起きている」より)

冗談はさておき、「SとM」と書くと両者のあいだに反対の関係を見ることが多いように、「AとB」というぐあいに「と」でつながれたもの同士を反意語や対立関係にあるとみなすのが一種の紋切り型になっている気がします。

「と」をめぐるの、この辺の話は、蓮實重彦先生経由ジル・ドゥルーズ先生のご意見を参考にしています。(※詳しくは、拙文「ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると(その5)【引用の織物】」の冒頭をお読みください。)

以下は「AとB」というふうには、よくペアとして口にされたり文字にされる二つの言葉についての個人的な意見および感想を述べたものです。長いので、読むというよりも、ざっと目を通していただいだけでかまいません。太文字のところだけを流し読みしていただくのもいいと思います。

## 目次

- \*\* (1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。
- (2) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「範囲語」であるらしい。
- (3) AとBは、「反対語」というよりも、むしろ「相対語」であるらしい。
- (4) AとBは、「対義語」というよりも、むしろ「大儀語」であるらしい。

- (5) AとBは、「対義語」といよりも、むしろ「大疑語」であるらしい。
- (6) AとBは、「異義語」というよりも、むしろ「異議語」であるらしい。
- (7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。
- (8) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「別物」であるらしい。

アンチ・アンチ\*\*

- (1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。

写真のネガとポジが代表的な例。AからBへ、BからAへの移行が、ほぼ瞬間的に可能であるという特徴を持つ。また「一瞬にして自分を変える」「ポジティブをネガティブに転じる」に類似した、ある種の分野で用いられているレトリックもある。この中に含めてよさそうなペアの候補としては、愛と憎、快と不快、「いや＝だめ」と「ええ・はい＝いいわ・いいよ」、幸と不幸、うれピーとかなピー、味方と敵、友達と見知らぬ人、痴漢とたまたま電車内で隣合わせた人、前進と後退、後ろからと前から、進化と退化、などが怪しい。

- (2) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「範囲語」であるらしい。

AとBの意味の素（もと）は、かなり混じりあっているにもかかわらず、言葉の響きによって、反対の意味であるという印象を招いていると推測される。つまり、構成要素が同じ「範囲＝枠」の中で入り乱れている。構造的には、連続体という比喻も有効であろう。また、時間的推移により、構成要素間での位置関係が変化しやすい。また、そもそもペアが反意であるという根拠が薄い場合も、ここに含めていいと考えられる。変化に注目した場合には、プリズムのイメージが近い。見方や視点を変えると、異なったもののように知覚されるという特徴がある。正規品と類似品、オトナとコドモ、単数と複数、先生と生徒、悪人と善人、聖人と澆神（とくしん）者、聖人と俗人、超人とふつーの人、親と子、日本銀行と子ども銀行、本店の味と支店の味、すごい人と凡人、本物と偽物、本人と影武者、作者とゴーストライター、作家と編集者、本人と偽者、教科書と参考書、学校と予備校、天動説と地動説、「ヒトは空を飛べる」と「ヒトは空を飛べない」、幽霊の存在の肯定と幽霊の存在の否定、「(人間関係における)上」と「(人間関係における)下」、などが典型例かもしれない。この中に含めてよさそうな他のペアの候補としては、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、ハレとケ、「本当です」と「間違えました」、「本気です」と「冗談です」、飴と鞭、などが怪しい。

**(3) AとBは、「反対語」というよりも、むしろ「相対語」であるらしい。**

AとBとの間には、反対関係ではなく、相対的な位相が存在すると推察される。したがって、その階段のどこにいるかによって、反対関係とは言えない関係が生じる。多くの場合、測定器や測定用機器によって物理的に観察でき、かつまた数値化可能だという特徴を備えている。以下の典型例は、比喩としてではなく、物理的に確認可能な場合を想定していることに注意されたい。熱いと冷たい、暑いと寒い、右と左、無痛と苦痛（※SMではなく医学的意味で）、厚いと薄い、高いと低い、長いと短い、遠いと近い、SサイズとMサイズ、「でかい」と「ちっちゃい」、「これだけ」と「こんなに」、「あんだけ」と「こんだけ」、東洋と西洋、速いと遅い、すっぴんと厚化粧、など。

**(4) AとBは、「対義語」というよりも、むしろ「大儀語」であるらしい。**

AとBの間に、対立関係ないし反対関係を見出すことは容易に見えて、実は難しい。哲学、論理学、倫理学、数学、ひいては言葉遊びやレトリックのテーマとして、しばしば論じられてきたが、結論は出なかったもよう。これから先も、結論は出ないと予想される。この種の議論は、七面倒くさく、骨がおれ、徒労に終わることが特徴。一部のマニアおよびオタク向け。脳科学に救いを求める向きもあるが、その有効性は絶望的。典型例は、存在と無、時間と空間、有と無、虚と実、戦争と平和、現実と非現実、SとM、現実と仮想現実、フィクションとノンフィクション、正常と異常、事実と虚構、嘘と真（まこと）、愛と誠（まこと）、沢田みかと沢田まこと、始まりと終わり、正気と狂気、事実と意見、身体と精神、平面と局面、点と線、直線と曲線、罪と罰、天国と地獄、真実と解釈、この世とあの世、オトコとオンナ、キミたち女の子とボクたち男の子（※ただし、ここではオスとメスという生物学的要素を除いた抽象語）、など。

**(5) AとBは、「対義語」といよりも、むしろ「大疑語」であるらしい。**

大いに主観的な解釈が、さまざまな人たちによってなされている、大いに疑わしい上に、いかがわしいペアである。と解釈できる点が、疑わしさといかがわしさに輪をかけていると言えなくもない。(1)(2)(3)(4)、および次の(6)と重複する。典型例は、幸と不幸、前進と後退、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、虚と実、SとM、現実と非現実、嘘と真（まこと）、愛と誠（まこと）、早熟と赤ちゃん返り、こむら返りととんぼ返り、などが大いに疑わしい。

**(6) AとBは、「異義語」というよりも、むしろ「異議語」であるらしい。**

(※両者の漢字の違いをよく見ていただきたい、「異議申し立て」の「異議」。)

反対関係にあるのではなく、複数の利害関係者間の意見の相違や虚偽や策謀などが根底として存在する混乱や喧嘩であると推測される。悪態や罵倒で表現されるのが特徴。利害関係に基づくものであるために、しばしば同一ないし同様の表現として立ち現れる。例は以下の通り。「言った」と「言っていない」、「やったろー」と「やってねー」、「良かった」と「悪かった」、「関係ねー」と「責任とれ」、「おまえが悪い」と「おまえが悪い」、「失礼しちゃうわ」と「失礼しちゃうわ」、「とんでもないわ〜」と「とんでもないわ〜」、「おだまり」と「おだまり」、「ケチ」と「ケチ」、「ドケチ」と「ドケチ」、「馬鹿野郎」と「馬鹿野郎」、「あんたが言うな」と「おまえに言われたくない」、「今に見ている」と「今に見ている」、「真似すんな」と「真似すんな」、「馬鹿」と「アホ」、「おこ」と「おこ」、「激おこぷんぷん丸」と「激おこぷんぷん丸」、「冗談は顔だけにしろ」と「冗談はよしこさん」、など。

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

世界を「まだら」状にしか知覚および認識できない人間が、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると事実誤認および錯覚されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、知覚と錯覚、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、「記憶にございません」と「存じ上げております」、きれいと汚い、毒と薬、可能と不可能、シャチョーとペーパー、はじめしゃちょーと林家パー（※両者とも人間という意味）、林家パーと林家パー子、お偉いさんと市民、苦労人と元苦労人、玄人と素人、素人のど自慢と紅白歌合戦、濃いと薄い、あそこここ、善と悪（倫理的意味ではなく、この惑星に対しての人間の影響度）、神と悪魔（諸説あり）、異端と正統、温水と冷水、ヒトと動物、なまものといきもの、のろいとまじない（漢字にすると同じである点に留意されたい）、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、など。

(8) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「別物」であるらしい。

しかし、存在である以上、根本においては、つながっているとも推測される。ベクトルが違うのに、歴史的経緯、争い、錯覚、勘違い、事実誤認、陰謀によって、反対の関係があるとみなされているとおぼしきペア。典型例は、資本主義と共産主義、塩と砂糖、社会主義と共産主義、ウサギとカメ、SとM、毒味と薬味、白ペンキと黒ペンキ、〇〇教と△△教、〇〇派と△△派、〇〇流と△△流、一時期のテレビと一時期のラジオ、鏡



の中と鏡の外、北京と南京、東京と西京、大山くんと小山くん、ロミオとジュリエット、少年時代と少女時代、少女雑誌と少年雑誌、婦人服と紳士服、子供服と大人服、シロとクロ、黒子と白子、北酒場と南酒場、東武と西武、年末と年始、まなとかな、タロとジロ、など。

### アンチ・アンチ

戯言はさておき、こうやって眺めていると、私はどうやらアンチ反意語派みたいです。アンチ・アンチという感じでしょうか。平和主義者の同意語と考えていただければ幸いです。ですので、別に反意語に恨みはなく（苦手なことは確かですけど）、すべての言葉が愛おしいのです。あと、反意語の同意語は同意語ではないかなんて、このところよく考えます。

#戯言 # 反意語 # 同意語 # 言葉 # 蓮實重彦 # ジル・ドゥルーズ



樹影、言影、幻影



＊

樹影、言影、幻影

星野廉

2022年3月31日 08:09

目次

かげ、影、陰

言葉のかたち

記憶の風景、記憶のかたち

写生と描写

描写、なぞる

言葉の影、言葉というまぼろし

複写、複製、印影、拡散

外にある線をなぞる

かげ、影、陰

かげという言葉が好きです。「かげ、カゲ、影、陰、蔭、翳、景」という字面をみているだけで、気が遠くなりそうになります。

呼びさまされるイメージに圧倒されるのでしょうか、息が苦しくなり收拾がつかなくなるので、深呼吸をして心を静めます。

寝入り際に、かげについて思いをめぐらすことがあるのですが、そんなときには幸せな気分になります。

昨夜は、影と陰について考えていました。

大きな木の下を夢想しながら、かげについて考えていたのです。それを思いだしながら、文字にしてみます。

## 言葉のかたち

木の陰で木の影について思いをめぐらしていたのです。夢うつつの中での話です。

まず影と陰の違いを見てみましょう。影と陰の使い分けは、例文で見るのがいちばんです。以下の例文は私が作文したものです。

葉の落ちた地面に、木が影を落としている。

庭の池に木の影が映っている。

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

影は光をさえぎってできる、あるいは水や鏡に映った形や姿です。一方の陰は、日の当たっていない場所です。

＊

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

まず現実での体験があって、言葉は後という意味です。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

言葉、とりわけ文字は後付けです。理屈なのです。分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。

私は研究者でも探求者でもありません。ただ言葉が好きだけです。言葉の不思議さに取り憑かれているだけです。

こうやって言葉に付きあってもらっているだけで満足しています。

### 記憶の風景、記憶のかたち

昨夜の寝入り際の夢うつつの中で浮かんだ景色を、いま思いえがいています。

言葉にしてみます。

＊

草原を歩いていると、遠くに大きな木が見えた。近づいてみると、木のそばには池がある。草の生えた地面に木がくっきりとした影を落としている。

池には、その大きな木の先端の影が映っている。草で被われた地面に落ちている木の影が伸びて、水面に映る木の影につながっているように見えなくもない。

どうなっているのだろうと興味を覚え、歩を進めて木の陰の中に入った。地面に映った木の影が池に映った影と重なっている。

不思議な気持ちでそのさまに見入っていると、そばで何かが動いた気配がしてぎくりとした。

木の陰で身をひそめていたのか、猫がこちらを見ている。灰色っぽい毛の痩せた猫だ。

＊

この後に、寝入った記憶があります。昨夜と今朝の夢では影も陰も出てこなかった気がします。

## 写生と描写

以上の作文は、昨夜の寝際に浮かんだ風景を思いだしながら作ったものですが、読みかえてみると、その嘘っぽさに恥ずかしくなります。

記憶を頼りに何かを思いえがいたり、ましてやそれを言葉にすることの困難を実感しただけでなく、そこまでして言葉にしようとする自分の執念にたじろいでしまったのです。

影と陰について意識的になっているために取って付けたような作文になっています。いかにも作りものっぽいのです。

＊

文章を書くという行為は、ふつう室内でおこなわれます。私の場合には自宅の居間でパソコンを使って書くのが習慣になっています。

何かを、あるいは何らかの風景を見ながら、その場でノートやメモ帳にペンで書くとか、スマホに文字を入力して書くというのは想像しにくいです。

書くことを職業としている人なら、現場で取材メモを取るでしょう。いわば言葉によるデッサンでしょう。でも、清書するのは帰ってからの屋内だと思います。

俳句や短歌や短い詩の場合には、その場で言葉を口にして、何かに書きとめたりすることは十分に考えられます。俳句だとそのまま、作品になるのかもしれませんが。

写生という言葉が、明治になって俳句の関係者たちの間で口にされるようになったのは、分かりやすい展開だと言えるでしょう。

＊



絵画と文章を同列に扱うことはできませんが、デッサン、素描、写生、描写という共通の言葉で論じることは多いです。私もやっています。

文章の場合に話を限れば、その場で文字にして、以後手を加えないという写生は、きわめて稀な出来事だと思います。俳句くらいのものでしょうか。

デッサン、素描はあるでしょうが、後で清書することになります。さらには推敲もあるでしょう。

小説、エッセイ、新聞や雑誌の記事、ブログという形で、私たちが読む文章は、現場で撮られた写真とは異なり、現場から持ち帰ったメモや記憶を元にして描かれた絵に近いと言えます。

## 描写、なぞる

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。

(意外に思われるかもしれませんが、『夢十夜』を書いたときの夏目漱石は、このことにきわめて意識的であった節があります。夢日記の形を取りながらも、あの作品が夢の再現では断じてないからです。細部に見られる優れた描写に目を注げば一目瞭然なのです。)

その意味で、なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではありません。

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っているといふことなのです。影には

影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

### 言葉の影、言葉というまぼろし

木の影と似た言い方に樹影があります。木の影と木の陰だけでなく、木の姿という意味もあるようです。

樹齢二百年という、そのいちょうの樹影がピラミッドに見えた。

即席に作った文ですが、こんな使い方ができそうです。

＊

木という生き物、その木の姿である樹影、その木に日の光が当たって地面に移る影、その木にさえぎられてできる陰。そうした「かげ」たちは、木そのものではありません。

言葉は、それが指ししめしたり、名指す事物そのものではありません。その意味で、かげに似ている気がします。いわば言影です。勝手に作った言葉ですが、ことかげとか、ことえいとでも読みましょうか。

言葉には姿があります。文字のことです。文字は形であり姿ですが、文字には音（おん）も、語義も意味もイメージもあります。

音と意味とイメージは目に見えません。それなのに、音と意味とイメージには大きな存在感があります。

＊

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいだくことがあります。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえているという言い方もできるでしょう。

だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

### 複写、複製、印影、拡散

まるでまぼろしのようです。幻影のようです。見ているようで見えていない。見えていないようで見える。

まぼろしは見るものではなく、なぞるものではないでしょうか。なぞるのであれば、目をつむってもできそうです。

なぞることなら、日向もなく陰もない、したがって影もない闇の中でもできそうです。

なぞることなら、生きていない物でもできるのです。

＊

見ていなくても、闇の中でも、描写はできます。無生物も、描写ができます。

まぼろしはまぼろしも描けるのです。まぼろしでまぼろしを描くこともできるのです。

まぼろしをなぞる。さらに言うなら、なぞるをなぞる。

これは、人の外にある出来事であって、人の中に入ったり出たりすることがあっても、つまり人がなぞることはあっても、外そのものなのです。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械やA Iにも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいは外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

### 外にある線をなぞる

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

(人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。)

そして、複写。コピー（印影と呼びたいです）、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製=拡散が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいありません。

#影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 記憶 # 描写 # 写生 # デッサン # 文字 # 幻# 夏目漱石  
# 複製 # 拡散 # AI



「何？」ではなく「何か」





＊

「何？」ではなく「何か」

星野廉

2022年3月30日 08:09

目次

「何か」で保留して、とにかく書いてみる

「何？」は「ない」

「何？」ではなく「何か」

「何？」は判断停止と思考停止をもたらす

名詞ではなく動詞、定義ではなく用法

保留しながら、警戒を解かない

「誰？」と「誰か」もあります

最後に

「何か」で保留して、とにかく書いてみる

今回は、「何か」と「何」についてお話しします。

とはいえ、漠然としていますから、たぶんみなさんが日々実践なさっている「書くこと」とからめて話を進めていきます。

＊

何かを書きたいと思っている。でも、何を書けばいいのか分からない。

いま使った「何か」と「何？」は違います。日本語では似ていますが、英語では「何か」は something に、「何？」は what に相当しますね。

「何か」は保留の言葉で、「何？」は追求の言葉だと考えると分かりやすいのではないのでしょうか。

「〇〇とは何なのか？」なんてしんどいです。エスカレートすると哲学とか宗教になります。

しかも答えはたいてい出ません。哲学や宗教でも文学でも出ていません。「出た」言っている人と、それを信じる人と、「出た」と思っている人と、それを信じたい人がいるだけです。

人はまず「〇△X」という言葉を作り、その次に「〇△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物だからです。

後手に回って、ああでもないこうでもない、ああだこうだをやっていきます。「〇△X」をめぐっての堂々めぐりをえんえんとやっているのです。

正確に言うと、「〇△X」という言葉はあっても、その意味は決まっていないのです。

意味は「ある」のではなく「決める」ものです。「ない」から決めるのですが、「ない」ものを決めるのですから、これだけいろいろな人がいれば争いが起きるに決まっています。

**「何？」は「ない」**

「何？」は、じつは「ない」なのです。

「ない」から「何？」と問うわけですが、「ない」ものを「何？」なんて考えるのは、アホらしくありませんか？

「何？」なんて、やっかいなものを背負う必要はありません。「何か」というぼかしの言葉であり、保留の言葉を使いましょう。

＊

とはいうものの、人はなんで書くのでしょうか。気になりますよね。

「何か」を使って保留しながら考えてみましょう。

「何？」ではなく「何か」

ものを書いている人なら、誰もが「何か」でありたいし、「何か」を書きたいのではないのでしょうか。その「何か」は人それぞれですから、自分の好きな、あるいは信じている「何か」を意識したり目指すのだろうと考えられます。

でも、なんで書くのでしょうか。

それがわからないから書く。これもありだと思いますし、げんにそういう気持ちで書いているらしき人がいます。

＊

私はといえば、たぶん、自分の中にある「何か」のために書くのだという気がします。それは自分にしかわからないというよりも、自分にもわからない予感があります。

誰もが「何か」でありたいし、「何か」を書きたいのではないのでしょうか——この「何か」でありたいの「何か」も、「何か」を書きたいの「何か」も、外から来るものです。借り物なのです。

たとえば、作家や詩人という名称も、小説や詩というジャンルも——あるいは、たんに書き手やユーザーであったり、たんに作品や記事であったとしても——、それは誰にとっても生まれたときにすでにあった「外」なのです。だから、借りるしかありません。自分のものではなく占有できないという意味です。言葉と似ています。いや、まさに言葉なのでしょう。

その外から来る「何か」を、自分の中にある「何か」が迎えるのではないのでしょうか。

迎え入れ、ひょっとすると迎え撃つのかもかもしれません。自分の中にあっても、その「何か」はふつうは不明だという気がします。何なのかわからないのです。心や魂に似ています。たぶん、それなのでしょう。

書いてみないとわからない。書いた結果、書けたものを見てもわからないかもしれません。内容はどうであっても、何かが書ければ書いたという達成感はあるにちがいません。

とにかく書いてみないとわからない。書いた者勝ち。

### 「何？」は判断停止と思考停止をもたらす

ここでいったん整理します。

\*

「何か」という言葉を使って保留して、扎扎实り行動だけするのです。「何？」にこだわっていると、行動ができません。

じつは「何？」にこだわると思考停止と判断停止におちいるのです。おちいつている本人は気づきません。

頑張っている感にとらわれているからです。やってる感の虜（とりこ）になっているという意味です。

一方、「何か」で行動している間は、思考も判断も生きています。体が動いているからです。

試してみましよう。

「何？」「何なの？」（what? でもいいです）と口に出してみてください。緊張して、体が動かなくなります。追求しているからです。

今度は「何か」(something でもいいです)と言ってみてください。体から力が抜けて、楽になります。保留しているからです。

\*

大切なことなので繰り返します。

眉をひそめて、「〇〇とは何ぞや?」とか「〇〇とは何か?」なんていうふう、「何?」と「とは」にとらわれている人は、じつは考えていないのです。

動いていないからです。詳しく言うと、身体が動いていないからです。身体に力だけが入り、動いていないのです。

「何か?」を使って保留して、楽な気持ちで動きつづける。これが、「考える」です。

保留するのですから、名詞ではなく、結論や帰結ではありません。動詞であり、過程であり、絶え間ない動きの中にある、うつろいなのです。

動いていると、つぎつぎと考えが浮かびます。まとめる必要はありません。まとめようとすると止まります。動いていることが大切です。

\*

何でもいいです。好きなものを書きましょう。そうすれば「何か」がぜったいに書けます。その結果として書けた「何か」が「何か」なのかは他人が決めるのですが、書いた者勝ちです。

ペンを動かしましょう。キーボードを叩きましょう。あなたの「何か」のために。それは、たぶん、あなたの中の「何か」のためなのです。

疲れたときには、何も決めないでいる、あるいは何も書かない。これも大切です。

## 名詞ではなく動詞、定義ではなく用法

そう言われてもね、やっぱり「愛って何だろう？」って考えちゃうの。

その気持ちはよく分かります。愛という名詞ではなく、「愛する」という動詞で考えたらどうでしょう？

愛する、愛さない、愛します、愛するとき、愛せば、愛せよ

こういう活用がありますが、活用を活用しましょう。これを使って作文をするだけでも思考停止から行動に移せます。

動詞は文字どおり、動きです。思考を固定しないことがコツです。

「愛」「愛する」を検索して、その定義ではなく使われ方を見るのもお勧めです。

詳しくは、拙文「自分を探して、愛を探して」と「名詞的なもの、動詞的なもの」をご覧ください。

## 保留しながら、警戒を解かない

まとめます。

\*

得体の知れないもの、何なのか分からないけど怖いもの、とにかく不気味なもの、不思議なもの、気になるもの——。

こうしたものは、とりあえず「何か」と呼んで保留しましょう。

「何なのか？」と追求してはなりません。追求している間に、動けなくなるからです。金縛りみたいなものです。

＊

ところで、冒頭近くで述べたように、そもそも「何？」は「ない」なので、堂々めぐりになるだけです。

「何？」は、じつは「ない」なのです。

「ない」から「何？」と問うわけですが、「ない」ものを「何？」なんて考えるのは、アホらしくありませんか？

(※この辺のお話に興味がある方は、拙文「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】の「何って何？」と「意味禍が終わるとき」をお読みください。)

「ない」ものを「何？」と問い、考えるという堂々めぐりに依存している人はいます。

つらそうな顔をしてじつは嬉々としてやっているようなので、本人が幸せならば、それでいいとは思いますが、本当につらい人には、依存を絶つという選択をお勧めします。

保留にしたまま、警戒を解かずにいる。これが「何か」を相手にするときのコツなのです。

**「誰？」と「誰か」もあります**

そうそう、もう一つ付けくわえたいことがあります。

「何？」をお仕事になさっている人もいます。お金になるからです（誰もができるわけではなく非凡な商才が必要ですし、プレゼンと演技力がうまくなければなりません）。

その人に本気で付き合うと馬鹿を見ます。下手をすると自分が壊れます。もちろん、お金もかかります。

誰でしょう？

誰とは申しません。ご自分で考えてみてください。

組織や集団の場合もあるでしょう。

そういう人たちは演技がうまいですから、眉をひそめてもっともらしい顔つきをしているかもしれません。考えているポーズが得意なのです。やってる感ですね。

よく観察してください。観察することは考えることでもあります（「観察」という文字を見てください、ぼーっと見ることはありません）。

＊

「何？」は商品ですから、「何？」をつぎつぎと生産します。

本人が考えているわけではありませんから、つぎつぎと「何？」を引用し、継ぎ接ぎします。まとめるだけですから、日替わりメニューも珍しくありません。

そう言えば、無料で「何？」を配っている人もいます。なぜかは不明です。引用しまとめて配るという行為に依存しているのかもしれませんが。いつかいいことがあると夢見ている節もあります。

「誰？」ではなく「誰か」さんですよ。「何？」と「何か」の人間バージョンです。

保留して考えてみればいいのです。というか考えるのではなく観察しつづけるのです。決めることはないです。どんどん姿を変えるかもしれなせん。

いっしょにいて苦しくなるとか、付き合っていてつらい人かもしれませんね。

人それぞれですから、商品としての「何？」が生き甲斐になる人もいます。大切なことは、それが自分にどう働きかけるかでしょう。自分の体に聞いてみてください。



## 最後に

話を戻します。

保留にしたまま、警戒を解かずにいる。これが「何か」を相手にするときのコツなのです。

名づけて、手なずけたつもりになったときがいちばん怖いのです。チョロいものだと、気が緩み警戒を解いてしまうからです。

そうです、上で述べた判断停止と思考停止のことです。これが、おそらく、相手よりも怖いのです。

意外と、敵は自分の中にある、またはいるのかもしれないね。

さあ、動きましょう。体を動かしましょう。考えが浮かびますよ。

お読みいただき、ありがとうございました。

※この記事は、以下の記事を編集したものです。

- \* 【小話】 自分の中にある「何か」のために書く
- \* 「何か」と「何」から身をかかわす
- \* 【小話】 あえて「何か」を決める、あえて「何か」を決めない
- \* 「とは」は、永久に
- \* 「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】 ←おすすめします

#言葉 #意味 #代名詞 #名詞 #判断停止 #思考停止# 行動



たつ、立つ、竜、凧揚げ、竜田揚げ



＊

たつ、立つ、竜、凧揚げ、竜田揚げ

星野廉

2022年3月28日 11:25

「立つ」はヒトにとって特別な動作のようです。

なにしろ、聞くところによると、おさるさんに近かった大昔のヒトは四つ足歩行をしていたり、木や枝につかまって移動したり休んでいたたり、横になっていたらしいのです。

(拙文「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】より引用)

＊

立つというと竜を連想します。発音が同じだからというのがありますが、空にのぼる竜というイメージが浮かぶからだという気もします。

いま「空にのぼる竜」と書いたのは「のぼる」に当てる漢字に自信がなかったからです。

当て字のことです。宛て字というふうに「宛」をあてる場合もあります。あてじは当てになりません。根本にこじつけ（故事付け）があるからです。

私は漱石のあて字が大好きです。自在な連想と遊び心を感じます。硬直した表記は屈でなりません。

＊

「のぼりりゅう」を辞書で調べてみました。

広辞苑では「昇り竜」と「登り竜」の両方の表記が載っていました。

「のぼる・上る・登る・昇る」というわけです。「りゅう」も「竜」と「龍」があります。それぞれ「たつ」とも読みます。

「竜」はまさに絵ですね。こんな分け方をしているのか知りませんが、頭と胴と尻尾まで見えます。具象と姿を感じます。こっちを「たつ」と呼びたいし読みたいです。

「龍」はかっこいいですね。偏と旁があっても文字らしく（文字だから当たり前ですけど）、「たつ」と「りゅう」の抽象と概念を感じます。あえて、こちらを「りゅう」と読みたい気分です。

「のぼる・上る」といえば、「あがる・上がる・揚がる・挙がる・騰（が）る」を思いだします。

＊

「たつ」と「のぼる」と「あがる」は、基本的に上への垂直運動ですが、「たつ」には上昇運動以外の動作があります。

「立つ、建つ・起つ・勃つ、発つ・経つ・絶つ・断つ、裁つ、截つ」となりますが、発音の同じものを並べただけで、意味や語源につながりがないものも含めてあります。

語源や語義よりも、連想を大切にしたいのです。

連想は蘊蓄とか含蓄とは遠いものです。連想は傾けたり垂れるものではありません。漏れる感じですか。気がつくと出ているのです。

＊

「Aだから、Bだから、Cだから、Dだから……」という論理っぽいつながりではなく、

また「Aして、次にBして、それでもってCして、それからDして……」という物語っぽい流れでもなく、「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」という運ばれ方に惹かれます。

どっちつかず、どちらでもない。フラットでニュートラルな関係です。

何ものかに身をゆだね、まかせるのです。

\*

こういうのは、私のような凡才が仕組んだり企むとうまくいきません。

仕組んでうまくいくのは才能だと思います。

天才とは言いません。というか言えません。天才を見抜くには天才が必要だからです（私は「〇〇は天才だ」と言ったことはありません、あと「〇〇は△△の神だ」もそうです、両方とも重い言葉です）。

ただまかせるだけです。

\*

たつ

立つ

竜

のぼる

あがる

こうやって言葉を並べてながめているのが好きです。わくわくします。

漏れ出る気配も覚えます。もよおすのです。

\*

いろいろなイメージが浮かびます。視覚的なイメージであったり、音としての言葉の断片であったり、文字であったりします。

竜ではなく龍という文字が墨で書かれた凧（たこ）があがるさまも目に浮かびました。

凧揚げと書きますね。

凧が上がる、凧を揚げる。

こうなるみたいです。

＊

蛸を揚げる。

つまり、「たこをあげる」という音（おん）と、蛸の天ぶらを揚げる光景が同時に浮かびました。

こういう「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の偶然の出会い」を大切にしたいと思います。

＊

凧を揚げると言えば、竜田揚げを挙げないわけにはまいりません。

たったいま気づきました。

唐揚げのことですね。からあげ、空揚げ、唐揚げ。

空揚げで凧を揚げるに戻りました。

＊

大した意味はありません。落ちもないです。

凧が落ちてくる光景が目には浮かびましたが、気のせいでしょう。



#言葉 # 日記 # 日本語 # 漢字 # 連想# イメージ # 宛て字 # 当て字 # こじつけ



「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】



＊

「何か」が立ちあらわれるとき【引用の織物】

星野廉

2022年3月26日 11:44

「何か」が立ちあらわれる。

この何だか不穏な響きのするフレーズを、「何か」、「立つ」、「あらわれる」というふうに分けて考えてみます。

これまでの記事のダイジェストです。

目次

立ちあらわれる

あらわれたものは、しつこく居直り居続ける

「立つ」は非常事態

「何か」が立ちあらわれるとき

何って何？

意味禍が終わるとき

立ちあらわれる

意味とは働きかけなのだと思います。通じないかもしれない相手や対象に働きかけたとき、意味が立ちあらわれる気がします。通じないかもしれない——。その意味で賭けなのです。

(拙文「意味が立ちあらわれるとき」より引用)

「意味が立ちあらわれる」というフレーズを書いたのが切っ掛けで、「立つ」に興味湧き、連日記事を書いていました。

「あらわれる」はおもしろい働きをする言葉です。それにくっついている「立つ」はどんな働きをするのか、と気になったのです。

### あらわれたものは、しつこく居直り居続ける

「あらわれる」を「出る」とくらべて見てみましょう。

・出たものは「静止」してはいない。

(拙文「【小話】出たものは「静止」してはいないという話」より引用)

この点に、注目していただきたいのです。「でる・出る」に似た言葉で「あらわれる・現れる・表れる・顕れる」があります。でも、両者は微妙に異なっているようです。まず、「出る」から、具体的に見ていきましょう。次に「○○は出る」という言い方をする「○○」を挙げ、いったん「出た」後にどうなるかを考えてみましょう。

いったん「出た」ものは、必ず、何らかの運動に誘発されます。たとえば、いったん「出た」給料も、給付金も、保険金も、うんちも、太陽も、月も、声も、にきびも、幽霊も、新刊書も、選挙候補者も、テレビドラマの役者も、家出したお父さんや、家出したお母さんや、出家したおじさんや、家出したお子さんも、火も、くいも、そのまま静止し続けることはありません。

一方、「○○はあらわれる」という言い方をする「○○」を挙げ、いったん「あらわれた」後にどうなるかを考えてみます。

いったん「あらわれた」ものは、「出た」ものとは異なり、静止したまましつこく居座ることも、往々にしてありそうなのです。真価、効果、正体、正義の味方、英雄、悪の権化、○○の神様、救世主、影響、才能、成果、結果などです。もっとも、影響や結果みたいに、「出る」とも言うものは、概して「不安定」な気がします。

\*

このように「あらわれる」は、つぎに「しつこく居続ける」という展開になりやすい

のではないかと思います。

### 「立つ」は非常事態

「立つ」はただ垂直の動きを示すだけではないようです。語弊や垢がありますが、使い方によっては語弊や垢を招くという意味です。

(拙文「赤ちゃんが立つとき」より引用)

文字どおりに取れない、言葉どおりに取れないということですから、一種の比喩みたいにレトリックになってしまう。言葉の綾になってしまうとも言えます。

「立つ」はヒトにとって特別な動作のようです。

なにしろ、聞くところによると、おさるさんに近かった大昔のヒトは四つ足歩行をしていたり、木や枝につかまって移動したり休んでいたりと、横になっていたらしいのです。

\*

みなさんはいま、どんな格好をなさっていますか？ 座っていたり、横になっていたりと、何かに寄りかかっているのではないのでしょうか。

直立不動の方は少ないと想像しています。直立不動は、意外とつらいものです。歩いているほうがまだましです。

立つには、力が要ります。筋力も要るし、入れた力を維持しなければなりません。

緊張もします。気が張りつめるわけですから。大げさに言うと殺気立っているのです。

立つという体勢は人にとって不自然なものだと言いたくなります。一時的な姿勢であって、いつまでも立っているなんてありえないのです。弁慶さんじゃあるまいし。いつかは倒れます。横たわります。

行き倒れ、野垂れ死に、仰臥、往生、大往生。

瞑目合掌。

＊

立っていると、あるいは立って歩いているときに覚える緊張感は、大昔のヒトの時代から蓄積された記憶から来ているのかもしれませんが。

立った状態で何かをしていると、びくびくする自分の一部を感じます。襲われるかもしれない恐怖と言いましょか。何にって、敵です。

「立つ」は非常事態なのです。そのときの人の神経は普通じゃないのです。

いろいろな意味で。

＊

「立つ」は、人にとって特権的な意味を持つ動作のようです。

### 「何か」が立ちあらわれるとき

「何に？」（追求）と問うことは、得体の知れない「何か」（保留）に挑戦することです。

（拙文「「何か」と「何」から身をかかわす」より引用）

その「何か」（保留）は、世界だったり宇宙だったり真理だったりするでしょう。運命や神だと言う人もいるでしょう。

保留を追求するなんて、眠っている子をわざわざ起こすようなものです。

本気でやろうとすれば、世界を背負うことに匹敵します。大昔とか昔に、超エリート中のエリート（いわゆる「昔の」「偉い人」のことです）が世界を背負おうとしました。現在古典と呼ばれているものを書いた人のようです。



いまはどうなのかは知りません。というか、いまは、世界を背負おうとする「偉い人」は必要とされていないもようです。古典で十分みたいです。

いずれにせよ、「何に？」や「何？」（追求）と問うのはしんどいということでしょう。半端じゃなくしんどいにちがいありません。

\*

「何？」（追求）にしろ、「何か」（保留）にしろ、「何（か）」を保留している点は同じです。

要するに、ぼかしているのです。「何」という代名詞は「ぼかし」であり、映像に施す例のモザイクと同じだという意味です。

ベールに包むという言い方もできるでしょう。

あえて見ない、無視する、深追いしない、すっとぼける、曖昧放置、「さあね」、「そう言えばそういうのがあったけど知らない」という感じ。

なぜでしょう？

怖いからです。

下手に手を出せば噛まれるどころか、襲われてひどい目に遭うことを本能的に察したときに、「何（か）」を使うのです。

\*

何かが立ちあらわれる。

「何か」（ぼかし・保留）

が

「立ち」(非常事態)

「あられる」(しつこく居続けます)

\*

怖いものを、ぼかしておいて、それがしつこく居直り居続けますよ、と非常事態宣言をしているのです。

この怖いものは何だか分かりません。正体不明だからこそ、よけいに怖いのです。

しかも、どうやら、いたるところにいそうなのです。いろんな姿と形をしてあられそうなのです。

とりあえずは、「何か」としか言いようがないのです。

めちゃくちゃ怖いものが、あられていますよ、その後いつまでもずっと残るのです、気をつけましょう。

それがこのフレーズのメッセージです。

**何って何？**

何って何なのでしょう？

気になりますよね。

めちゃくちゃ怖いものって何でしょう？ ぼかしを入れなければならないほどヤバイものなののでしょうか？

それがあられているなんて、気味が悪すぎます。後を引くみたいだなんて、気になってなりません。

＊

何なのでしょう？

知りません。なんて言うと、叱られそうなので、言いますけど、意味なんです。異味であり、忌みであり、齋であり、イミです。

＊

世界中の図書館に必ずある本は何でしょう？

聖書ですか？ たしかに世界のベストセラーといわれています。なにしろ翻訳という武器があるために、その言語および方言別バージョンがめちゃくちゃたくさんあります。

でも、文化や地域によって異なるでしょうね。

辞書なんです。これはどんな小さな図書館にもありそうです。各家庭にあっても驚きません。

辞書には何が書いてありますか？ そうですね、意味です。正確には語義ですけど、意味です。

意味にも意味があります。手元の辞書でお調べください。ちなみに、無意味にも意味があります。辞書に載っています。

恐ろしいですね。

え？ ぜんぜん怖くない、ですか？

＊

意味の恐ろしさと重大性を体感するのにいい方法があります。

note のカテゴリの一覧をご覧ください。

項目がたくさんありますね。

どれも、意味を求めたり、考えたり、知ろうとしたり、分かってほしいとしたりしていませんか（カテゴリは分かれています、あれは分かってほしいとされているからにほかなりませんか）？

なぜでしょう？

得体が知れないからです。分からないし（分けられないし）、答えが出ないから（誰か出していますか）、です。不明なのです。

しかも、いつどこでどういう形を取るかは分かりません。特定できないのです。

要するに怖いのです。でも、怖いことはふつう隠します。ぼかします。かっこ悪いからでしょう。

分からない、知らないと同じく、怖いというのは体裁が悪いのです。ヒトはプライドが高い生き物です。だから隠します。自分を見ているの感想です。

あと、忘れていたり、気づかないこともよくあります。忘れていました。

## 意味禍が終わるとき

人は意味に取り憑かれています。

意味禍はヒトが言葉を持ってしまっただけでずっと続いています。

文字を持って、意味禍に拍車がかかりました。

まさに、あらわれて、しつこく居直り居続けいるではありませんか。

それなのに、「何（か）」としか言えないのです。分からないままなのです。

さっき「意味」だって言ったじゃないか？　そうおっしゃるのも当然ですが、意味には意味がないのです。ナンセンス。ここだけの話ですが、そういう不条理で荒唐無稽で

理不尽とも言える話なのです。

でも、ナンセンス、無意味ほど怖いものはこの世に——ヒトの世のことです——ないので。無意味という深淵を覗きこむと危ういことになるからです。覗いちゃ駄目です。

そんなわけで、意味とか無意味と名指したところで——どちらも同じです——意味はないのです。「何か」と保留したほうが何かと都合がいいのです。

保留にしたまま、警戒を解かずにいる。これが「何か」を相手にするときのコツなのです。

名づけて、手なずけたつもりになったときがいちばん怖いのです。チョロいものだと、気が緩み警戒を解いてしまうからです。

そうです、お察しの通り、判断停止と思考停止のことです。これが、おそらく、相手よりも怖いのです。

＊

「何かが立ちあらわれる」——これはいまもいたるところで起きているのです。その意味では、私たちの友だちでもあるのです。

でも、舐めてはいけません。本質は怖いものですから。しかもその姿形はうつろい、変わるのです。いたるところで姿を変えてあらわれるというのです。

そんなどっちつかずの性質を持っていますから、逆に言うと、特定するのは賢明な方法ではありません。「何か」と保留したまま、備えるのがいちばんです。

意味禍は終わりそうもありません。いや、終わる危険に、いまさらされています。この星からヒトがいなくなれば、意味は消えます。

あなたのいちばん古い友だちです。私たちみんなの古くからの友だちです。

仲良くしましょう。さいごまでいてくれますよ。あなたのさいごまで、私たちのさいごまで。

(拙文「世界にシンクロする」より引用)

この意味はお分かりになりますよね？

しつこく居直り居続けるものが立ちあらわれた以上、立ちあがる時は今だと思います。非常事態です。

※連日長い記事を投稿して申し訳ありませんでした。今回のダイジェスト記事が、いちばん言いたかったことです。

取り組んでいるテーマを外さないように努めた上で、できるだけ分かりやすく書いたつもりです。お読みいただき、ありがとうございました。

#言葉 # 意味 # メッセージ # 辞書 # 代名詞

世界にシンクロする





＊

世界にシンクロする

星野廉

2022年3月26日 09:48

目次

動作と表情と言葉にシンクロする

真似ないで真似ている

言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

抽象、具象、生命

二つの横たわるのあいだで

届いていますか、通じていますか？

道具ではない、しもべや奴隷ではない

道具ではなく友だち

顔

動作と表情と言葉にシンクロする

寝る・横たわる、座る・座りこむ。

ところで、これまでにたくさんの人によって繰りかえされてきた抗議の動作と行動は、届いたのでしょうか、通じたのでしょうか。

そもそも動作や身振りや表情は、届くのでしょうか、通じるのでしょうか？

(拙文「意思表示としての動作」より引用)

私たちは、知らず知らずのうちに、同じような動作や身振りや仕草や表情をしている気がします。

しかも世界中で太古から繰り返されてきた、動作や身振りや表情なのです。

\*

音声や動作や身振りや表情はヒトだけのものではありません。

あくびを考えてみてください。ワンコだってニャンコだってハムスターだってあくびをします。サルやゴリラだと、しかめっ面もします。

四つ足で立つ、四つ足で歩く、二つ足で立つ、二つ足で歩く、寄っかかる、座る、腰かける、走る、投げる、跳ぶ、泳ぐ、這い回る、体を掻く。

ヒトに特権的な動作に見える「立つ」に注目すると、鳥が二足歩行できることに気づきます。

言葉が通じる相手であれば、言葉と言葉以外の言葉——身振り、仕草、表情（目、眉、口、鼻、顎や顔の筋肉の動き）、音声（叫ぶ、泣く、うめくなど）——、言葉が通じない相手であれば、言葉以外の言葉。

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる、だく・だかれる。

(中略)

いやし、安らぎ、怒り、悲しみ、よろこび、楽しさ、いらいら、もどかしさ、ままならさ、苦しみ、しあわせ、安心感、ただいっしょにいるという充実感。言葉にならない感情。

半年だけいっしょに暮らした犬のことを思い出します。言葉ではない言葉のやり取りがたくさんたくさんありました。こちらが話し言葉で話しかけても、それが相手に言葉として伝わっている保証はありません。

それでもこっちは伝わっていると勝手に思うこともありました。後付けで考えると、言葉以外の言葉も、外にあって、外から来るものなのですね。自分の中に入るのかもしれませんが、それは必ずしも思いどおりにならないという意味では、外なんです。

(拙文「言葉ではない言葉」より引用)

＊

生き物の最大の目的とされている生殖を考えてみましょう。子孫を残し殖やすために、鳴き、叫び、見つめ、耳を傾け、嗅ぎ、触れあい、動き、探し、獲り、食べ、飲み、戦い、競い……。

ヒトを含む生き物たちは互いに同期しているのではないのでしょうか。

私は詳しくないので立ち入れませんが、全生物が地理学的レベル、生物学的レベル、遺伝子的レベルで、シンクロし合っているような気がします。

生き物はこの星レベルで互いに同期している。地球レベルで互いにシンクロしている。そう言ってもいいのではないのでしょうか。

### 真似ないで真似ている

ヒトの目に見えるレベルで言えば、生き物たちは動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。

まるでお互いに見て真似し合っているように見えますが、まさかそれはないでしょう。ありえません。

同族の同集団内なら、親やまわりを真似て学習するというのはいえませんが、異族の異集団同士でそっくりなことをしているのは説明がつきそうにありません。

こういうことには、諸説ありという感じで、いろいろな分野の人がいろいろ言っているにちがひありませんが、私は私なりに考えてみたいのです。

＊

真似ないで真似ているとしか言えないのです。

このシンクロというか、模倣の反復というか、「似ている」の「増える」と「広がる」と「うつる」を動かしている、あるいは促し導いている「何か」を想定したくなります。

### 言葉の具象と抽象、表情と身振りの具象と抽象

話をヒトに限定します。

私たちは、お互いの動作や身振りや姿勢や表情にシンクロしているのです。覚えている場合もあるでしょうが、誰を真似たかはたいてい記憶になく不明でしょう。

その点では言葉に似ています。言葉の習得に似ています。言語や方言を限定すれば、言葉はそっくりなものです。文字であれば同一と言えます。

言葉は、誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

言葉が、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないでしょうか。ひょっとすると、言葉は自立しているのです。

この点でも、身振りや表情は、言葉にそっくりです。

＊

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージ

は、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいです。

人によっても、場所によっても、場合によっても、その時の気分によっても変わるし異なるでしょう。変異し変移し偏移し変位するのです。

どっちつかず、どっちにも転ぶ。こうした性質はニュートラルであり非人称的であるとも言えるでしょう。

人から離れているのです。人の外にあるのです。

\*

それでいて言葉も表情も身振りも、具象と抽象の両面を備えています。

文字で考えてみましょう。

文字はある意味で抽象ですから形だけでは存在できず、インクや墨や掻いた跡や画素の集まりという物質をともなうことによって、はじめて目に見えるのです。

電子的な複製の処理については知りませんが、文字として見る場合には、物質でもなければならぬと言えます。文字には抽象と物質の両面があるということですね。これが書き言葉つまり文字の二面性です。

話し言葉つまり音声も、声帯の振動、空気の振動、鼓膜の振動という形で伝わるわけですから、声帯、空気、鼓膜という物質と、振動や波という抽象の両面があると言えます。これが話し言葉つまり音声の二面性です。

表情と身振りは広義の視覚言語です。様子つまり形を目で見て認識します。

顔を含む身体という具象があり、その動きとしての形つまり抽象が視覚的に認識され

るわけです。

言葉においても、表情と身振りにおいても、意味とメッセージは、具象と抽象の織りなすからみ合いとして、人に立ちあらわれるのではないのでしょうか。

## 抽象、具象、生命

言葉と表情と身振りがヒトを含む生き物を離れていながらも、つまり生き物の外にありながら、人の中に入ったり出たりする。そして、人の思いどおりにならないニュートラルなものとしてある。

たぶん、それは具象と抽象の二面を備えた言葉と表情と身振りの抽象のなせるわざだという気がします。

だからシンクロの対象にもなるのであり、シンクロそのものでもあるのではないのでしょうか。

情報としての複製拡散と、生殖としての複製拡散も、その抽象の側面があって可能なのではないのでしょうか。

\*

ヒトと生き物たちという、具象としての生命体が消えたとき、抽象もまた消えるのだろう。

言い換えると、抽象は具象を場として、形をあらわすのではないか。ただし、その具象という場は物であってはならず、生命でなければならない。

これは、生命という具象を遺伝子レベルでの情報という抽象に置き換えてみると分かりやすいかもしれません。

いまはそんなふうを考えています。

## 二つの横たわるのあいだで

ヒトは生まれ落ちて横たわり、やがて立ち、歩き、座り、再び横たわって亡くなる。

最初の横たわると最後の横たわるという動作のあいだに、さまざまな動作や表情があるはずです。無数の言葉があるはずです。

世界中で人びとが、それらの動作と表情と言葉にシンクロする。シンクロが時空をまたいで繰り返される。これが歴史です。

人はそれらを真似たり、無意識にしたり、それらに何かの意味やメッセージを込めたりするのでしょ

うか。誰かの動作や表情を見て、何かを受け取ったり、その意味を考えたり、迷ったり、受け損ねたり、見過ごしたり、無視したりするのでしょ

## 届いていますか、通じていますか？

あなたの望み、願い、祈りは、届いているでしょうか？ 通じていますか？

というか、誰に届くのでしょうか？ 何に届いて通じることがあるのでしょうか？

あなたの言葉、表情、身振りや手振りは、届いているのでしょうか？ 通じていますか？

あなたは、誰かの送ってくれているものを受け取っていますか？ 受けとり損ねたり、そもそも見ていなかったり、無視したり、気づかなかったりしませんか？

あなたのしているその仕草はどういう意味なのでしょう。何となくですか？ 考えたこともない、ですか？ 「意味って何？」ですか？

### 道具ではない、しもべや奴隷ではない

それはそっくりです。みんながそっくりなことをしています。そっくりなものを口にしたり文字にしています。

それは誰もが生まれたときに、既に外にあって、外から人の中に入り、それが表現の手段という形で外に現れ出ます。必ずしも思いどおりにならないという意味ではつねに外なのです。

それが、思いどおりにならない外であるというのは、どっちつかずのニュートラルなものだからではないでしょうか。ひょっとすると、それは自立しているのです。

人の道具でも、しもべでも、ましてや奴隷でもない自立した存在なのではないでしょうか。

そっくりなものをみんなで共有しているのですが、その意味やメッセージやイメージは、その時その時で変わり移ろいます。

うつろうとはどっちつかずという意味ですから、必ずしも思いどおりにならないのです。ぜんぜん当てになりません。頼りにもしくいのです。

道具でも奴隷でもないからです。

### 道具ではなく友だち

そっくりなのです。でも、それが間近にあったり、自分の中にあるときには、そっくりには見えません。そっくりにも思えません。



見えたり見えなかったりする、そっくり。

自分の中にあったり、外にあったりする、そっくり。

そっくりは、いまもあなたの中にあるのです。たぶん、いるのです。これからもいるでしょう。

あなたのいちばん古い友だちです。私たちみんなの古くからの友だちです。

仲良くしましょう。さいごまでいてくれますよ。あなたのさいごまで、私たちのさいごまで。

\*

最後に大好きな歌を紹介します。キャロル・キングの You've Got a Friend です。

(動画省略)

歌詞を知ったとき、そんな虫のいい話があるのかとか、そんなに軽々しく請け合っているものかとか、そんな素晴らしい友だちがいるだろうかと思ったのを覚えています。

いま改めて聞くと、これは話し言葉や書き言葉、そして身振りや表情という言葉のことではないかと思えてなりません。

顔

さいごの光景を想像します。

言葉、表情、身振りのある光景です。

その光景の中で、いまが消えていき、かなたがその領域を広げていく。同時に、かなたが消えていき、いまがその領域を広げていく。そこには物語も条理もないでしょう。

いまとかなたは言葉なのです。

人にとってもっともはかない意味とメッセージは、まっ先に消えてなくなる気がします。

話し言葉と書き言葉が失われ、音の記憶と、音としての声の記憶と、表情の記憶と、身振りの記憶の織りなす光景です。

ニュートラルな、つまりどっちつかずの音と形だけが、しつように、おそらく断片的に断続的に浮かんでいる。

あえて言うなら、それはおそらく顔ではないでしょうか。

\*

とりとめのない、常軌を逸した、雲をつかむような話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#言葉# 話し言葉# 書き言葉# 視覚言語# 動作# 身振り# 表情# ニュートラル# 意味# メッセージ# キャロル・キング# 洋楽# 音楽# シンクロ# 顔

意思表示としての動作



＊

意思表示としての動作

星野廉

2022年3月26日 07:51

目次

「立つ」は疲れる

横になる、寝る

意思表示としての動作

「立つ」は疲れる

立つには、力が要ります。筋力も要るし、入れた力を維持しなければなりません。

緊張もします。気が張りつめるわけです。大げさに言うと殺気立っているのです。

(拙文「赤ちゃんが立つとき」より引用)

＊

立つのは不自然な姿勢なのかもしれません。立っていると、とにかく疲れます。まだ歩いているほうがいいくらいです。

緊張するのです。衛兵みたいに直立不動でいるなんてすごいと思います。これはやってみると分かります。

私には無理です。最近は歩くのもつらいのです。

外に出ると、立っている人はあまりいません。立つのは一時的な体勢で、長い間立っているというのは異様であり、異常でもある気がします。

職業なら別ですけど、衛兵を除いて、じっと立っているだけの仕事も珍しいようです。

立ち仕事なんて言い方もありますが、たぶんレトリックであり、立つ以外の作業もけっこうあるみたいで、他人事とはいえほっとします。

立っている人には同情してしまうのです。

＊

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいですよ。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は萎えるかもしれません。

(拙文「影を見る」より引用)

とはいえ、立つの反対は萎えるばかりではないようです。

横になる、寝る、座る、なんかも反対と言えるかもしれません。

というか、立つのに疲れて、気持ちも体も萎えるから横になったり座るのかもしれない。

なぜか、最近、立つにこだわっています。立つに憑かれて疲れている自分があります。勝手にしろ、ですよ。

＊

立つの反対とは？　なんて考えるのではなく、立つの前には何をしているのかと具体的に考えてみました。

自分やまわりの人やテレビに映っている人を観察するのです。

横になる、寝る、座るのほかに、寄っかかる、飛ぶ・跳ぶ、宙返りする、這い上がる、のぼる、あがる、転ぶ、倒れる、よろける、殴られる、押される、なんてのもあるのに気づきました。

スポーツを見ていると勉強になります。スポーツは動作から成りたっていることに今更ながら気づいてほしいです。

\*

こうやって「立つ」に注目すると、動作を表す語彙にいかにか自分が乏しいかが実感できます。

動詞はわりと好きなのですが、選り好みが強すぎて、「見る・見える」とか「分かる・分ける」なんかに偏っているという気づきも得ました。

そう言えば、アナウンサーはスポーツ中継で言葉による描写力を養うという話を思い出しました。

あのう、あれが、ああなって、こうなりました、なんて言っているわけにはいきませんよね。

いまの私なんか、言葉が出なくて、「あれ」、「なに」、「あそこ」と口にするのが多くなりました。

いやね、あそこで、あれが何してね。

文字にしてみると、何だかいやらしくないですか？ 声に出しても、いやらしいですね。

状況とかコンテキストが大切という意味でしょうか。

話が逸れて申し訳ありません。万事この調子なのです。

## 横になる、寝る

立つはきわ立った言葉だという気がします。

ヒトにとって、立位とか二足歩行というのは、やはり画期的な動作の獲得であり、言語の獲得や文字の獲得と同じくらい大きな意味を持っているのではないか。

そんな気がしてなりません。

そのため、「立つ」という言葉を使う場合には、そのフレーズやセンテンスが単なる描写や写生にとどまらず、何らかの象徴的な意味を帯びたり、特別なメッセージを発する信号や記号になりうるようにも思えます。

＊

単純に考えましょう。

人は生まれるとたいてい横になっている。死ぬときも、横になって死ぬときが多い。

この「横になる」とか「寝る」に注目してみます。

＊

「立つ」行為は、人に見せるためにある気がします。人に見せるために人は立つのです。

「ほら、立ったよ」、「見て、立派でしょ」、「ね、こんなぐあい」、「どうだ」、「頑張っています」、「いいでしょ」、「きりっ」

人が立っている姿を見ていると、そんな言葉が聞こえてくるようです。

立っているのを見ているほうも、「見せている」の人に応えている節が見られます。



「おお、すごい」、「やったね」、「リスペクト」、「あら、まあ……」、「素敵すぎます」、「頑張っていますね」、「元気をもらいましたよ」

＊

一方で、「横になる・寝る」は、ひとさまにお見せする姿ではない気がします。

人は人のいないところで寝っ転がります。人のいるところで横たわると何らかの特別な意味やメッセージを持つという意味です。

「ねえねえ、見て」とか「ほらほら」という感じで寝ている人や横になっている人の姿は想像しにくいのです。

それも無きにしも非ずですが、特殊な場合でしょう。いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

強いて言えば、ワンコやニャンコのへそ天くらいでしょうか。あれはかわいいですね。そのさまを想像してにやけている自分がいます。

### 意思表示としての動作

横になる・寝ると言えば、あれです。

ジョン・レノンとオノ・ヨーコの「ベッド・イン (Bed In)」です。大事件でした。

詳しいことは検索してください。たぶん動画もあるはずですが、ここでは割愛させていただきます。

とにかくお二人が高級ホテルでベッドに寝て、平和を語ったのです。

1969年の出来事ですが、私は最初その報道写真を見たとき、いったい何が起きている

のか理解できませんでした。少年だった私の目が点になっていた記憶があります。

「寝る・横になる」という動作が、大事件として報道されたのです。ありえない話でした。

あの事件は見せ物ではありませんでしたが（たぶん）、見せるため、それも世界中の人びとに見せるために、「寝た・横になった」のですから。

＊

ベッド・インといえば、ダイ・イン（die-in）です。

これも「寝る・横になる」を人に見せる行為ですが、おもに集団で地面に横たわって死んだ振りをするのです。

抗議のためです。確固とした信念に基づく意思表示だったのです。

同じく抗議のための行動である、座り込み（sit-in）も忘れてはなりません。

「立つ」の反対である「寝る・横になる」（この動作や体勢が生殖と死の両方と関係があるのが興味深いです）と「座る」が抗議行動の身振りとしてあるわけですね。

象徴的な話に感じられます。

＊

「寝る・横になる」はヒトの乳児期と最期の動作であるだけに、「立つ」に匹敵する大きな意味がありそうです。

ヒトは生まれ落ちて横になり、やがて立ち、歩き、座り、再び横になって亡くなる。

そういうふうにも言えそうです。

＊

寝る・横たわる、座る・座りこむ。

ところで、これまでにたくさんの人によって繰り返されてきた抗議の動作と行動は、届いたのでしょうか、通じたのでしょうか。

そもそも動作や身振りや表情は、届くのでしょうか、通じるのでしょうか？

望み、願い、祈り、意味、メッセージは届くのでしょうか。

#言葉 # 動作 # 身振り # 表情 # ジョン・レノン# オノ・ヨーコ # ベッド・イン # ダイ・イン # 座り込み



赤ちゃんが立つとき



＊

赤ちゃんが立つとき

星野廉

2022年3月25日 11:01

目次

生きていない物が立つとき

赤ちゃんが立つとき

私が立つとき

描写なのかレトリックなのか

生きていない物が立つとき

生きていないものが「立つ」というのは、人や生き物にたとえているわけです。

煙が立つ、陽炎が立つ、風が立つ、蜃気楼が立つ、茶柱が立つ、蚊柱が立つ、江頭が立つ、(人柱が立つ)、火柱が立つ、卵が立つ。

どれも絵になります。そのもようやさまが目映るようです。綺麗な絵も身の毛がよだつ光景もあります。

いずれにせよ、言葉の綾と、うつつの綾とが比較的うまくからまっている感じがします。

風のように見えないものでも、見える気がしてくるのは、言葉がイメージや想像を喚起するからにちがいありません。

風が立つなんて、耳に綺麗に響くので、「ま、いっか」という気持ちになるのです。

風立ちぬ。今は春。春立ちぬ、

＊

家が建つ。

この言い回しは漢字を使うと「へえーっ」とか「ふーん」とか「うーむ」「で?」とか「知るか」とか「そだね」という感じでしょうか。

しゃべっているぶんには「たつ」なので、いちいちこれを頭の中で漢字に置き換えている人はいない気がします。

でも世の中にはいろいろな人がいますから、いても驚きはしません。

家はたてるのであって、勝手にたちませんから、「家がたつ」は擬人化ばい気がします。「家を建てる」は別です。

＊

「立つ・立てる」はほぼ垂直方向への動きです。

「あの人が（は）立つ」とは言っても、「あの人の手が立つ」とは言いません。「手があがる」でしょう。

「指があがる」というと、怪我をした指があがる感じになり、垂直に指をあげることは「指を立てる」と言います。「見て見て、あの人の親指が立っている」とは言いそうですね。

「指が立つ」は擬人化なのでしょう。どうでもいいことですね。そう言ってしまうと、この記事ぜんぶがどうでもいいことになります。

そうなる立つ瀬がない。私の顔が立たなくなります。べつに立たなくてもいいので



すけど。

### 赤ちゃんが立つとき

「春が立つ」はレトリック、つまり言葉の綾です。言葉からなる世界の話です。違和感を覚える人が多いだろうし、一つ間違えると荒唐無稽やナンセンスや矛盾になりえます。

「赤ちゃんが立つ」は描写とか写生と言えそうです。これをうつつの綾と呼んでみましょう。現実の世界を言葉にうつしたものです。いちおうといか、ほぼ整然として見えます。違和感を覚える人はきわめて少ないと思われま

(拙文「ことばの綾、うつつの綾」より引用)

\*

赤ちゃんが立つ。

これは言葉による描写（写生文の写生）であると同時に、現実世界では特別の意味を持ちます。つまり、

「たち」とか「あんだよ」のことです。

「お父さんが立つ」とはちょっとニュアンスが違います。変な意味に取らないでください。stand のことです。

ところで、この文は純粋な写生になりうるのでしょうか。語弊というか垢がつきまとうのです。

それに対して「赤ちゃんが立つ」は写生だけではなく、おめでたい、祝福すべき出来事だという意味です。いい意味での「垢」がつくのです。

\*

「立つ」はただ垂直の動きを示すだけではないようです。語弊や垢がありますが、使い方によっては語弊や垢を招くという意味です。

文字どおりに取れない、言葉どおりに取れないということですから、一種の比喻みたいにレトリックになってしまう。言葉の綾になってしまうとも言えます。

「立つ」はヒトにとって特別な動作のようです。

なにしろ、聞くところによると、おさるさんに近かった大昔のヒトは四つ足歩行をしていたり、木や枝につかまって移動したり休んでいたたり、横になっていたらしいのです。

\*

みなさんはいま、どんな格好をなさっていますか？ 座っていたり、横になっていたり、何かに寄りかかっているのではないのでしょうか。

直立不動の方は少ないと想像しています。直立不動は、意外とつらいものです。歩いているほうがまだましです。

立つには、力が要ります。筋力も要るし、入れた力を維持しなければなりません。

緊張もします。気が張りつめるわけです。大げさに言うと殺気立っているのです。

立つという体勢は人にとって不自然なものだと言いたくなります。一時的な姿勢であって、いつまでも立っているなんてありえないのです。弁慶さんじゃあるまいし。いつかは倒れます。横たわります。

行き倒れ、野垂れ死に、仰臥、往生、大往生。

瞑目合掌。

＊

立っていると、あるいは立って歩いているときに覚える緊張感は、大昔のヒトの時代から蓄積された記憶から来ているのかもしれませんが。

立った状態で何かをしていると、びくびくする自分の一部を感じます。襲われるかもしれない恐怖と言いましょか。何にって、敵です。

「立つ」は非常事態なのです。そのときの人の神経は普通じゃないのです。

いろいろな意味で。

### 私が立つとき

年を取ってくると足腰が弱くなるというのは、年を取って体感して初めて分かるものである気がします。頭で分かるものではありません。

こういうのは、今という時代だから感じるのでしょうか。昔の人はもっと足腰が強かったのではないかというイメージを持っています。

私はストーリーや謎解きには興味がないので——両方とも人生だけで十分なのです——、どんな小説でも好きな箇所だけを断片的に何度も再読するのですが、先日次のような部分を読んでいてはっとしました。

”（前略）いましも、ある老作家が、この会場に遅れて馳はせつけたところだった。しかし、馳せつけたという言葉は適当ではない。大家は老いている。（中略）大家は七十ぐらに見えた。人びとは尊敬と阿諛あゆをまじえた笑顔でおじぎをした。老作家は、それに会釈えしゃくしながら、よちよちと赤ン坊のように歩いていく。”

場面は、大きな新聞社主催のカクテルパーティで、著名人が集まっている会場です。

私が驚いたのは、「七十（歳）ぐらい」で「よちよち」とは、いまの感覚だとちょっと

早いのではないかと思ったからです。

\*

心当たりがあるだけに、こういう部分には敏感に反応してしまうのです。たとえば、自分に年の近そうな人が歩いていると必ずその足元や歩き方に目が行きます。

立っている姿にも密かに注目してしまうのですが、そのときの目は必ず自分と比較しています。

上で引用したのは、松本清張作『砂の器（上）』（新潮文庫・pp.108-109）なのですが、「この作品は昭和三十六年七月光文社より刊行された。」とあります。

当時（1961年）から高齢者の「よちよち」があったのですね。しかも七十歳くらいで。高齢者とはいえ、まだ若いですよ。それとも、そのころの七十と今の七十ではだいぶ違うのでしょうか。

それとも運動不足のまま年を取った文化人である「老大家」を揶揄しての表現だったのでしょうか。

いずれにせよ、複雑な気持ちになります。

### 描写なのかレトリックなのか

「立つ」は一筋縄ではいかない気がします。言葉どおりには取れないのです。

「語弊」というか、言葉にまどわりついた垢を感じます。

「立つ」は「立つ」でしょ」なんて具合に文字どおり取れないニュアンスとかイメージがくっついているようだという意味です。

詳しく言うと、「〇〇が立つ」の〇〇が生きていない物であって、擬人化っぽいレト

リックを感じるだけの話にとどまらないみたいなのです。

\*

「〇〇が立つ」の〇〇が人間である場合には、その人の年齢や立場や性別や、その人の背景のほかに、その行為がおこなわれている状況や場面によって、意味が付け加わるという感じがします。

「生後八か月の孫が立った」、「生後十か月の孫が立った」、「彼が来た。みんな一斉に立った」、「彼女は席を立った」、「お願い、席を立たないで」、「名前を呼ばれて、私は立った」

「先生が教壇に立つ」、「先生が窓際に立つ」、「患者が病室の窓際に立つ」、「崖の上に立つ」、「木の上で立つ」、「バレリーナが舞台中央に立った」、「母が台所に立つ」、「父が台所に立つ」、「こどもが台所に立つ」

こうした例は必ずしも描写や写生ではないという意味です。かといって、レトリックとくくっていいものか、ケースバイケースなのか、べつに「立つ」だけの問題ではないのか、角を立てるのはやめて寝っ転がっていたほうがいいのか、考えすぎなのか.....。

ことばの綾とうつつの綾のあいだで揺れている気がするのです。言葉の綾はまだしも、うつつの綾なんて自分語を作って揺れていれば世話ないですけど、もう少し考えてみたいです。

#言葉 #日本語 #レトリック #言葉の綾 #擬人化 #赤ちゃん #比喩#描写 #写生文  
#松本清張



ことばの綾、うつつの綾





＊

ことばの綾、うつつの綾

星野廉

2022年3月25日 08:07

春夏秋冬と煙に共通する点は何でしょう？

立つことです。

立春、立夏……。なぜ立つのか、あるいは、どうやって立てるのかは調べれば分かる  
かもしれません。

(拙文「血液と水分がみなぎる春」より引用)

＊

上の文章ではレトリックの話をしながら、レトリックを用いて、しらっと煙に巻いて  
いますが、誤魔化しています。

立春、立夏、立秋、立冬、ここまではいいです。立煙はありません。というか言いま  
せん。そういう言い回しが無いのです。

「煙が立つ」とか「煙を立てる」とは言います。これも言い回し、つまり慣習として熟し  
た句という意味の熟語でしょう。

「火のない所に煙は立たぬ」ということわざもあります。

＊

「春が立つ」とか「春立つ」とは言うそうです。後者は昔の言い方ばいです。どちらも、  
私は使ったことがない言い回しです。

春を立てる、は聞いた覚えがないです。でも、そういう人がいても驚きません。

詩だとありそうです。詩では何でもありです。それくらいの気持ちなければ、詩は書けないでしょう。萎縮した詩は死んでいます。詩の死でしょう。

詩人は私人でいてほしいと思います。職業でもステイタスでも名称でもなく、ただ詩を書く私人でいてほしいのです。

こういう余計なレトリックを書くので、途中で読むのをやめる人が多いようですが、無駄を除くと私の文章には何も残りません。

というふうに、またレトリックに走ってしまうのです。申し訳ありません。

＊

「立春」、「春（が）立つ」、「煙が立つ」という言い方、言い回し、言葉はあるという話でしたね。

ところで春が立つのを見たことがありますか？

「春が立つ」はたぶん比喩的な言い方です。つまりレトリックです。

「春が立つ」は視覚的にイメージしにくいのではないのでしょうか。それは、レトリックだからでしょう。言葉の上だけの話という感じです。

一方で「煙が立つ」のは見たことがあります。誰かの煙草の煙とか、焚き火の煙とか、煙突から出てくる煙はのぼります。

これを「煙が立つ」と言うのは擬人ぽいですが、絵になります。立ちのぼる感じです。

＊

ここで整理します。

「春が立つ」はレトリック、つまり言葉の綾です。言葉からなる世界の話です。違和感を覚える人が多いだろうし、一つ間違うと荒唐無稽やナンセンスや矛盾になりえます。

「赤ちゃんが立つ」は描写とか写生と言えそうです。これをうつつの綾と呼んでみましょう。現実の世界を言葉にうつしたものです。いちおうというか、ほぼ整然として見えます。違和感を覚える人はきわめて少ないと思われます。

※うつつの綾もレトリックなのですが、今回はこれ以上深入りしません。

＊

言葉の綾を言葉どおりに（文字どおりに）取る、つまり言葉の綾をうつつの綾として取ると楽しいです。私はしょっちゅうそんなことをして遊んでいます。

たぶん遊ばれているのだと思います。何にって、言葉にです。

ひょっとすると「何か」によって、とも思いますが、いまは体調が悪いので、深入りするのはやめておきます。

たとえば、「へそが茶を沸かす」を文字どおりに取って、思いえがくと、つまり頭の中で絵にするとぞくぞくします。

ここで言う「文字どおりに取る」とか「言葉のとおりに取る」というのは、リテラリズム（literalism）という言葉で、文学や美術の世界で使われているものと近いでしょう。

リテラリズムはルイス・キャロルなどの書いたナンセンス文学でも多用されています。原語で読むとぞくぞくします。

＊

アルミカンの上にあるミカン。

この駄洒落が有名なのは、語呂がいいし、綺麗に決まっているし、しかも視覚化するとシュールだし、写生文に徹した自由律俳句みたいだからかもしれません。

ものすごく好きです。

この駄洒落を言葉どおりに取る、つまり言葉の綾をうつつの綾として取ると、「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の偶然の出会い」のように、シュールな絵として決まるし、字面だけで見ても綺麗なのです。

アルミ缶とミカンという懸け離れたもの同士が、音の類似や一致という共通点に支えられて、言葉として出会う。

言葉とうつつがシンクロする。言葉と現実が同期する。

言葉がキューピッドのように一瞬だけ懸け離れたもの同士をつないだのです。

つながるのは、それぞれのもものが多様で多元的であるからです。その多様と多元のうちほんの一部だけを、言葉が一瞬だけすくい取って、つないだと言えそうです。

はかない美しさ——普遍の美ではないのです——、それが駄洒落の美なのです。蜃気楼や陽炎のように、ごく短い間に立ちあらわれるだけだと言えば、綺麗すぎでしょうか。

\*

言葉の綾とうつつの綾が一瞬絡みあったのです。必然なんてありません。当然のことでもありません。普遍でもありません。

一期一会、たまたま出会っただけ、偶然の出会いなのです。

レトリックでの出会いにおいては、その言葉も、その言葉が指ししめす事物も、ニュートラル（どっちつかず）なものとして立ちあらわれて、一瞬だけからみ合うのです。

\*

「春が立つ」を言葉どおりに取るためには、春を擬人化する必要があるかもしれません。

なかには春さん（春という名前の人）が立ったさまを、思いうかべる人がいても驚きませんが、それよりも春が始まったとか春が始まる気配を感じたという意味で取る人が多いにちがいありません。

クロッカスの芽を見て、あるいは強い風が吹いて、あるいは、鼻がぐしゅぐしゅし始めて、あるいは沈丁花の香りを嗅いで、「春が立つ」を感じる人も多いでしょう。

「春が立つ」というふうに、「人が立つ」を連想させる「立つ」という言葉が使われているわけですから、「春が立つ」にはどこかに擬人っぽいものがあるという意味です。

「立つ」なんて、本来は人に使う言葉を用いているわけですから、クロッカスや強い風や鼻のうずきや沈丁花の香りに、「よく来たね」とか「また会えたね」なんてふうに、話しかけたくなるような思いをいだくのではないかという意味です。

＊

人形や玩具を撫でたり、話しかける。愛用の物（カバンとか靴とか、生きていない物です）を思わず撫でたり、それに話しかけている自分がいる。

人は何かを愛でたり愛したりするためには、その対象に「人」を感じていなければならぬ気がしてなりません。

春が立つ。

私はこの言い方に、私は、人、あるいは人の気配を感じます。

春に人を感じるとすれば、それはきわめて人的ないとなみであり、この星のヒト以外には通じないギャグであり駄洒落であり比喻であるにちがいありません。

「春が立つ」の春に限らず、あらゆる擬人化に言えることだという気がします。擬人は一方的で一方向であり、それゆえに強引で孤独ないとなみではないでしょうか。そのありようは人そのものだという感じがします。

#言葉 # 日本語 # 春 # レトリック # 言葉の綾 # 煙 # 擬人化 # 駄洒落# 比喻 # 掛け詞  
# 詩 # リテラリズム

血液と水分がみなぎる春





＊

血液と水分がみなぎる春

星野廉

2022年3月24日 08:02

目次

筋というつながり

張る芽と腫れる血管と春がシンクロする

血液と水分がみなぎる春

掛けることで言葉と世界がシンクロする

筋というつながり

何かに運ばれていく感じを筋と、とりあえず呼んでみましょう。

そうした筋がシンクロしているのではないか。シンクロとは筋の動きなのではないか。  
今回は、そんな話をします。

世界や言葉には、それぞれになんらかの筋のようなものがある気がします。

筋というのはつながりみたいなものです。

Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……。

こんな具合に、つながっていく、続いていく感じ。動きなのです。移動のほうがいい  
かもしれません。

うごき、うつっていく。「うつる」は「移る」だけでなく、映る、写る、遷る、伝染る  
も含まれます。呼応とか反響とか転写とか、共振や共鳴や交感も含む感じ。

いま言葉を転がしましたが、まさにそれが筋です。何かに運ばれていく感じで言葉が浮かんでいきます。

これはたまたまの動きであって、これしかないというものではないでしょう。

人によっても異なるし、同じ人でもその時々気分や環境によって変移するはずですよ。

いずれにせよ、つながる、つづく、うつろう、人はその流れに運ばれていくだけ。それが私の考えている筋です。

この筋とは、「AだからBだからCだからDだから……」という論理っぽいものではなく、また「Aして、次にBして、それでもってCして、それからDして」という物語っぽいものでもありません。

あくまでも、「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」という流れを想定しています。

AとBとCとDは、並列や並置であり、どれもフラットな関係にあって、上下関係や因果関係や時系列をなしてはいないのです。

このつながりとはレトリックのことではないでしょうか。

### 張る芽と腫れる血管と春がシンクロする

春夏秋冬と煙に共通する点は何でしょう？

立つことです。

立春、立夏……。なぜ立つのか、あるいは、どうやって立てるのかは調べれば分かるかもしれません。

私は想像を楽しむほうを選びます。わくわくしたいからです。横着なのでしょうね。

＊

春は「張る」だと勝手に思っています。たしか、そういう説もあるみたいですが知りません。忘れたのかもしれませんが。

いまここにあるもので済ませます。寝入り際や死に際と同じ心境で、ああでもないこうでもない、ああだこうだを楽しみたいのです。

寝際に辞書を引いたり検索するのは面倒です。ましてや死に際には無理でしょう。際にはいろいろなものが訪れます。それで十分なのです。

春になると、いろいろなものが張ります。木々や草花の芽やつぼみが膨らむのは張っているからでしょう。

山の奥でも雪解けが進み、川面が膨らんで見えます。道を歩く人たちの頬も上気したかのように見えます。

山川草木、そして人が膨らみ張って見えます。膨張するのです。

＊

私は花粉症なのですが、症状が出るたびに、鼻の奥や喉や気管支の粘膜が腫れているような気がしてなりません。

細かい血管に血液が送りこまれて腫れているのでしょうか。腫れるのも膨張です。

身のまわりも、身のうちも、張っている、それが春。水や血液で張っているイメージです。

やっぱり、春は張るだどつくづく思います。

春、張る。世界と体が同時に張る。世界と身体がシンクロする。

張る芽と腫れる血管と春がシンクロする。世界と身体と言葉がシンクロする。

言葉のレトリックと世界のレトリックを強引に重ねました。

### 血液と水分がみなぎる春

春は始まる季節です。とくに日本はそうです。会社も学校もお役所も春に始まります。新年度が春なのです。

「たつ」に「発つ」や「起つ」があるのに気づいて、はっとします。

東京を発つ、旅立つ、風が立つ、席を立つ、鳥が飛び立つ、民衆が立（起）ちあがる。

どれも、始まるわけです。

＊

春に張って始まる。

水分や血液がみなぎって、何かが始まる感じがします。眠っていた生命が息を吹き返すイメージでしょうか。

生命を感じさせる「張る」は、生殖や性ともつながっている気がします。

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいですよ。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は萎えるかもしれません。（拙文「影を見る」より引用）

回春という言い方がありますが、春には人生における春という意味あいもあるようです。

発情期がはっきりしないというか、常時発情しているかに見えるヒトも、春にはうずうずするのもかもしれませんね。

## 掛けることで言葉と世界がシンクロする

春に張って始まる。

このように言葉に端を発するかたちで、まわりの世界を見たり思いえがくと、動物も植物も、そして人間も春には張り切るようすがうかがわれます。

言葉のレトリックと世界のレトリックが重なりシンクロしているようです。

こじつけっばいですね。

というか、こじつけや掛け詞や駄洒落や比喩は、言葉と世界をレトリックつまり綾でつなぐという点では同じ仕組みだと思えます。

言葉同士をからめ、言葉と言葉が指すものをからめ、言葉と世界をからめ、ひいては世界と世界をからめる。これが可能なのは、言葉も世界も多層的で多元的であるからでしょう。

レトリックの基本的な身振りが「からめる」であるとするなら、レトリックの根っこには同期があるように見えます。

「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」というつながりであり、ながれです。引っ掛けていくのです。

大切な点は、上でも述べたように、AとBとCとDは、並列や並置であり、どれもがフラットな関係にあって、上下関係や因果関係や時系列をなしてはいないことです。

この関係がフラットなのは、引っ掛け引っ掛けられる、つまり引っ掛け合うそれぞれの

要素がニュートラルである、つまりどっちつかずで、どっちにも転ぶからだと思います。

掛けることで言葉と世界がシンクロするのです（このときには、身体もシンクロしているような気がします）。たぶん、この掛けるは賭けるとシンクロしている気がします。

さらに言うなら、賭けもシンクロも、きわめてニュートラルな要素のあいだで生じるニュートラルな身振りだという気がします。

どっちつかずで、どっちにも転ぶし、うつるのです。

# 言葉 # 日本語 # 春 # レトリック # 言葉の綾 # 影 # シンクロ # 掛け詞 # 駄洒落  
# 比喩

影を見る





＊

影を見る

星野廉

2022年3月23日 08:38

目次

言葉の影、現実の影、知覚の影

立つと「立つ」

立ちあらわれる「立つ」と立つ

言葉の影、現実の影、知覚の影

何かではなく、何かの影しか、私たちは見ていないのかもしれませんが。個人的な思いなのですが、私は何を見るにつけ、それが見えている気がしません。

自分だけかとも思うのですが、まわりの人を見てみると、どうも見えているように感じられないのです。失礼な話ですけど。

私が勝手に「見る・見える」の敷居を高くしているだけなのかもしれません。わざわざ自分で見えなくしているのかもしれません。

人と交わらない性格の私には、この種のことが多い気がします。

いずれにせよ、ひとさまの「見る・見える」は、そのひとさまにしか見えていないのですから、想像するしかないようです。

＊

言葉が見えない。言葉の影が見えるだけ。現実は見えないから、現実の影を見ている。

現実なんて言っても、私たちは五感というまだら模様のカーテン越しに「見ている」つまりとらえているだけ。まだら状の知覚の影を見ているだけなのかもしれません。

私の言う見えないとは、そういう意味です。

### 立つと「立つ」

意味が立ちあらわれる。

このフレーズについて昨夜寝入り際に考えていました。とりとめのない思いに浸っている時間です。一日のうちで、寝入り際がいちばん楽しいです。

意味が立ちあらわれるのに立ちあうと、意味が立ちさわぐ。

うとうとしながら、こんなふう言葉にいじります。舌で転がしている感じです。

＊

立つ。

視覚的なイメージが浮かぶときと、言葉が言葉を誘いだすように言葉が浮かんでくるときがあります。

学校時代に「起立！」と声が掛かって、みんなして起立したときのもようが頭に浮かびます。その姿の記憶から、「直立不動」という言葉が呼びさまされます。

立つが「立つ」に変わる瞬間です。イメージが言葉に変わると言えばお分かりいただけるでしょうか。

## 立ちあらわれる「立つ」と立つ

意味が立ちあらわれる。

このフレーズを見ているうちに、「立つ」に興味が出てきました。

「立つ・立てる」というふうに変がしてみます。

「建つ・建てる」もあったなあと思いだし、「たつ」で辞書を引いてみることにしました。

「立つ、建つ／起つ、発つ／経つ／絶つ、断つ、裁つ、截つ」

わくわくします。頭の中にいろいろな言葉や情景やイメージの断片が浮かんでいきます。

\*

「立つ・立てる」に絞ります。

立つとか立てるといって、不安定な感じがします。立ったのはいいが、立てたのはいいが、大丈夫なの？ 心配なのです。

そもそも人にとって立っているのは不自然な気がします。落ち着かないのです。座っていたり寝っ転がっているほうが楽です。

ヒトがあるいは、ヒト以前のサルが立ちはじめたのはいつなのだろう。考えても仕方ありません。調べるのは面倒です。

とにかく大昔はヒトにとって立つのは稀な体位だったようです。四つ足歩行をしたり、木の枝につかまっていたのでしょう。

\*

立つ（立てる）と、いつかそのうちに倒れるというイメージがあります。立っている（立っている）間は緊張して体に力が入っているような感じもします。

立つのは一時的な体勢なのです。いつまでも立っているわけではない気がします。

立っているためには力が要りますから、元気なのでしょうね。元気でなければ立ちませんし、立てません。

\*

前立腺を連想しました。漢字の組みあわせとして見ると不思議な字面をしています。英語では prostate (gland) ですが、漢字の語感と一致します。ヨーロッパの言葉からの翻訳語のようです。

pro には前という意味があります。state は、「立つ」にこじつけると立ち位置という感じでしょうか。似た言葉に status があります。

stand、statutue、static、stop、stay、start、stay、station、step、stray、stroll ……

st は移動と静止をあらわすと、昔習った記憶があります。そんなふうには単語を覚えたのです。

こういう st みたいなものを語幹とか語根と言った記憶があります。語源的な裏づけがあるのか不明ですが、個人的には、ただつながればそれでいいのです。

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいですよ。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は萎えるかもしれません。

\*

そう言えば、トイレに立つと言いますね。小用に立つとも言います。おもにおしっこなのでしょうか。

立ち小便という言葉も思いうかびました。いまでは男性も座っておしっこをする場合が増えました。

立つ、座るは、生理現象や排泄と関係が深い動作です。寝るはずばり性行為を指すことがあります。

おもしろいですね。

\*

そそり立つ、そびえ立つ——。立ちあらわれましたね。威勢がいいです。立派です。

風立ちぬ。風が立つとはどういう状態なのでしょう。匂い立つような美しさなんて言い回しがあります。

香りが立つ。これも美しい語感の言い回しです。響きも字面も綺麗です。においや香りはいかにも影という感じがします。見えないからでしょうか。

五感のうちで見えるのは視覚だけだと気づきました。考えれば当たり前ですけど、不思議な気もします。

四対一なのに、視覚の優位は揺るぎません。なかなかしぶといのです。

暗闇での「立つ・立てる」は、明るいところでのそれとは異なる気がします。どうなのでしょう。想像するとわくわくしてきました。いつか試してみます。

五感、語感、語幹、互換、交感。

脇道に逸れそうになりました。

\*

影を見るのも楽しいものです。

#言葉 #日本語 #影 #五感 #語感 #現実 #知覚 #英語

「何か」と「何」から身をかわす





＊

「何か」と「何」から身をかかわす

星野廉

2022年3月22日 15:05

目次

ニュートラル、非人称的、どっちつかず

「何に？」ではなく「何か」

「何」と「何か」はそっくりさん

ニュートラル、非人称的、どっちつかず

あなたの名前——発音やアルファベットで表記した文字のことです——が世界のどこかでは、笑いを誘うかもしれません。怒りを招くかもしれません。決して珍しい話ではないのです。

海外では、あなたのその仕草、目くばせ、眉の動かし方、手振り、身振り、その指の曲げ方が、引き金となってトラブルが起きない保証はありません。

逆に、そのために幸運が訪れないという確証もないでしょう。これも、よく見聞きする話ですね。

世界のどこかではなく、この国のどこかで、あなたのその言葉や言い回しや口調や声の質が、あなたを困らせたり、いい意味でも悪い意味でも思いがけない方向へとあなたを導いたことがなかったでしょうか。

個人的には、これまでに数えきれないほど経験しました。

＊

言葉、言葉遣い、口調、表情、仕草、動作、身振り。

こうしたものは、あなたの思惑どおりになるとは限りません。もちろん、意図したとおりになることもあるでしょう。

そもそも意図などなく、または自分にも不確かなままに、つまり何となく、人は、言葉、言葉遣い、口調、表情、仕草、動作、身振りを「発する」ことが多い気もしますが、これは私だけのことなのかもしれません。

そうした不安定な状態をニュートラルとか非人称的と呼ぶこともできるでしょう。どっちに転ぶか分からないという感じ。

どっちつかず、どっちに転ぶか分からない、どっちでもない、どっちなのだろう？

「言葉や表情や身振りのやり取りはキャッチボールだ」なんて美辞麗句ではなく（むしろ疑似麗句でしょうか、要するに嘘っぽいです）、「お互いにどっちにボールが飛んで来るか分からないどっちボールだ」と言いたくなります。

いまのは半分冗談、つまり半分本気ですが、「言葉や表情や身振りのやり取りはキャッチボールだ」（投げると受けるが着実におこなわれているという意味です）と感じて生きている方は、めちゃくちゃラッキーな人だと思います。

ところで、ドッジボールの dodge は「身をかわす」という意味です。「言葉や表情や身振りのやり取りはドッジボールだ」もなかなか言えている気がします。

キャッチボールよりは誠実で正確なたとえだと個人的には思います。

「何に？」ではなく「何か」

メッセージなり意図が伝わったかどうか不明なまま、事が進むというのが、案外当

り前で普通に起こっている気がします。

人生は綱渡りに似ています。いま無事に歩いた道はたまたま地雷を踏まなかっただけなのかもしれないのです。大げさに言えば、ですけど。

とはいえ、じつのところ、どうなのかは検証不能です。

個人的には、一瞬一瞬が結果オーライの積み重ねであっても驚きはしません。なぜオーライになったのかはぜんぜん分からないのです。

\*

人はつねに占い賭けているのだとつくづく思います。赤ちゃんも占い賭けているのです。

あなたの、その思い、願い、祈りは届いていますか？ 達していますか？

いまの文では「何に」届いているのか、「何に」達しているのかは、あえてぼかしました。「何に？」は不明であるからです。

だから、占いであり賭けなのです。占いも賭けも、「何に？」が不明なのです。

たとえば、茶柱や水晶や星の運行の背後にある「何か」に身をゆだねて占い、賭けているという意味です。

「何に？」ではなく「何か」ですから、相手や対象は分からないのです。だからこそ、占いであり賭けだと言えるでしょう。

「何？」と「何か」は日本語では似ていますが、それぞれが英語の what と something に相当しますから、頭の中で置き換えるといいかもしれません。

「何？」は疑問を追求する感じで、「何か」は疑問を保留するのです。

＊

「何か」（保留）ではなく、「何に？」（追求）を指向するものであれば、それは占いでも賭けでもなく、宗教あるいは哲学でしょう。

私はそのどちらにも詳しくなく興味もないので、これはあくまでも個人的な思いだとしてご理解願います。

どちらにもかかわりたくないという意味です。

### 「何」と「何か」はそっくりさん

あなたの、その思い、願い、祈りは届いていますか？ 達していますか？

いまの文では「何に」届いているのか、「何に」達しているのかは、あえてぼかしました。「何に？」は不明であるからです。

「何に？」（追求）と問うことは、得体の知れない「何か」（保留）に挑戦することです。

その「何か」（保留）は、世界だったり宇宙だったり真理だったりするでしょう。運命や神だと言う人もいますでしょう。

保留を追求するなんて、眠っている子をわざわざ起こすようなものです。

本気でやろうとすれば、世界を背負うことに匹敵します。大昔とか昔に、超エリート中のエリート（いわゆる「昔の」「偉い人」のことです）が世界を背負おうとしました。現在古典と呼ばれているものを書いた人のようです。

いまはどうなのかは知りません。というか、いまは、世界を背負おうとする「偉い人」は必要とされていないもようです。古典で十分みたいです。

いずれにせよ、「何に？」や「何？」（追求）と問うのはしんどいということでしょう。半端じゃなくしんどいにちがいありません。

＊

話をずらしします。

じつは「何に？」（追求）も「何か」（保留）も似たようなものだという話に移ります。

「何か」（保留）を不明なままにして、その「何か」（保留）に負けた振りをするという話にもなります。保留のさらなる無力化です。

＊

「何か」（保留）に「何か」（保留）を見る。

何かに何かが見えてしまうのはつらいことです。世界を背負いこむようなもの、こっちに落ち度があるようなものだからです。

どうして見えるわけ？（じつは、これは「どうして見えないの？」ときわめて近いのです） どういうわけ？

これでは自分を追いこんでしまいます。

「何か」（保留）にこだわってしまうとか、「何か」（保留）に意味を取らずにはいられないという傾向の人は、自分を追いこんでしまいます。じつは私がそうなのです。

わざわざ保留を追求に変えているのですから。

とはいえ、something を what と混同しているなんて言い方はしません。日本語と英語は別個の言葉です。ですから、それぞれ別の言葉の綾があります。

ここでは、日本語における言葉の綾を問題にしています。「何（なの）か」（追求）と「何か」（保留）をめぐる言葉の綾です。

＊

この言葉の綾というのも、意味やイメージと同じくきわめて個人的なものです。ニュートラル、つまり「どっちつかず」でもあります。

たとえば、私は哲学というと鉄学や徹学や徹我苦を連想して、何かお堅いとか硬いものを感じてしまうのです。英語の philosophy とはほど遠い語感なのです。

ですから、「何か」と「何」をめぐる話も個人的なものかもしれません。

もっとも私は交際がきよくたんに薄く、こんな話ができる友達がいないので、誰にも話したことがありません。

＊

「何か」に「何か」が見えるだけには、とどまりません。強迫観念が被害妄想のように訪れるのです。私のことです。

「何か」に「何か」を読む。「何か」に「何か」の匂いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の臭いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の手触りを感じる。「何か」に「何か」の味がした。「何か」に「何か」が聞こえた。

それだけではありません。

「何か」に「何か」のたたずまいを感じた。「何か」に「何か」の気配を感じた。

こうなると、もう勘弁してほしいでしょうね。

「何か」に「何か」がいた。「何か」が「何か」だった。

ここまで来るとかなり危ういです。

保留が追求に変わっているばかりか、その追求がエスカレートしているのですから。

どうしたらいいのでしょうか？

＊

まかせる。「何か」（保留）にまかせればいいのです。すると、「何か」が消えます。それくらい徹底的にまかせるのです。

「「何か」（保留）とは「何」（追求）なのか？」なんて考える必要はありませんよ、ふつうは。考えなくても生きていけます。しかも考えることは他にいっぱいあります。

まかせる。まかせるはまけること。全面降伏すればいいのです。負けるが、じつは勝ちですから。

負けたと言っても、じつは任せただけ。わざと負けることで、身を任せただけ。要するに、身をかわしたということなのです。

「何か」（保留とも追求とも取れる：something の「何か」とも、what の「何（なの）か」とも取れるという意味です）から身をかわす。これがいちばん大切なことではないでしょうか。

＊

「何か？」と問うたり「何か？」と考えることは、悩まなくてもいいこと。答えは出ないし、出した人もいないのです。答えを出したと自分で決めた人はいます。それに追随してきた信者やファンはいます。

「何か」とか「何か？」なんて要らないのです。だいいち「何か」なんて得体の知れないものにまともに体当たりすると壊れますよ、ぶっちゃけた話が。

わざと負けて身を任せる。身を任せることは身をかわすこと——。

ドッジボールみたいに生きてみましょう。「何か」（保留だったり追求だったりする）と

か「何か？」（追求）というボールから身をかわすのです。

なにしろ、「何か」と「何？」は日本語ではそっくりさん同士なので、勘違いしやすいのです。

かといって、「何か」と「何？」とは何かなんて考えては、身をかわしたことになりません。放っておくのです。

＊

「何か」と「何」という言葉を使わないほうがいいという話ではありません。いままで通りに使いましょう。

ただし、文字どおりに取ると馬鹿を見るので控えましょう。深く追求しないのです。深追いしないのです。世界を背負いたい人は別ですけど。

「何か」と「何」に見られる日本語の言葉の綾を整理したうえで使うといいかもしれない。それくらいに取っていただければうれしいです。

#言葉#日本語#妄想#任せる#負ける#ニュートラル#占い#賭け#ドッジボール#言葉の綾



意味が立ちあらわれるとき



＊

意味が立ちあらわれるとき

星野廉

2022年3月22日 09:21

目次

赤ちゃん

ペット

言葉をいじる

赤ちゃん

赤ちゃんを見ていると意味と無意味について考えずにはいられません。赤ちゃんの表情や仕草や声が信号に感じられるからです。

信号というのは、前提として意味やメッセージを想定しているわけです。つまり、はらはらどきどきです。

しかも点滅してあおることもあります。

この泣き声はおむつを替えてほしいなのか、お乳がほしいなのか、どこかが痒いのか、痛いのか、暑いのか、それとも熱いのか？ こんなふうには解読ごっこになります。

初めてのお子さんだと心配でしょうね、不安でしょうね。解読地獄におちいる場合もありそうです。

＊

でも、赤ちゃんとお母さん、お父さん、その家族の人たちの様子を見ていると、赤ちゃんの発するあらゆる信号をつねに正しく受けようとしているわけではないのに気づきます。

受け流しているように見える場合がよくあります。ほほ笑みにほほ笑み返す、ほほ笑みにしかめっ面をしてみせる、ほほ笑みをただ眺めている。泣いても知らん顔。

それだけでいい。そこにいて笑みを浮かべているだけでいい。そこで泣いているだけでいい。そこにいるだけでいい。

信号は解読すべきものではなく、ただそこに「いる」という、おおらかでおおまかな印として、そこに「ある」かのように見えます。

\*

ただ「いる」という信号として、ただ「ある」だけ。

意味はそこにあるというより、人の中にあるのでしょうか。世界が意味だらけなのではなく、人の中が意味だらけなのでしょう。

人は自分の中でたちさわぐ「意味の立ちあられ」を静める術を心得ているようです。

## ペット

言葉は、話し言葉つまり音声と書き言葉つまり文字だけではない。表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚もまた言葉だ。そう思っています。

ペットとの間での言葉は何でしょう？ ペットとのあいだだから、愛だ。なんて言いそうになりましたが、この駄洒落はなかなか言えている気がします。

言葉の通じない相手とのあいだにある愛は交流でなければなりません。一方通行で

あってほしくないわけです。

「ほしくない」のですから、願いです。願いでしかありません。

＊

自分が猫や犬と接するときを感じるのですが、擬人化は避けられないと思います。

ヒトとヒト以外の他者（生き物や物）との接し方の基本には擬人化がある気がします。ヒトは擬人という愛し方しかできないのかもしれないかもしれません。

愛用のカバンを思わず撫でたり、靴に話しかけている自分がいます。愛おしいのです。

＊

話し言葉や書き言葉が通じない相手とは、表情、仕草、身振り、五感を用いた感覚を動員して、触れあい、付きあうしかありません。

話し言葉が通じない相手との関係では、声は話し言葉ではなく、純粋な声や音声として立ちあらわれます。

犬や猫に話しかけた場合、相手は言葉ではなく音声としてとらえているにちがいありません。

抑揚、声の質、声の肌理、声の大きさ、声の色、声の長短。

まだ言葉を習得していない赤ちゃんとの間でも、そうでしょう。

＊

ある特定の音の並びがある特定の意味やメッセージを持つ場合もあるでしょう。その限りにおいて意味が立ちあらわれている気がします。

犬に対しての「待て」が「待て」であるかは、犬に聞いてみないと分からない気がします。聞けない以上分からない気がします。

その点、猫はマイペースです。こちらの信号をわざと逸らしているように見えることがしょっちゅうあります。

かまってちゃんの犬と超マイペースな猫のどちらも好きです。

ペットという他者との付き合いもまた、意味と無意味について考えさせてくれます。

意味とは働きかけなのだと思います。通じないかもしれない相手や対象に働きかけたとき、意味が立ちあらわれる気がします。通じないかもしれない——。その意味で賭けなのです。

## 言葉をいじる

世界の意味 意味の世界  
世界の影 影の世界  
言葉の夢 夢の言葉

私の記事のタイトルでは、上のようなパターンがありますが、もちろん故意にやっています。

故意に偶然をやっているのです。故意に偶然を招くのです。

いま書いた文に見られるレトリックもよく使います。撞着語法なのかもしれません。

レトリックを分類することには興味がないので、知りません。知りたいとも思いません。

\*



自分で書いた文字なのに、自分を離れて「何か」に見える、「何か」を発してくる、「何か」を放ってくる、「何か」を話しかけてくるのです。

それが、私にとっての「意味が立ちあらわれる」です。「現れる・表れる・顕れる・洗われる・あら、割れる」という感じ。

意味は印象やイメージと同じで、個人的なものだと思います。多者である他者と通じるかどうかは賭けなのです。

各人がいなく意味は、多数の他者と重なる部分があれば、重ならない部分もあり、宙ぶらりんだという意味です。

#言葉#声#日本語#文字#赤ちゃん#意味#メッセージ#ペット#レトリック



見慣れたもの



＊

見慣れたもの

星野廉

2022年3月12日 13:23

山に囲まれた町で生まれ育ちました。そのわりには、山について無知です。まわりの人たちを見ていると、自分が驚くほど山を知らないことに気づきます。

こどものころには近くの里山みたいな山で遊んでいました。学校から帰るとさっそく山に行くのです。登るというよりも、ただ行くという感じ。もうそんな勾配の緩やかな山でさえ登れない体になりました。

その反動か、高低関係なく山の映像がたくさん出てくるテレビ番組を好んで見えています。画面に吸いこまれるように見入っています。

＊

見慣れたものをよく見ているとは限りません。知っているとも限りません。見るとか知るの難しいとつくづく感じます。

私にとって「見た」とは、見たのちに目をつむってその光景が頭に浮かぶことです。頭に浮かんでいるものが視覚なのかどうかは分からないし知りません。

視覚のような気もするし、そうでない気もします。分けられないのですから、分からないのでしょう。

＊

最近、言葉と「見る」とのかかわりについてよく考えます。言葉を知ることで見えるようになるとか、逆に言葉が邪魔をして、ものが見えなくなるとか、そういう話です。

先日、山についてのテレビ番組を見ていて、その解説がとてもうまいので、思わずメモを取っていました。

山頂の標柱、山肌、山腹、峠、広場のような場所、○平、○原。

沢、岩壁、ほこら、お社、○側と○側、湖、連峰、灌木、植物の名前。

こうした言葉が新鮮に感じられたのです。聞いていてわくわくしました。

いま、上の言葉たちを眺めていると、その番組で見た映像だけでなく、自分が見てきた山の景色やイメージが断片的に頭に浮かびます。

景色やイメージという言葉を使いましたが、見えているような、見えるのとは違うような不思議な感覚です。

＊

とくに心がざわつくのは「山肌」という言葉です。山に肌、皮膚があるというイメージはぞくぞくします。いわゆる比喻です。懸け離れた山と皮膚が言葉として一瞬出会うわけです。

うちの二階の窓から近くの山が見えるのですが、いまは雪解け直後なので、広葉樹の多い部分はまさに山肌を露わにしています。どの木も葉を落とし地面が現れているのです。

無数の黒っぽい幹と枝たちが山を被う景色は線画のようです。一本一本の線が見える気さえます。あの枝をこの指で摘まんでみたい。そんな狂おしい気持ちに襲われることもあります。

葉の生い茂る季節には見えない山の形がくっきりと見えます。見慣れた山が、こんな形をしていたのか。目を見開く自分がいます。

頭皮を連想しました。誰かの頭を間近に見たときに見える、ちょっとグロテスクな模様というか「景色」です。不気味なので、よけいに惹きつけられて見つめてしまいます。

\*

これは、山肌という言葉が久しぶりに聞いて、意識して目に映る、そして頭に浮かぶ景色なのでしょう。

山肌という言葉が、見慣れた景色を別の景色に変えたような気がします。よく見えるようになったのか、かえって何かを見落としているのか。よく分かりません。分ける必要などないのかもしれない。

そもそも「見る・見える」にこだわっていることが、「見る・見える」から遠ざかっているようにも感じられます。たぶん、そういうことなのです。

# 思い出 # 山 # 山肌 # 里山 # 見る # 景色 # 言葉 # 比喩



「何か」に「何か」を





＊

「何か」に「何か」を

星野廉

2022年3月12日 08:25

「何か」に「何か」を見る。

このフレーズで連想するのは、壁の染み、天井の模様、雲、そして占いです。そのさまを思えばぐとぞくぞくします。このぞくぞくは懐かしさをともなうのです。

幼いころに、身のまわりのいろいろなものを見たり眺めていたとき、たぶん「何か」に「何か」を見ていた気がするのです。飽きませんでした。ずっと眺めていたかったという記憶がよみがえってきます。

空想や想像という言葉も連想します。見ているようで、何か別のことを考えている。別のものを見ている。別のものと重ねている。別のものがやって来ている。

見ることの難しさを感じます。「何かそのもの」を見ることの難しさのことです。必ず、「何か別のもの」を見ているのです。置き換えているのかもしれませんが。

＊

「何か」をその「何か」ではないものに置き換える。

こどものころから、落ち着きがない、ぼんやりしている、と言われてきました。「いま」と「ここ」が嫌だった気がします。

どこか遠くに行きたいとよく考えていました。「いつか」を夢見ていたようにも思いだされます。

あのころは、目の前のものや出来事をよく見ていなかった気がします。いまも、そんな気がしてなりません。

いま、身のまわりを見まわすと、やっぱり見ることは難しいと感じます。

\*

「何か」に「何か」を見ると、前者の「何か」と後者の「何か」は違うはずです。異なるはずです。別のはずです。

見るだけにとどまりません。

「何か」に「何か」を読む。「何か」に「何か」の匂いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の臭いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の手触りを感じる。「何か」に「何か」の味がした。「何か」に「何か」が聞こえた。「何か」に「何か」のたたずまいを感じた。「何か」に「何か」の気配を感じた。「何か」に「何か」がいた。「何か」が「何か」だった。

(拙文「世界の意味、意味の世界」より引用)

上のリストを眺めながら、そこに見えてくるものを、これからしばらく書いていこうと思います。

# 思い出 # 夢 # 空想 # 見る # 何か

世界の意味、意味の世界



＊

世界の意味、意味の世界

星野廉

2022年3月11日 13:59

目次

いったい何なのか？

ほのめかしとしての世界

「何か」に「何か」を見る

あらゆる物に何かの意味があるらしい

「何か」は「何か」のしるし

Aと書いてありながら、じつはBであったりする

振りをする世界

曖昧放置プレイ

世界は隠喩である、隠喩としての世界

いったい何なのか？

ある詩を読んだとします。涙が出たとします。

「それは AI が書いたんだよ」

＊

ある文章を読んだとします。わくわくどきどきしました。自分に宛てた手紙のように読めて、居ても立ってもいられない気持ちになったとします。

「その文章の各行の出だしの一文字だけを続けて読んでごらん」

ある意味のある言葉になるのです。

＊

この短歌の韻を説明せよ。

「意味あるの？」

＊

この俳句の隠喩を説明せよ。

「なんで？」

＊

「この詩の掛け詞について論じなさい」

「先生、掛け詞と駄洒落って、どう違うのですか？」

「別称と蔑称みたいなものと言えば、分かるかな？」

＊

おもしろく読んだ文章が、あるいは感心した文章が、アナグラムだったり、回文だったり、言葉遊びだったり、何かの暗号であったり、メッセージであったりする。

ずっと聴いていて大好きな音楽が、メッセージソングだと言われて、その意味や解釈を丁寧に解説される。

抽象画だと思ったのが、ゴリラの描いた絵だった。機械が描いたものだった。孫の描いたものだった。娘の描いたものだった。自分のこども時代に描いたものだと親に打ち明けられた。

＊

作品は作者から離れて存在するという考え方がどうも理解できない。まっとうな意見だと思えない。考えただけでむかむかする。

AIの創作と聞くと、なぜか感情的になって血圧が上がる。

回文とアナグラムからなる詩に涙した自分が許せない。

外国人の詠んだ俳句だと聞くと身構える自分がある。その人の母語が日本語だと聞いてほっとする自分もある。

漢詩や西洋の詩の韻が駄洒落に思えてならない。

韻や掛け詞のある詩に抵抗がある。

創作における、でたらめと偶然と技巧と作為の違いって何だろう。そもそも違いなんてあるのか。

やっぱりレトリックはトリックだと思う。好きになれない。

短い定型詩にそっくりな作品や同一の作品が生まれるのは、確率の問題なのか、偶然の所産なのか、独創性の欠如なのか、無意識の引用なのか、無意識の剽窃なのか、気にすることなどないのか、作者が違うでしょとか背景と文脈が違うでしょと抗議すればいいのか。

友達が酔っ払って書いた詩が大賞を取った。自分の作った短歌が盗作だと言われた。尊敬しているとみんなに言っていた作家が不祥事を起こした。

＊

がっかり。屈辱。絶句。啞然。呆然。ぶ然。怒り。ふて寝。

「え!」、「ばかやろう!」、「うっそん」、「あらら」、「まいったな」、「……」、「むきーっ」、「そうなの? (無表情)」、「ふーん (平気な顔)」、「あんたさあ」

＊

意味はどうやって決まるのでしょうか？

決めるのでしょうか、決まるのでしょうか？

意味を人は決めることができるのでしょうか？

意味は自立しているのではないのでしょうか？ 意味は世界と同じように多であり、他  
なのではないのでしょうか？ 他者であり多者なのではないのでしょうか？

### ほのめかしとしての世界

世界はほのめかす

ほのめかす世界

ほのめかしとしての世界

世界はほのめかしに満ちている

以上のフレーズが並んでいる、あるいは並べられているさまを見ていると、それぞれ  
にほのめかしを感じます。同時に、四つ並んでいること、あるいは並べられていること  
にも、ほのめかしを感じないではいられません。

ほのめかしが気になるときがありません。

\*

世界がほのめかしに満ちていると感じるとすれば、それは苦しいでしょうね。何もかも  
が意味ありげに思えてくるのです。こうなるとほのめかしではなく、謎ではないでしょ  
うか。

意味、メッセージ、謎とその答え、正解。

謎めいている。意味ありげ。

この言い方の裏には、じつは謎などはないとか、意味があるようでないのではないか、



という疑いの念を感じます。まさにほのめかしですね。「〇〇めく」とか「〇〇げ」は疑いの素なのでしょうか。

「もっともらしい」にも通じますね。「もっともらしい」なんて口にすると批判、場合によっては罵倒あるいは悪態です。もっともらしいものが、いろいろな原因になるのはうなずけます。

＊

うちの娘が、さいきん、〇〇テレビの△△アナウンサーが自分に合図をしているって、しきりに言うんです。ネクタイの色が茶系だと何とかいうメッセージだとか、最後の挨拶に何通りかあって、それがこの間送ったメールの返事になっているとか。将来結婚する約束をしたとも真顔で言うんです。あ、夢で約束したらしいのですけど……。

＊

上の文章には意味がありません。隠れた意味もないはずです。たぶん、ですけど。いったん書いた文章は離れていきますので。読み手次第ということにもなります。

とにかく、いま即席で書いただけです。

メッセージなんてありません。隠喩でもありません。韻も踏んでいないはずです。何かの合図でもないです。アナグラムでも回文でも AI 作でもありません。

ほのめかすについて書いていると、ほのめかした書き方になってしまいます。うつるんです。

混乱させて申し訳ありません。

大丈夫ですよ。心配ありません。意味を取れなくなるほうが危ういそうです。

「何か」に「何か」を見る

「何か」に「何か」を見るとき、前者の「何か」と後者の「何か」は違うはずです。異なるはずです。別のはずです。

見るだけにとどまりません。

「何か」に「何か」を読む。「何か」に「何か」の匂いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の臭いを嗅ぐ。「何か」に「何か」の手触りを感じる。「何か」に「何か」の味がした。「何か」に「何か」が聞こえた。「何か」に「何か」のたたずまいを感じた。「何か」に「何か」の気配を感じた。「何か」に「何か」がいた。「何か」が「何か」だった。

＊

意味禍、メッセージという悪夢、「正解があるにちがいない」という強迫観念。

意味は被害妄想に似ています。意味は怪談にもなります。

悲劇にも喜劇にもなるでしょう。あと、惨劇にも。意味は劇薬かもしれません。

意味はギャグにもなります。ちなみに、無意味には意味があります。辞書にも載っているくらいです。もちろん、ナンセンスにもちゃんとした意味があります。そう考えると安心する自分がいます。

#### あらゆる物に何かの意味があるらしい

だいぶ前のことですが、翻訳の仕事をしていたころ、交渉術についての本の訳出にかかわったことがあります。調べ物をしながら、ビジネス、外交、政治、裁判の現場だけでなく、日常生活においても、人は交渉しているのだなあと感じました。

で、いまでも覚えているのは、外交における交渉の場では、遅刻したかしないか、どちら側が早く来たか、相手の仕草、姿勢、発声の仕方、視線、服装、テーブルに置かれた物の位置……、こうしたありとあらゆるものやことが、何らかの意味を持っているという話です。

疑心暗鬼という言葉を連想しました。なにもかもが意味を持っていて、その意味を解

読しなければならないとしたら、苦しくないですか。被害妄想や強迫観念の世界です。

ほのめかしの面倒くさは、かまってちゃんに似ています。世界がかまってちゃんに満ちている状況を想像してください。面倒くさいどころか、発狂しますよ、きっと。

\*

外交や国際政治や地政学といった領域では、ありとあらゆるものが意味やメッセージがあるものとして扱われます。

あの軍事練習はどういうシグナルを送っているのか。あの演習のおこなわれた日時と場所と、他の国際情勢とのタイミングから、指導者が危機的な心理状態にあると考えられる。あの演習の直前にあったパレードでの、指導者の顔色が悪く、視線が泳いでいたのは、健康状態に異変があるからではないか。

そういえば、敵が報道した映像での捕虜のまばたきがモールス信号だったという話を思い出しました。たしか「torture（拷問）」という言葉だったとか。

\*

こうした意見や感想や印象が、マスコミで飛びかいます。いろんな人がいろんなことを言います。かまってちゃんに振りまわされているドMちゃんみたい。なにしろ、とてもうれしそうなのです。

間諜（久しぶりにつかう言葉です）、つまりスパイは国際政治の末端で働くひとたちです。スパイの本家である英国のスパイ小説は、じつに具体的な細部に満ち、丁寧に書かれていてぞくぞくします。

intelligence に防諜、諜報、諜報機関、諜報部員の意味があるのは、興味深いです。知能だけではないということです。AI の I であり、CIA の I でもあるわけですが、こういうのを目の当たりにすると、意味ありげに見えてきて、こうした符合を符号に感じてしまいます。

「何か」は「何か」のしるし

「何か」が「何か」のしるしである。

これは占いの構造かもしれません。

〇〇占い。

\*

しるし、印、標、徴、証、記。

サイン、シーニュ、シグナル。

sign、signe、signal。

レヴィ＝ストロース、リーバイス、リーバイ・ストラウス。

Lévi-Strauss、Levi's、Levi Strauss。

記号、符号、象徴、表象、暗号。

合言葉、符牒、符帳、符丁、隠語、パスワード。

\*

解読、解釈、理解。

悟り、開眼、覚醒。

発見、靈感。

洞察、直観。

\*

錯覚、知覚、まぼろし、幻、幻想、幻覚。

空想、想像、推測、憶測、妄想。

＊

要するに、丁寧な文面だけど、このメールはあなたの最近の態度に怒っているわけね。

つまり、この記事は、あなたへの当てこすり。たぶん、ね。

たくさん書いてあるけど、けっきょく、「だめ」って返事よ。

あの帽子はね、「さようなら」というメッセージだと思うの。

この記事のメッセージはただ一言、「かまちよ」だと思えば、腹も立たないでしょ？

この花の花言葉って何だっけ？

あ、これね……。一言で言うと「ちょめちょめ」よ。

隠喩の代わりに暗喩って書いてあるでしょ。これ、換喩よ。

ここはアリュージョンというよりイリュージョンです。

駄洒落を文字どおりに取ったり、真に受けちゃ駄目です。

#### Aと書いてありながら、じつはBであったりする

英国のスパイ小説で思いましたが、伝統的な英国の小説は、ほのめかしと当てこすりに満ちています。それが読みにくさにつながっているといえそうです。

Aと書いてありながら、じつはBであったり、ひょっとするとCであったりするのです。

私は、わりとこういう書き方が好きです。自分に似ているからかもしれません。

＊

ここで一つ指摘しておかなければならないのは、『日の名残り』と『わたしを離さないで』に限らず、イシグロの小説では事実や思いを遠回しに語ったり、真実を曲げて語る話者が目立つということです。話者ではなくも、ストレートにものを言わない登場人物が多い気がします。

それが英国の小説っぽさなのかもしれません。さっと読んで意味を取ろうとしても、一筋縄ではいかないのです。英国製の小説を読んでいて、ある箇所で詰まってしまい、考えこむことが私にはよくあります。いったい何を言いたいのだろうと裏の意味を考えているのです。

(拙文「素晴らしき敬体小説」より引用)

## 振りをする世界

世界は符号である。

世界は一つの大きなクエスチョンマークである。

世界は無数の謎の記号からなる大きな疑問符である。

でまかせに即席でつくったフレーズですが、なんだか謎めいて意味ありげに思えてしまいます。

全部が全部とは言いませんが、大半のほのめかしには実体がないのかもしれません。もちろん、意味もメッセージもないという意味です。

ふりがあるだけ。身振りの「ふり」です。

ふりをなぞる。なぞをなぞる。

世界は空疎なほのめかしである。

「ほのめかす」などじつはなく、この世にあるのは「ほのめかされる」ばかりである。

森羅万象とはパントマイムをする身体のない大道芸人の笑いである。

## 曖昧放置プレイ

両義性や多義性と同じく、ほのめかしは、曖昧とほぼ同義です。

訳の分からないほのめし方をされると、曖昧なままに放置された気がします。

詩や哲学というジャンルでは、この曖昧放置がプレイとして用いられます。ここでのプレイは、まさに多義的であり、遊戯・遊技・演劇・演技・競技といった意味あいを持ちます。

面倒くさいですね。こんなんで放置されたくないですね。

\*

マラルメもニーチェも結果的に曖昧放置プレイがうまい人だったという印象があります。ニーチェはがむしゃらに矛盾と逆説を具現し、マラルメは徹底してほのめかすという手法で読む者を曖昧に放置しました。

禅の公案、世阿弥、芭蕉、そして腹芸という具合に、曖昧放置プレイがお家芸ではないかと思われるこの国にも、マラルメ、ニーチェ、ドゥルーズの信者が多いのは注目すべき現象ではないでしょうか。

今挙げた固有名詞たち——曖昧放置プレイの名人——に共通するのは、真理とか事実とか悟りとか覚醒という言葉が世迷い言だと看破し、概念とか観念とか学術用語とかいう言葉が対応を欠く空虚な記号である、と生真面目に受け止めてしまったという点ではないでしょうか。

(拙文「曖昧放置プレイの名手たち」より引用)

## 世界は隠喩である、隠喩としての世界

以心伝心、腹芸、顔芸。

シュール、不条理、わけがわからない。

比喩、隱喩、暗喩、たとえ、寓意、象徴的。

寓意とか隱喩と言えば、文学作品のほかに、黙示録やノストラダムスのラテン語で書いた文章を思い出します。

\*

におわず、暗示する。それとなく言う。当てこすり。言外の意味。行間を読む。余白を読む。オブラートに包む。裏読み。

連想。推理。靈視。邪推。解釈。理解。こじつけ。論理。

忖度。憶測。共同幻想。妄想、幻想。

指示、指令、合図。

\*

難解、晦渋。

曖昧、謎、不可解。

こうした言葉がある種の魅力をもち、ある種の人たちを惹きつけてやまないのは事実のようです。

訳の分からないものに魅力を感じる人もいます。感心する人もいます。

有り難く頂戴し、その前で身もだえしながらひれ伏すのです。

へそ天的というか、マゾッホ的状況だと思います。宙づり＝サスペンスは気持ちのいいものです。私も大好きです。

\*

世界は外にあって自立した「何か」なのかもしれません。



私たちは、それを知覚と言葉と気配をとおして、ながめるだけ。

それが何なのかは、賭けるしかない。そんな気がします。掛けられ、宙づりにされているのは私たちなのです。

そう考えると、やはり「何か」は私たちの思惑とは無関係に自立した「何か」なようです。

＊

大きな劇場にたったひとりで椅子に縛られて身動きできない状態で、スクリーンに向かって視線を動かすだけ。

隔靴搔痒の遠隔操作。

夢に似ています。夢は強制的に見せられる映画。自分が参加することも、操ることもできないとりとめのない映画。

その映画の意味は「何か」とひとりずつぶやくしかなさそうです。

＊

その映画はいつ終わるかもわからない。ただ飽きることはなさそうです。

夢はあれよあれよ。すべてが肯定される世界。異議なんてない。

夢がつまらないと感じたことがありますか？

楽しみましょう。夢かもしれないこの夢を。

夢だと思えば、あくびも堪えられます。

＊

おやすみなさい。

Sweet dreams.

#夢 # 意味 # メッセージ # 隠喩 # 寓意# ほのめかす # メッセージ # 詩 # 文章 # レトリック

「たったひとつ」感、「たったひとり」感



＊

「たったひとつ」感、「たったひとり」感

星野廉

2022年3月11日 10:00

目次

無文字という選択

決まり

「それだけ」感

多なのに一

決まりに逆らう、一に抗う

抽象と具象を兼ねそなえた言葉

錯覚は最大の武器

無文字という選択

本来なら、人は本なんて読みたくないのです。読む義理もないのです。

よく考えてください。話すものである言葉を、わざわざ文字にして、それを見るのではなく、読むのですよ（じっさいには「見る」ことは至難の業であり、しかも読めていません）。それを理解したなんて言っているのですよ。かなり不自然で、妙ちくりんなことを、人は発明して毎日やっているのです。

よろしいでしょうか。文字はあくまでも後付けなのです。無文字社会もあったといえます。視覚言語は文字ではありません。表情、手振り、身振りがあります。

人類にとって、無文字でいくという選択肢もあったはずですが。文字社会でいく必然などないという意味です。

それがいつかどこかでズレてしまったのです。言語の獲得（もともとの無文字の話です）と同じくらいの生物学的逸脱かもしれません。

## 決まり

言葉は決めるのではなく、決まるのです。これで決まり。

「決まる」は絶対なのかもしれません。絶対王政の絶対です。絶対は絶大なのです。絶倫かもしれません。

「決まる」は人知を超え、「決める」は人為。

＊

言葉は決まる。言葉は決まり。言葉で決めれば、決まったことになる。人はあらゆることを言葉として処理する。言葉にならないものは、この世には存在しないという意味。

だから、人は言葉にひれ伏す。

というふうに短絡してみましょう。

シンプルであることが言葉の最大の利点です。真実はシンプルでなければならない。

というふうにも短絡してみましょう。

＊

言葉の中でも書き言葉、つまり文字はシンプルに見えます。

愛

は愛なのです。

揺るぎない。ぶれない。不動。永遠。不変。普遍。不偏。不返。

愛の両義性どころか、多様性や多層性が見えなくなるとも言えます。

＊

文字は無限に複製し拡散できます。

どんなに数が増えても、愛は愛なのです。

愛がたったひとつの文字であることに注目しましょう。これは、愛の意味がたったひとつであり、その価値もったひとつであり、それゆえに普遍であるというイメージをいだかせます。

＊

愛は一字ですが、もう少し長くしましょう。

世界はひとつだ。

こう書くと、世界はひとつに思えてきます。そう思わない人も、この文字列を見た瞬間は「愛はひとつだ」と思います。思わないと読めません。信じないと読めないのです。

思って読んだ後に、「やっぱ、違うわ」と判断するのです。

世界の多元性を思う人もいるという意味です。

＊

とはいうものの、一度でも思わせ、信じさせたもの勝ちです。

脳は次の「読み、信じる」という処理作業に移らなければならないからです。判断なんてしている暇はないのです。

このようにして、文字を読んで、そう思った、そう信じただけが、残ります。

読むの基本は信じることなのです。

## 「それだけ」感

文字はシンプルで、「それだけ」感が強いのです。「それだけ」感とは、「感」ですから印象でありイメージです。検証ができません。

「それだけ」っぽい。「それだけ」がぶんぶんにおう。なんとなく「それだけ」という感じがして、「それだけ」という気分になるとも言えます。

\*

「それだけ」の対極にあるのが、「ああでもないこうでもない」「ああだこうだ」「ああでもありこうでもある」「ああだとも言えるしこうだとも言える」「こうかもしれないし、ああかもしれない」という感じですか。

これじゃ困るのです。訳が分からない。とりとめがない。曖昧だ。曖昧模糊としている。両義的どころか、多義的、多層的、多元的。

そんなんじゃ使えないのです。容量が重すぎて動かせません。面倒くさくもあります。

\*

文字はシンプルに見える。いくらでも複製・拡散可能。

決まったものはシンプルであることに越したことはないのです。持ち運びやすく、さくさくと読めなければなりません。

## 多なのに一

目で見える「たったひとつ」「たったひとり」が文字です。

「山」とあれば、山というものがあると錯覚する。単一な山を想定してしまう。「人」とあれば、人というものがあると思ひこみ、人の多様性を無視して、人一般を思いうかべてしまう。



抽象です。抽象とは、切り捨てることです。一本化の代償とも言えるでしょう。

とくに固有名詞。中でも人名の「たったひとつ」感と「たったひとり」感は強いです。ある特定の人物の多様性を忘れさせ、ある人物が多数、無数の人物や事物と結んだ関係性という絡みを一本の短い線に変えてしまう。

他人とは多人なのです。こう書いてもむなし。「たったひとり」感は絶大なのです。

多なのの一に見える仕組み、それが文字です。

世界をシンプルに見たい人には、文字は最適の錯覚製造装置なのです。

## 決まりに逆らう、一に抗う

話は飛びますが、二十世紀の一時期にフランスあたりで文化的な革命に似た運動の機運がありました。

「フランス現代思想」なんて言葉で検索すれば、たくさんの人名や作品名が出てくるはずです。私もそれに熱中したことがありました。

いまになって思いかえすと、あの運動は決まりに逆らうという言葉と、言葉の身振りに満ちたものでした。

「たったひとつ」という決まりに反抗しまくった人たちがたくさん出たという感じ。

読みの多層性、権力の構造の多元性、解釈と意味の多様性、文字と文字列（アルファベットです）の多義性と多層性、歴史の無数性、知に無数の穴があること（つまりまだらでまばらですかすかであること）、に注目した人たちがいました。なぜか、みんな比較的短命に終わりました。

一への反抗。多への賞賛。

背後に、一神教がある、ロゴスがある、なんていう予定調和的な言い方をすれば、なるほどと思われる方もいらっしゃるにちがいません。

※ロラン・バルト（64歳没）、ミシェル・フーコー（57歳没）、ジル・ドゥルーズ（70歳没）、ジャック・デリダ（74歳没）。瞑目合掌。

\*

簡単に言うと、次のようなイメージです。

訳が分からない。とりとめがない。曖昧だ。曖昧模糊としている。両義的どころか、多義的、多層的、多元的。

心当たりがありませんか？ そんな感じでしたよね。

「たったひとつ」を目の敵にして、複数性だの多数性だのを武器にして、反抗しまくったのです。

いまは下火ですね。残党はいるにはいますが、どっちかという「たったひとつ」的な方法で、「たったひとつへの抵抗」をながめているという倒錯におちいっている感があります。「感」ですから印象です。

\*

フランス以外の欧州や、アメリカや、はるばると離れた日本でも、似たようなレジスタンス運動が見られました。

日本でも、欧州のローカルな問題をまるで普遍的な自分の問題であるかのように錯覚するという倒錯がはやり、いまもその残滓があるみたいです。詳しいことは知りません。

ちょっとだけイメージを言いますと、フランス語やドイツ語や、はたまたラテン語や

ギリシャ語の駄洒落や言葉の綾を、まるで自分の問題のようにありがたくいただいて翻訳語あるいはカタカナ語で議論しているのです。

＊

原文でやればいいことを翻訳でやっている。自分の問題、自分の生まれ育った環境での問題として考えていない。

母語を失念し、ないがしろにした議論だという意味です。いっそ、原語で議論したほうが真摯な態度だと思います。いずれにせよ、普遍信仰です。「たったひとつ」を指向しています。

「たったひとつ」への反抗を対象に「たったひとつ」を目指している倒錯感があります。固有名詞にひれ伏し、作者を信じ、テキストの一義的な解釈を指向しているように見えるという意味です。あくまでも印象です。

### 抽象と具象を兼ねそなえた言葉

言葉は誰もが生まれた時から、自分の外にあって、それを真似て学び、自分の中に入ります。

これは言葉がこと（言・事）であり物でもあるからです。抽象と具象を兼ねそなえているとも言えるでしょう。

中にいるのに、外にいる気がしてならない。中にいるけど、いまでも外にもいるわけだし、多数の他人の中にもいるのだから、言葉は自分の思いどおりになるわけがない。そんな側面もあります。

他人は多人であり、他者は多者であるからです。

その結果として、言葉は外なのです。外だと言えます。

＊

外にある言葉を遠隔操作するなら——正確には外にある事物を、やはり外にある言葉という代理を使って遠隔操作するなら——、軽量でさくさく動かしたほうがいいに決まっています。

話し言葉はもたもたしています。時間がかかります。それに対し、書き言葉である文字は軽量でコンパクトでさくさく動かします。

抽象と具象と兼ねそなえていますから、人の中に入ったり出たりもできます。

こんなものがほかにありますか？

### 錯覚は最大の武器

抽象化、コンパクト化、見える化、さくさく軽量化。これらを実現したのが文字です。

何を「〇〇化」したのかといえば、世界、宇宙、森羅万象でしょう。一本化、一つに絞る、これが抽象です。多を一だと錯覚し、チョロいもんだと見なすわけです。

さくさく軽量化すれば、無限に複製し拡散することが可能です。げんにそうなります。ますます拍車がかかるでしょう。

言葉は知識から情報へと出世魚のように名を変えたのです。正確に言えば、言葉というより文字です。

＊

話し言葉は相変わらず重いです。もたもたしています。話すにしろ、再生するにしろ時間を要します。

「話す」は時間の持続と経過の中にあるからです。しかも瞬時に消えるという最大の特徴

(弱点でもいいです) をかかえています。

\*

現物の代わりに似たものを使う。代理を使う。代理である偽物をいじって、本物を操っている気分になる。

錯覚は人にとって最大の武器だと思います。ここまで来ることができたのは、錯覚のおかげでしょう。

武器ですから、自分に向くこともあることを忘れたくないですね。

# 言葉 # 日本語 # 文字 # 錯覚 # 話し言葉 # 書き言葉 # 情報 # 抽象 # 具象 # 複製



駄洒落と比喻と掛け詞





＊

## 駄洒落と比喻と掛け詞

星野廉

2022年3月3日 15:10

私は駄洒落が好きです。年を取るとよけい好きになるようです。老化のあらわれなのかもしれませんが、昔からそうだったような気がします。

記憶が定かでなくなり、何でも「昔」なんて大ざっぱな言葉で総括することが老化じゃないの？

最近、被害妄想じみた幻聴っぽいツッコミを自分でするようになりました。

妄想じみたところか、もうそうですよ。

やっぱり、もう、そうでしたか。この妄想が妄想であってほしいものです。

……。

＊

思うのですが、駄洒落と比喻の根っこは同じではないでしょうか。かけ離れたもの同士を、言葉がつなぐという点では同じだという意味です。

アルミカンの上にあるミカン。

パンダが食べるのはパンだ。

有名な駄洒落です。

アルミ缶とミカン、パンダとパンが頭の中で二重写しになります。音として、そしてイメージ（絵）として二つの要素が頭の中に浮かぶということですね。

その結果として「おもしろい」、あるいは「くだらない」という判断が下されます。

＊

君は薔薇のようだ。（直喩）

君は薔薇だ。（隠喩）

これが比喩ですが、いまどき薔薇にたとえられて喜ぶ人がいるでしょうか？ 陳腐な例で申し訳ありません。

とにかく、人間である「君」と「薔薇」が頭の中で二重写しになる点が、駄洒落と同じです。

結果として「おもしろい」、あるいは「くだらない」という判断が下される点も、駄洒落と比喩は同じです。

君は、うちの庭に咲く赤い薔薇のようだ。

君は、ベルサイユ宮殿の庭園の隅にそっと咲く赤い薔薇だ。

比喩はエスカレートします。駄洒落もエスカレートするでしょうね。やはり、うざいと思われるか、うっとりされるかという判断が下されます。

＊

かけ離れたもの同士が言葉がつながり、二重写しになる。それを誰かが「いいなあ」とか「なるほど」と感じれば、成功した、あるいは受けたことになります。「アホか」とか「くだらない」という印象を与えれば、失敗した、あるいはすべったことになります。

芸の道は厳しいようです。修業を積み、場数を踏むしかありません。才能もあるでしょう。運不運もあるにちがいません。

＊

なんで比喻とか駄洒落が成立するのでしょうか？

物や事や現象が多面的だからだと思います。それを言葉が一瞬だけ、すくい取るのです。

アルミ缶とミカンで考えてみましょう。

アルミ缶とミカンは別個のものです。類似点は見られません。違うという意味です。でも、言葉として見ると、音が似ている、詳しく言うと一部同じなのです。

「違う」と「同じ」が出会います。アルミ缶とミカンという言葉の類似が、アルミ缶とミカンという異なる物同士を結びつけたのです。

あとは、それを見聞きした人がどう感じるかだけです。要するに印象の問題なのです。判断するのは人ですから、この出会いつまり類似は検証はできません。見聞きした人の頭の中で判断が決まります。

頭の中でアルミ缶とミカンを一瞬思いえがき、同時に音の類似を意識し、「おもしろい」と感じるか「くだらない」と感じるか、です。

どちらにせよ、アルミ缶とミカンの数々の特性の中で、音の類似、つまり言葉として似ているという点が、一瞬両者をつないだのです。簡単に言うと、言葉が事物同士を一瞬つないだのです。

＊

君（人間）と薔薇（植物）で考えてみましょう。

君という人間と薔薇という植物の間の類似は何でしょう。ここでは「美しさ」でしょうね。美しいと思っていなければ、そもそもあんな言葉は出てこないわけです。心にも

ないことを言っていなければの話ですけど。

言われたほうが、「まあ、うれしい」と感じれば成功です。また、第三者が、その言い方を見聞きして「なるほど」とか「分かる、分かる」と感じれば、これも成功です。

君という人間も薔薇という植物も多面的な存在です。つまりいろいろな特性があるという意味です。その特性のうちの「美しさ」という点が類似として、両者をつないだと言えます。

それが言葉として表されているのです。それが言葉として立ち現われているのです。

＊

このように、言葉がふたつの事物をつなぎ、言葉として存在しているのが、比喩であり駄洒落なのです。それが人の頭の中で絵として一瞬浮かぶこともあるのです。

両者を、それぞれ言葉とイメージと考えることもできるでしょう。

アルミ缶とミカンがいっしょになっている絵を思いうかべてみてください。シュールですね。滑稽だと感じる人もいるでしょう。滑稽だと感じた人はたぶん笑うでしょう。それが「受けた」という証左になります。

君と薔薇の場合であれば、絵として頭に浮かべて、「絵になるなあ」と相手を感じれば「受けた」というエビデンスと言えるでしょう。

＊

言葉は事物をつなぐキュービッドだと言えそうです。

比喩や駄洒落や掛け詞は、詩歌で古くから用いられてきた技巧です。この技巧をレトリックと呼ぶ人もいます。

言葉は偶然の出会いを生む。「と」は偶然の出会いをつかさどる愛のキューピッド。

ロートレアモンの詩『マルドロールの歌』に「解剖台の上でのミシンと蝙蝠傘の偶然の出会い」という有名な一節があります。この言葉で泉鏡花の『外科室』を想起する人は私だけではない気がします。

(拙文「「と」は愛の言葉【言葉は魔法】」より引用)

ミシンと蝙蝠傘という組み合わせは奇抜でシュールであり、偶然の出会いという言葉は素敵なイメージですね。

＊

駄洒落、比喩に加えて、もう一つの偶然の出会いである掛け詞を見てみましょう。私は詩歌にはうといので、自分の知っている例を挙げます。

小ぬか雨降る御堂筋

これは以前にヒットした歌の歌詞の出だしです。※「雨の御堂筋」、作詞：林春生、作曲：ザ・ベンチャーズ、編曲：川口真、歌：欧陽菲菲。

「こぬか雨が降っている御堂筋」という意味に取れます。一方で、「来ぬか、雨降る、御堂筋」とも取れるでしょう。「(あなたが早く) 来ないかなあ、御堂筋では小ぬか雨が降っているけど」という感じでしょうか。

これは私の受けた印象です。印象ですから検証はできません。

＊

あなたを待てば雨が降る  
濡れて来ぬかと気に掛かる

これは、かなり前にヒットした歌の歌詞の冒頭です。※「有楽町で逢いましょう」、作

詞：佐伯孝夫、作曲：吉田正、編曲：佐野鋤、歌：フランク永井。

私は、なぜかこの歌が歌えます。数年前に亡くなった母の話では、私が生まれて初めて歌い覚えた「流行歌」だったらしいのです。

「あなたを待っていると雨が降る。(あなたが)濡れて来ないかと、気に掛かる」と取れます。一方で、後半を「(あなたが)濡れて来ないかなあと、小ぬか雨が木に掛かっているのを見ながら、私は気に掛けています」とも取れるような気がします。

これは私の受けた印象です。印象ですから検証はできません。

ずっとそう思っただけで、他の人がそう感じているかどうかは知りません。こういうことを話せる友達がないので人に話したこともないです。

\*

掛け詞も懸け離れたふたつの事物を言葉でつなぎます。この掛け詞が意図的なレトリックであれば、書き手は駄洒落や比喩と同じく、賭けるわけです。

書き手にとっては、受けるか受けないかの賭けです。気掛かりでしょうね。糸で木に掛かっているミノムシのように宙ぶらりん。風任せ運任せ。すべて偶然にお任せということでしょう。

\*

書き手ではなく、読み手の側から考えてみましょう。

読むという行為も賭けています。

そう思うとそう読めてくる。これが読むという行為です。あくまでも受け身的なのです。一方で、勝手に読むと考えると能動的にもなりますが、賭けであることには変わりはありません。

決め手を欠いているのです。

これは「そう思うとそう見えてくる」という、トイレの壁や天井の染みが何かに見えてくるのと似ている気がします。つまり、印象なのです。まぼろしと似ています。

ある意味、妄想みたいなものです。

妄想みたいどころか、もうそうですよ。

やっぱり、もう、そうでしたか。この妄想が妄想であってほしいものです。

\*

言葉を書くという行為においては書き手も読み手も、宙ぶらりんのすべてお任せ状態で賭けているとなると、言葉の一人勝ちという意味でしょうか。

そう考えると、言葉は自立している気がしてなりません。意志も意思もなく自立しているのです。石のように。人の思惑とも無縁にです。人である私は石に意地を感じます。

もどかしい、ままならない。既視感を覚えます。

外にあって、外からやって来て、外であるもの――。

いったん話され、放たれ、いったん書かれ、賭けられた言葉は、決め手を欠いたまま、ただ「ある」としか言いようがない。意地のある石のように。いまは、そんな気がします。

#言葉#日本語#比喩#隠喩#直喩#駄洒落#かけことば#掛詞#音楽#歌詞





偶然にまかせて書く



＊

**偶然にまかせて書く**

**星野廉**

**2022年3月3日 09:36**

「言葉を魔法」というタイトルのシリーズで記事を書いていたことがありました。「言葉は魔法」と書くと、すらすらと文が出てくるので、書いていました。おまじないの言葉だったのです。

何が出てくるのかというと、「言葉は〇〇」というフレーズなのです。それがまた文を出してくれるのです。おもしろいように書けました。

なぜかすらすら書けてくる、なぜか言葉が出てくる、何かに任せている自分がある、何かに任せた結果として言葉が出てくる。

出任せで書く、つまり出るに任せる。自分が書いているとは思えない。

そんなこと自体をテーマに記事を書いたこともありました。言葉はジャズとか、言葉はアドリブという感じ。

まさに言葉は魔法。

＊

何かに任せるというのはワンコがよくやるへそ天に似ています。仰向けにおへそを天に向けて、手は結んで——結わえるではありません——肱を曲げる。足も曲げる。

どうにでもしてちょうだい。すべてお任せします。任せることは負けることなのです。全面降伏。

いわば、そんな心もちで書いている気がしました。何に任せているのかは分かりません。それを考えると、その状態がなくなるような気がするのです、よけい考えなくなります。

自分を無にするのです。でも出てくる。言葉が出てくる。文が出てくる。それが積み重なって文章になる。

自分が「無」なんてことはなく——空っぽではありますが——、そんな気がするのだと思います。自分の中にはこれまで学習した言葉と言葉の組み合わせが詰まっているはずです。それが何らかのきっかけで出てくるのだらうと考えられます。

\*

無から有は生まれません。言葉について言えば、そんな気がします。

話しかけると答える箱。そんなブラックボックスのようなコンピューターというかアプリというかシステムがあるそうです。

たくさんの言葉と、たくさんの組み合わせが入っているはず。その組み合わせは、人の問いかけや人が投げた話に答え、期待や思惑に応えるものでなければなりません。

まるで人間と話しているかのような気持ちにさせる箱がこれまでたくさん作られてきたようです。いろいろな呼び名があります。

人名と同じ名前が付いている箱、つまり機械もあります。これは欧米に多いようです。文化や風土の違いでしょうか。ハリケーンに人名を付ける行為を連想します。

それぞれの機械は、その開発者たちの個性が反映されているとも言えそうです。機械

によって、学習した内容が異なるという意味です。

文は人なり。機械は人なり。たしかに機械は開発者の作品とも言えます。著作権とか特許もあるはずです。

ある言葉を投げしてみると、機械ごとにいろいろな反応があるのにちががありません。それぞれ癖があるのです。開発者たちの個性だけでなく、意図や目的も織りこまれていくはず。得手不得手もあるでしょう。

いまでは詩をつくったり、俳句を作ったり、小説を書いたりする機械もあるそうです。作曲や囲碁や将棋ができる機械の存在は、みなさんご存じのとおり。

そのように作られているわけです。最近では自主的に学習する機能を備えたものもあると言います。

学習したこと、教えられたことしかできなかった機械が、自分で勝手に学習するようになったそうです。

まるで人間のように、ためらったり、おどおどしたり、言葉に詰まったりするロボットをテレビで見たことがあります。おもしろいし、怖くもあります。中には腹を立てる人もいます。

＊

なぜ怖く感じるのでしょうか。なぜ腹が立つのでしょうか。

自分が脅かされている。自分が否定されるのではないか。このふたつの気持ちが大きい気がします。

機械の分際で。生意気な。そういう心理もあるはず。

ある日とつぜん、自分の勤め先から、あなたはもう必要がなくなったから辞めてほし

いと言われたときの気持ちを想像してみましょう。

悲しいし、理不尽さに腹が立つにちがいありません。この先どうやって食べていけばいいのだろう。家族はどうなるのか。切実な問題です。さらに言うなら、生き甲斐もなくなるでしょう。これはつらいです。

自分が否定される。自分の存在と存続が危うくなる。

解雇の理由が、誰かでなく、機械だとしたら。自分より優秀な誰かではなく、自分より優秀な機械だとしたら。

悪夢でしょうね。

ありえない。機械の分際で。生意気な。

だいいち、機械には心がこもっていないではないか。機械のやること、書くことなんて、偽物、フェイク、まがいものだ。

最後はやっぱり心。思いやり。そして血の通った体。機械には思いやりは不要。感情も気持ちも心もないから。そもそも血も涙もない。

欠点を指摘すると、それがたちまち改善される。あら探しが相手の進歩への奉仕になる。しかも二十四時間ぶっ続けに働いても疲れない。

相手は機械ですから否定できません。悪態をついても動じません。仕方なく理詰めで批判すると、それを糧にして自分で学習しさらに向上するのですから、無力感に襲われます。

いっそ欠点や批判めいたことは何も言わないのがいちばんいいのかもしれないですね。相手を利するだけです。無視しましょうか。いないことにしましょうか。

そんなわけにも、まいりません。

機械に取って代られるなんて、そんな馬鹿なことがあるわけがない。そもそも許されていいものはない。禁止するしかない。

なにしろ、誰かならいつか死にますが、機械なら簡単には死にそうもありません。下手をするとこれから先ずっと生きています。しかも進化し続ける……。

自分の出番が永久になくなるという意味です。不安になり、腹が立つのが人情でしょう。私だってそんなの嫌です。

＊

言葉は魔法を書いていたときに、言葉のサイコロとか、ダーツで言葉を当てて書くなんて考えてことがあります。一種の実験です。

偶然に任せて書くという実験。

言葉のサイコロとダーツは持っていないので、錐を使いました。新聞を広げて、錐を上からそっと落とすのです。すると何かの文字に当たります。それを使って「言葉は○  
○」と書くのです。

そうやって作ったフレーズを断片にして、組みあわせて書いた記事なのですが、「詩みたいだ」という意味のことを言われました。

むなしくなったので、そういう書き方はやめました。

「現代詩」と言われて読んでいた詩が、回文やアナグラムだったときの驚きに似ています。感動した童話が機械の作文だと知ったときのショックに似ています。作者を伏せたまま読ませられ駄文だと感じた文章が、ある有名作家の作品だと聞いたときの当惑にも似ています。

いったん書かれた言葉や文章は自立する、という説を思いだしました。作者はいない、という誰かの言ったフレーズも頭に浮かびました。

＊

偶然に任せて書くというのは、私がこれまでにずっとしてきた駄洒落に導かれて書く  
というのとよく似ています。そっくり、激似です。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉  
や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物  
や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と  
澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だま  
す」のですから詭術である。

(拙文「する、される」より引用)

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことがありませんか。走っても走っても  
走ってないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもり  
なのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもじつは  
賭けていないと激似ではありませんか。じつにもどかしいです。

気に掛けても掛けてもじつは掛けたことにはならない。絵が描けても描けてもじつは  
描けてはいない。絵を描いても描いてもじつは描けてはいない。文章を書いても書いて  
もじつは書いていない。

(拙文「【夜話】じつは、かけていない」より引用)

こんな感じの書き方です。言葉の顔色と出方をうかがいながら書いている感じです。  
自分が書いているという気持ちは希薄です。

駄洒落はきっと降ってくるのです。降りてくるのです。いま思わず天井を見てしまい



ました。

まさに賭けているのです。ギャンブルです。何かにお任せしながら、パチンコをしているのと似ています。

その何かは不明です。

賭けて書けたものだという思いだけがあります。体感で言うと、「ああ、出た」とか「あは、出ってしまった」です。

\*

人の意識と無意識は流動的だと考えられます。一様で一定してないということですね。自分が無になって書いていると感じているときには、無意識が大きくなって、そのぶん小さくなった意識のところだけが覚めている感じ。

だからぼーっとしているのでしょう。その状態でも、無意識は眠っているわけではなく動いているのでしょう。働いているのでしょう。

自動車の運転とか、ゲームの操作なんかがそうかもしれません。ある部分だけが動いている。これは一種の集中でしょう。肝心な部分は覚めているから、運転ができるし、ゲームができる。

ありとあらゆる情報が頭に入ってきたら、集中なんてできそうもありません。脳には容量と処理能力に限界があるからです。機械とは、そこが異なります。

何となく書けてしまうというのは、難なく書けているようで、じつは何となく賭けているのではないのでしょうか。へそ天で顎でも掻きながら、書けている。

難なくではなく、何となく。これが賭けだと思います。

文章を書く機械が、賭けているのかどうかは不明です。それでも書けています。

機械も何かに任せて書いているにちがひありません。その何かが人だとは思えません。全面降伏はしていないもようです。

\*

この記事は、なるべく自分を無にしてだらだら書いてみました。こんな駄洒落だらけの駄文は機械には書けないだろうと高をくくりつつ。

とりとめのない記事にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#### ※関連記事

\*旧「言葉は魔法」：退会削除したアカウントの記事のバックアップです。こちらの古いバージョンに、上で述べたやり方で書いた記事が入っています。

⇒ 目次・時系列

このサイトではかつて note に投稿した記事を再録しています。現在は作業中です。この目次からの各記事へのリンクは少しずつ反映

[bloggpostings2.blogspot.com](http://bloggpostings2.blogspot.com)

\*新「言葉は魔法」：このアカウントの記事です。

言葉は魔法 | 星野廉 | note

連載です。「魔法」に大した意味はありません。言葉って「よく考えると不思議だな」くらいの意味です。

[note.com](http://note.com)

#賭け # ギャンブル # 偶然 # 機械# コンピューター

ある度を高める、ない度が高まる



＊

ある度を高める、ない度が高まる

星野廉

2022年1月27日 09:48

話し言葉は消えます。消えた肉声はぜったいにもどってきません。録音ですか？ 文字にする、ですか？ 電子化された音声とインクの染み（画素でもいいです）であり、肉声ではありません。

肉声とは一回きりの出来事です。ある時に、ある場所で一回だけ発声された言葉が、話し言葉です。

ある言葉が発せられた場に居合わせて、それを耳にするというのは、かけがえのない時間を体験することで、音声を聞くだけの現象ではありません。

話している人の表情、仕草、口調、そしてその場と時の雰囲気。こういったものは、その時、その場に居合わせて全身で受けとめるものです。声を聞くというだけの経験ではないのです。

現在は、そうした体験が軽んじられ、ないがしろにされているように思えてなりません。

現在、この体験の重みと深みがダイレクトに体感できるのは、声をとまなう歌を聴いたり、歌を歌うときではないでしょうか。電子化された音声であって、肉声ではなくてもです。

音楽には、言葉や文字では割りきれないものがたくさんあります。

＊

話し言葉がたちまち消えるのに対し、文字はしつこく残ります。インクの染みも画素の集まりも、複製できます。無数のコピーが可能なのです。驚くべきことですが、身のまわりには、コピーされた文章がげんに無数に存在します。

複写、印刷、筆写、または文書や映像という形で電子化されています。文字には抽象的な側面があるために複製が可能なのです。抽象的なのは文字の形です。音声の形は五感ではとらえにくいです。

あらゆるものが文字になっている。話し言葉は話し言葉として——肉声という意味での音声として——残っていないのに対し、文字は無限に複製できる。この状況に敏感でありたいと思います。

(話し言葉の具体性と書き言葉の抽象性という具合に短絡する抽象は避けなければなりません。肉声にも抽象性があり、文字にも具体性があるからです。)

＊

話し言葉（音声）と、書き言葉（文字）と、身振りが、ローカル、つまり局所的なものであることは忘れられがちです。

客観、普遍、真理、愛、神、民主主義——。たとえば、こういった「もの」は、日本語で記されている「文字」なのです。翻訳されれば、別の「文字」になりますが、別の言語でもちいられている、それぞれの文字はローカルなものです。

客観、普遍、真理、愛、神、民主主義——。こうした文字を別の言語に翻訳すると、その語義が変わります。それぞれの言語で定義されるからです。いや、そんなことはないとおっしゃる方は、○和辞典の読み過ぎではないでしょうか。

各言語の原語による辞書で、上の言葉に相当する単語の定義を当たってみるべきです。

○和辞典の訳語（これは定義ではありません）を見て、外国語を日本語で語ったところで、それは騙りでしかありません。

翻訳は本質的に妥協であり騙りなのです。人の「似ている」と感じる思いに乗じたものであり、「同じ」や「同一」に基づいているわけではありません。

翻訳文化の盛んな日本では、その騙りっぷりや妥協ぶりやただの「似ている」ぶりが感知できないかもしれません。つい、「同じ」だと抽象し飛躍してしまうのです。

客観、普遍、真理、愛、神、民主主義——と、それに相当する他言語での単語が等しいと感じるとすれば、数々の立派な○和辞典が完備し、これほどまでに翻訳書の多い国ならではの勘違いかもしれません。

翻訳を読んで、プルーストの文体を語るとか、ニーチェの文章について語るのと同じ抽象でしょう。訳者の文体や文章を語るのなら、話は別です。

翻訳を読むのが悪いと言っているわけではありません。人類の業績から翻訳を取りのぞいたら、何も残らないかもしれません。

大切なことを繰り返します。あらゆる言葉——話し言葉（音声）と、書き言葉（文字）と、身振り——はローカル、つまり局所的なものであることは忘れられがちです。

＊

たとえ、同じ漢字やラテン文字がもちいられていても、言語が異なると、言葉はローカルなものになります。言語によって、漢字やラテン文字の字体やアルファベットに異同がある場合のほうが多いです。

世界中の誰もが、ローカルなものである各言語、各方言、各固有の身振りという枠の中で、ああでもないこうでもないと言にしたり、文字で書いたり、身振りをしているわけです。

誰もがそれぞれの母語という枠の中で、考え感じ生きています。「言葉を持ってしまった」という共通点だけが、人をつないでいるのです。人とは、「さまざまな言語をもちいる生き物」であるという意味です。

人は「言語をもちいる生き物」であるというふうに、言語の多様性と個別性を無視した言い方はしたくありません。無視するのは悪しき抽象です。抽象にはいい面と悪い面があると考えられます。

翻訳という妥協があるだけでも有り難いと感謝したくなります。個人的にも翻訳にはとても助かっています。いまの私があるのは翻訳のおかげだと言っても言いすぎではないと思うくらいです。

あらゆる言語には他言語の影が見られますが、それは翻訳と関係があります。

\*

歴史をふりかえると、翻訳のほとんどが文字と文字のあいだでおこなわれてきた作業であることにも敏感でありたいと思います。

当たり前のことですが、話し言葉は一瞬のうちに消え、書き言葉、つまり文字はしつこく残るからです。

大ざっぱな言い方で恐縮ですが、人にとって知識や情報とは文字であり、学習や伝達は文字をとおしておこなわれます。現実も映像も幻想も、人同士のいる場ではたいてい文字という形でやり取りされます。

相手の頭の中を見ることができないからです。文字にすれば、簡単にやり取りできて、保存も可能です。最大の利点は、無数に複製できることです。字体や書体やフォントやレイアウトが変わることを無視すると「同一」です。

このように、抽象とは、切り捨てと無視をとまいません。



＊

すべては文字という形で存在しているのです。あなたと私がいま見ているのも文字です。文字を介しての関係の中で、多くの人が毎日の大半の時間を過ごしています。

文字を相手にしていると、人を相手にしなくてもいいという利点があります。ひたすら書類や本や液晶画面のテキストを読んでいる人はきわめて多いです。

しかも、文字を相手にしながら、現実に触れている気持ちになれます。世界や、宇宙とさえ向きあっている気分になれます。隔靴搔痒を忘れた遠隔操作です。

人は身の程知らずで欲深いようです。それが人をここまでにしたとも言えます。人類の端くれである自分を観察しているとつくづくそう思います。

＊

文字はローカルなものです。

各言語における話し言葉の語源や、各言語で使用されている文字の成り立ちを説明したところで、別の言語を母語とする人には、「はあ?」「で?」「.....」でしかありません。

たとえば、漢字のない文化圏の人に、漢字のつくりや成り立ちをわざわざ説くとすれば、説くほうに思いやりと想像力が欠如していると言わざるをえません。相手に苦痛を強いるだけです。

じっさいにやってみると分かります。説明するほうも、されるほうも苦労します。絶望的な気持ちになります。よかれと思って詳しく説明するほど、ややこしくなるのです。

善意や努力がつねに正しかったり有効であるとは限りません。相手の気持ちを考えると、私は二度とやってみる気にはなれません。

日本語を母語とする人にとって「ある」感と「である」感、つまり「存在」感と「存在

するぞ」感の強い漢字ではありますが、あくまでもローカルな文字です。

＊

人は同じである必要も必然もないのです。分かりあえない部分は、同じ言語を話す同士でもあります。異なった相手を尊重するほうが大切だし、現実的だと思います。

日本語の表記についても、日本語をつかっていない人に説明するのはかなり難しいです。在日している、母語が日本語ではない人たちが、日本語の勉強で苦労なさっているのを見ると苦しくなります。

趣味や好きでなさっているとは思えません。日本で生きていくために、やむをえず勉強なさっているようです。

同じであらう、同じにならう、同じにしよう、とすることは、ときとして暴力になる気がします。自分に対する、そして他者に対する暴力です。

同化という言葉とその発想は、残酷であり恐ろしいです。「同一」と抽象と本当と普遍の悪しき側面です。

＊

私たちは文字に囲まれて生きていますが、世の中には文字どおりに取れない文字がたくさん、いや数えきれないほどあります。

文字はないものがあると扱われます。たとえば、「本当 (の)」や「真実 (の)」という文字は、ないものがあると扱われるように人がするときにつかわれます。

文字の「ある度」を高めようとするときにつかうのです。本当の〇〇、本当の〇〇、真実の△△、真実の△△と繰り返すほど、相手しだいで「ある度」が濃くなりますが、同時に「ない」度も濃くなります。

大きいと小さいが同時に起こっているルイス・キャロル作の『不思議の国のアリス』のようですね。

現実の世界で「大きい」や「大きくなる」と「小さい」や「小さくなる」が同時に起こっていることを、言葉の世界でじつにリアルに語って、思いださせてくれます。

大小だけでなく、現実世界で「ある関係」にあると考えられていることが、どうやら「そういう関係にはない」らしい。そう感じさせてくれるという意味で、『不思議の国のアリス』はたぐいまれな作品だと思います。

＊

「本当(の)」や「真実(の)」という文字が、ないものをあるものに思わせようとするときにつかわれる仕掛けであるように、文字を文字どおりに取れない例はほかにもあります。

理性理性と感情的に叫んだり、論理論理と支離滅裂に連呼している場合があります。ある言葉や文字が、ある文章にたくさん出てくると、その言葉について書いてあるような気持ちになります。

とりわけ、「理性」や「論理」という曖昧模糊とした言葉と文字は、「本当」や「真実」と同様に、「ある度」が高いです。つまり「ない」度が高いのです。

こうなっているのは、「理性」も「論理」も、「この言葉をつかいますよ」と決めただけで、意味付けが後手に回っているからにほかなりません。かといって、意味の周知徹底をすればいいという問題でもありません。

「意味」はないからです。ないから、あるあると言いつづけ、書きつづけるしかありませんし、じっさいにそうなっています。あるあると説得しなければならない事態におちいるわけです。

自分たちの「本当」や「真実」を主張する人たちはたくさんいますから、説得運動は

競争になります。争いという意味です。これは熾烈を極めます。場合によっては戦争にもなりますね。

この争いでは、「本当」や「真実」の意味が不明なままである点が重要です。正確に言えば、もはや説得が目的ではなく、もちいられる圧力と腕力と武力の行使自体が目的化します。

したがって、必死になってそれぞれの「本当」や「真実」の「ある感」を強化しようとするわけですが、同時に「ない」感が強化される状況も生んでいます。実体としてあるのは、腕力の行使だけという事態になります。これは恐ろしい事実です。

意味がないもの（言葉のことです）をめぐっての「ある」感と「ない」感の空回りが起こるという意味です。ややこしいですが、言葉はあっても、その意味はあるのではなく、決める（決めた）という点に注目してください。

ところで、意味が無いことを無意味と言いますが、無意味には意味があります。お持ちになっている辞書で「無意味」を引いてみてください。

冗談でもギャグでもありません。辞書とはそういうものなのです。辞書に『不思議の国のアリス』感を覚える瞬間です。

辞書はよく読むと荒唐無稽で不条理に満ちています。それを感知するには、文字どおりに取らないことがコツです。読むより見ることをお勧めします。

たとえば、辞書では短い言葉（語数の少ない言葉）のほうが、語義や例文が長かったり（語数が多い）、同音の語が多かったりします。英語だと「a」、日本語だと「あ」や「ある」、「な」や「なる」がそうです。「短い」と「長い」、「少ない」と「多い」が同時に起きているのです。

読むよりも、目を細めて見るとよく分かります。「目を細める」と「よく分かる」、そして「読まない」と「分かる」が同時に起きています。

辞書は「不思議の国」なのです。

\*

「本当」とか「真理」を保証するものに固有名詞があります。

人名が多いのですが、ある固有名詞やその固有名詞の指す人物の言葉——たいてい文字ですけど——を引きあいに出して、それを自説や持論や、きわめてローカルな言葉が「本当」であり「真理」であるエビデンスのようにもちいる例はきわめて多いです。

〇〇が言った。〇〇にこう書いてある。

こうしたレトリック（言い回し）が、「本当」と「真理」、場合によっては「普遍」の証左としてつかわれます。この現象のエビデンスは容易に見つかると思いますのでお探し願います。

固有名詞の使用にはふだんは消極的な私ですが、効果をねらって、つかうことがあります。この文章の中でもつかっています。

名前、とくに人名の力は強いです。人にとって最強と言えるほど強いと思います。人を判断停止と思考停止におちいらせるという意味です。

固有名詞が普遍や真理を保証するなんて「そんな馬鹿な」と思われるかもしれませんが、よく見かけるレトリックです。

もっとも、こうした傾向は、固有名詞にまわりついている紋切り型の「枕詞」やキャッチフレーズにも問題があります。

「大思想家」「文豪」「天才」「巨匠」「他に類を見ない」「かの〇〇が激賞した」「世界的な評価を受けている」「19世紀最大の」「XXのあいだで評価の高い」「△△氏推薦」「定評のある」……。

そう言われると弱いですよ。私もビビります。何度だまされたことか。こういうのはつぎつぎと新しくのが出てくる柔軟剤や歯磨き粉のキャッチフレーズと同じで、つい信じてしまいます。本も商品なのですね。資本主義の強さを痛感します。

ちゃんと読んで、自分で考えて評価することが大切です。

＊

本当、真理、理性、論理を例に取りましたので、今度は普遍を見てみましょう。人はこの言葉にも弱い。「人は」と言いましたように、私も弱い。普遍的なんて口に出している人や書いている人を見ると、「すごい」なんて感動してしまいます。

根がミーハーなのです。ただ個人的にはあまりつかいません。納得できない部分があるのです。

「普遍的」というのは、そうめったにあることじゃありません。世界は「特殊」や「ローカル」にあふれているからです。だからこそ、「普遍」が目立つとも言えるでしょう。

「普遍的」だと言われているものをよく考えてみると、ローカルで局所的なものではないかと感じることがあります。しょっちゅうあります。どうやら、ローカルなものを指して「これは普遍的ですよ」と訴えているだけなようです。

「普遍的である」と「普遍的ですよ」と訴えているのとは異なりますが、両者を見分けるのは難しいです。不可能ではないかと思うくらいです。

なにしろ、「普遍的」というのは、そうめったにあることではないので、私は「○○は普遍的なものだ」と言ったり書いたことはありません（いま初めて書きました）。世界中の人の意見を聞いてまわることができないからです。

それくらい重い言葉だと受けとめています。とはいえ、人それぞれです。

＊

「普遍」や「普遍的」の語義を辞書で調べても現実的ではありません。人は辞書の語義を見ながら生きているわけではないからです。

「この言葉をつかいますよ」というふうに、ある言葉がつかうことが決められます。そして、人はその言葉の意味について考えたり、考えずにつかうようになります。

人は意味不明な言葉を意味不明なままにつかっている。これが現実なようです。私たちは誰もが、そんな世界に生まれます。そして、自分も意味不明なままに言葉をつかうようになります。この私もそうです。

「普遍的」はそうめったにあることじゃありません。つまり「特殊」なのです。

＊

次に難解を見てみます。

難解って難解ですよ。この駄洒落を何回言ったことか（このギャグも難解だったことか）。でも、すごく言えていると思うんです。難解って難解なんです。解かなくてもいいものを解こうするから難解なのです。解かずに出会ってしまえばいいのに、解こうとするのです。どうしても脱がせたいみたいです。

なぜこういう駄洒落をするのかと言いますと、難解が言葉であることを思いだしていただきたいからです（歳を取ると駄洒落が多くなるというのがあります）。難解という言葉の放つ「ある度」が「ない度」であることを体感していただきたいからです。難解という言葉の「難解」感にまどわされてはなりません。難解とは印象なのです。難解なんてものはありません。つくって決めただけです。

何でも難解に見えます。難解だと思った瞬間に難解になります。「一」という文字も、「一」という罫線も、「口」というカタカナも、「口」という漢字も、難解だと思えば難解になります。抽象、具象、中傷、愚笑、意味、無意味、扇子、ナンセンス、関係なしです。印象ですから、基準なんてありません。難解は節操がないのです。文字にどおりに取ると馬鹿を見るの典型です。

難解という言葉を見て読んだとたん立ちあらわれるのが難解です。目を覚ますため

には「簡単」とか「容易」ではなく、「空疎」とか「張りぼて」という言葉を見るといいかもしれません。ほかの言葉の「ある」度（「ない」度）と「ある」感（「ない」感）で解毒するのです。

ところで、難解って何かいの？

申し訳ありません。さいきん、『不思議の国のアリス』と、フローベール作の『ブヴァールとペキュシェ』と『紋切型辞典』を読みすぎているようです。もちろん、フローベールは翻訳で読んでいます。

＊

抽象的、深遠な。これも意味不明です。辞書で引いても意味はありません。あ、あります。意味が書いてあります。ナンセンスにも意味があります。ややこしいですね。

意味が不明だから、辞書に意味が書いてあるのかもしれませんが。決めたはずなのにわかなくなっちゃった、という感じでしょうか。

そんなわけで、辞書の語義ではなく、人がその言葉をどうつかっているかが大切です。意味不明な言葉を、人がどのようにつかっているかを観察する必要があるという意味です。

「わけが分からん。その話は抽象的だ」、「深いわ。まるで抽象画みたいに深遠だね」、「抽象論だね。でたらめ言うな」、「お話がちょっと抽象的なので具体的に話していただけませんか？」、「わーっ、こういう抽象的かつ深遠で難解な文章を書くなんて、この人は頭がいいのしょうね。普遍的なことが客観的に記述されているにちがいありません。わくわくしてきました。私、本当の真理が大好きなんです。さっそく勉強させていただきます」

うーむ。

言葉の深淵を覗きこんだような気分になりました。きっと、とても浅いのでしょう。私が、です。



#ルイス・キャロル # フローベール # フロベール # 言葉の綾 # レトリック # ローカル  
# 文字 # 音声 # 言葉 # 日本語 # 翻訳 # 辞書



言葉の綾を編んでいく



＊

言葉の綾を編んでいく

星野廉

2022年1月26日 07:59

”Lay it where Childhood’s dreams are twined”

——Alice’s Adventures in Wonderland by Lewis Carroll

生きていないはずの言葉が生きているかのように、さらには生きているふりを装いながら死んでいるふりをしているかのようにも、見える。生きているふりのふりと、死んだふりのふりが、空振りし空回りしている。そんなふうの人に言わせたいように見えなくもない言葉の身振り。

ふりのふりがカラカラとまわる。ふりだけが残る。振りだけがのこる。空回りの空（から）だけが回る。空（くう）だけが回る。まわるだけが回る。笑いだけを残して消える猫。チェシャ猫。知恵者ねこ。

＊

漢語系の言葉や漢字は、「ない」を「ある」ようにほのめかします。これは顔の問題だと思います。文字には顔がありますが、漢字のいかめしさはすごいです。漢語系の言葉を使うと頭が良さそうに見えるし、すごいことを言っているように見えます。

字面が強面だとも言えそうです。ないはない、ことばはことば、ことばはものではない。こういう身も蓋もない、がっかりするしかないほど明快なことを「無は無なり」「言葉は言葉である」「言葉は事物ではない」と漢語系の言い回しで言うと、とたんに「ないはある」の振りをしてしまうという事態が生じます。

がちで「ある」ように思えてしまうのです。いわば顔芸です。いつかは消えるはずの表情だけが「ある」のです。その存在感は無視できません。看過できないのです。

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていたでしょう。漢字や漢語には何だか「思い」がつまっているようで「重い」のです。

ただし、あくまでも日本語においての話です。また私という個人においての話であることは言うまでもありません。母語である日本語をつかう私にとって、いま書いているような言葉の顔をめぐっての話は、じつにリアルな文章体験であり言語体験なのです。

＊

漢語はないことをあると思わせる（におわせる、ほのめかす、ふりをする）日本語における仕組みではないか、なんて思ってしまう。無い無い、無無なんていくら言っても、あるあると暗にほのめかしているのです。

理性理性と感情的に叫んだり、論理論理と支離滅裂に連呼するのと似ています。要するに、言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見るのですから、馬鹿を見たくなければ用心しなければなりません。

ちなみに私は鏡を見ると馬鹿が見えます。

言葉の世界と現実の世界は噛み合っていないとも言えるでしょう。まして一対一に対応しているはずもないのです。途方もなくズレているという意味です。そして、人はふつうそのズレには気づかないのです。

＊

「ない」を「ある」とほのめかしてしまい、それにやすやすと人が乗ってしまうほどの漢語の強面と媚態も、ややこしくてめんどくさいですが、こういうめんどくささは、漢語だけではなく、日本語におけるどんな言葉にも言えそうです。

「真摯に」が「テキトーに」であったり、「スピード感をもって」が「のろのろと」であったりするの、ご承知のとおりです。「分かった」が「分からない」、「承知しました」が「知るもんか」だなんて、当たり前ですね。

ある場面では、「だめよ、だめよ」が「いいわ、いいわ」、「ぜったいにいや」が「もっともっと」だったりもします。政治の世界がそうです。ビジネスの世界もそうでしょう。

めんどくさいですね。文字どおりに取れないのですから、きわめてM的な資質だと思わざるをえません。M的だというのは言葉だけではありません。その生みの親である人も、きわめてM的なのです。両者はともにMの世界に生きているのです。

言語活動はSMプレイ。プレイするのは言葉と人。「プレイ (play)」、ここが大切です。遊技であり競技であり演技なのです。

\*

プレイでは、プレイだけが空回りします。プレイの主役は、じつはプレイヤーである言葉でも人でもありません。プレイのルールなのです。遊技のルール、競技のルール、演技のルールだとも言えます。

ルールを見たことがありますか？ 触ったことがありますか？ ルールは抽象的なもの、観念、概念、枠組みですから、誰も見たり触れたりできません。「ない」のです。でも、「ある」と人は認識しています。

ルールの親戚には、法律、法、規則、法則、真理などがあります。見たことがありますか？ 触ったことがありますか？

私は六法全書なら触ったことがあります。

法は「ない」から文字でわざわざ書いて「ある」のです。「決めた」だけです。書いてあるのは、人が忘れるからにはかなりません。

ないものはたいてい文字になっているので分かりやすいです。文字で書いてあるだけならば、それは「ない」と判断してもかまわないと思われま

「ない」のに人は「ある」と思いこみ、それにしたがうということは、人の世界ではよくあります。それを除いたら、人は人でなくなるほど、人的なものだと言えそうです。その意味では、言葉に近いです。

というか、人は言葉をとおしてルールをとらえます。言葉がルールなのではありません。人は言葉にルールを見てしまうという言い方もできるでしょう。

あらゆるプレイ（遊技や競技や演技）にはルールがあります。あらゆるプレイには振り、つまり動きや仕草があるわけですが、その動きや仕草をつかさどるのがルールだとも言えそうです。司令塔みたいなものですね。

\*

じつは、この司令塔、つまりルールですが、ないんです。存在しないんです。あると思われているだけなんです。でも、あると人は思いこんでいますから、忖度します。「△△って○○じゃないかな？」とか、「△△するためには○○するんじゃないかな？」みたいに、忖度しまくるんです。

忖度、配慮、想像、推測、空想、妄想、幻想、幻覚、錯覚、知覚、なんでもありなんです。なにしろ、対象はないんですから、そうなります。

あらゆるプレイ（遊技や競技や演技）にはルールがあると人は想定しています。あらゆるプレイには振り、つまり動きや仕草があり、その動きや仕草をつかさどるのがルールだとも言えそうですが、じつはルールは「ない」のです。

「ない」と困るので、ルールが「ある」と決めたのです。ほら、ルールは「決まり」と言います。これで決まり。忘れがちなので、これからは決まりと呼びます。

そりゃそうですよね。決まりは「決めた」から「ある」ものであって、最初から「自然



にある」わけがないじゃありませんか。しかもルールはたいてい言葉という「ない」もので決めてあります。

ないない尽くし。ないの空回り。そのうえ決まりはしょちゅう変わります。いや、ないものが変わるわけがありません。「変わった」と、これまた決めるだけです。決めるの空回り。

ルールの空回り。決めただけで「ない」ルールの空回り。「ない」けど（「ない」から）「ある」と決めた決まりの空回り。

＊

「ルールは決まりであって決めたもの」とか「「ない」けど（「ない」から）「ある」と決めた決まりの空回り」ということに、すごく敏感な人がいました。そして、ものすごい本を書きました。

「ルールは決まりであって決めたもの」という言い回しは、駄洒落ですが、その人は駄洒落の名人でもありました。

「「ない」けど（「ない」から）「ある」と決めた決まりの空回り」みたいな、めんどくさい言い方がありますが、その人はめんどくさい言い方の名人でもありました。

こういう駄洒落やめんどくさい言い方を、広い意味でのレトリックとか言葉の綾と言いますが、その名人は日本語で書いた人ではありません。英語で書いたのです。

＊

ルイス・キャロルの書いた『不思議の国のアリス』にチェシャ猫の話が出てきます。簡単に説明すると、猫が笑って、その笑いだけが残るといふ、例のお話です。

猫という物つまり具象が消えて、笑いという表情つまり抽象が残る——。つまり、「ない」のに「ある」ように思える。それだけなら、いいのですが、「ない」のに「ある」よ

うに思えるその笑いが増殖して、あちこちでシンクロしているのですから、困ったものです。

あちこちとは世界のことです。人の世界です。人の世界には、たとえば現実の世界と言葉の世界があります（ほかにもあるようですが、ここでは触れません）。

困ったことに、言葉の世界と現実の世界は噛み合っていないようなのです。まして一対一に対応しているはずもないもようです。途方もなくズレているという意味です。そして、人はふつうそのズレには気づかないのです。

人がズレているからです。人がズレているから、言葉の世界も現実の世界もズレている、その両者が噛み合うわけがないという意味です。

そのズレにきわめて意識的であったという点が、ルイス・キャロルのすごさです。私はこんなすごい人をほかに知りません。これは『不思議の国のアリス』を読むと、体感的に実感できると思います。ジル・ドゥルーズの『意味の論理学』を読むと、頭で理解できるかもしれません。

＊

ルイス・キャロルって面白い話をとてもリアルに書いた人です。私には難しすぎて苦手なのですが、古今東西において稀に見る作家だと思います。あれだけこみいった、ややこしいことを子ども向けのお話という形でリアルに書ける人なのですから。

『不思議の国のアリス』の英語の文章は、本来は他の言語に翻訳できない気がします。説明的に冗漫に、つまりくだくだと訳すか、大ざっぱな訳文に詳細な注解をほどこしてお茶を濁すしかないのです（ただし翻案はできると思いますし、何種類か目にしたことがあります、どれもが素晴らしい訳業でした）。

翻訳できないのは、レトリック、言い換えると言葉の綾だらけだからです。駄洒落（韻とも言います）や、さかしまとあべこべ、つまりめんどくさい言い方（パラドックスとも言います）があちこちでプレイ（遊技・競技・演技）している世界だからです。

おとながまともに読むと、目がまわり、頭が芯からしびれてきます。こどもがふつうに読むと、あるいは読み聞かせをしてもらうと、きゃっきゃと喜んだり、うっとりした表情を浮かべます。

ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが看破したように、「こどもは形而上学的存在である」(L'enfant est un être métaphysique. — Gilles Deleuze, Felix Gatari: L'Anti-dipe) と言えそうです。

駄目押しで言いますが、こどもはあくまでも「形而上学的」な存在なのであって、哲学的な存在では断じてありません。形而上学的とは、必ずしも知的でも知性的でも(むしろ、痴、稚、恥なのです)、ましてや論理的でもないのです。

\*

上で述べたように『不思議の国のアリス』の英語の文章は、言葉の綾だらけの、いわば「ありえない文章」なのですが、そんな文章を書いてみたいと夢見て——ただし、日本語の書き手である私は日本語で、そして私のやり方で——、ひらすら言葉の綾を編んでいます。

途方もない夢。こども時代の夢。夢また夢。夢に夢見る。夢だけなら見られそうです。ありえないのが夢ですから。

#ルイス・キャロル # ジル・ドゥルーズ # フェリックス・ガタリ # 言葉の綾 # 夢 # レトリック # 言葉 # プレイ



言葉の綾を織っていく



＊

言葉の綾を織っていく

星野廉

2022年1月24日 09:51

言葉は生きているという言葉の綾をあざ笑うかのように、生きていないのに死んだふりをする。そもそも生きていないものは死ねないはずなのに、死んだふりをしているのです。死んだふりのふりが空回りしているとも言えます。

ふりのふりがカラカラと回っている。まるで風車（かざぐるま）のように。まるで風車（ふうしゃ）のように。ヒッチコックの映画で、オランダで風車が複数回っている中で、ひとつだけが反対の回り方をしているシーンがあります。

＊

見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう。そこには属さない場違いな、つまり何の意味も持たない細部が加わったのである——。そんな意味のことを、スラヴォイ・ジジエクが語っています（『斜めから見る』スラヴォイ・ジジエク著、鈴木晶訳、青土社 pp.168-169）。

簡単に言えば、人は「見えている」はずのものをしばしば「見ておらず」、むしろ「見えないもの」を「想像して見ている」（いわば鏡の中に見ている）のであり、「見えているはずのもの」よりも、その「想像して見ているもの」のほうにより興味と愛着を持っていて、その結果として、人には「ないもの」を「ある」と錯覚し、さらにはその錯覚を強化して「ある」と決めるという仕組みが備わっているということになります。これがジャック・ラカンについての私なりのまとめでもあります。

ふつう人はそれに気づきませんが、何らかの「異化」によって気づきます（または、思い出します）。その「異化」が、このヒッチコックの映画では「風車の一つが風向きと逆に回っている」であり、ジジエックに言わせると「シニフィエを伴わないこの「純粋な」シニフィアン」なわけです。

この「異化」に気づくのは、映画の主人公なのですが、さらには映画の観客の一人である、あなたも気づくことになり、その結果あなたもまた映画にまきこまれる——、ジジエックはそう指摘してもいます。

＊

「シニフィエを伴わないこの「純粋な」シニフィアン」というジジエックの言葉が気になります。「意味されるものをもとなわない、意味するものが立ちあらわれる」とか「無意味な細部がくっきりとその姿をあらわす」と言い換えてみると、そのイメージにぞくぞくします。

無意味が「意味というもの」（意味が自明であり当たり前だと思ふ前提）を攪乱するとも言えるでしょう。

意味を欠いたものがふいに姿を見せるという状況とはどんなものなのでしょう。ふつうは姿や形があるものが目の前に現れれば、それに意味や名前やストーリーがあると、人は考えます。

名のないものは不気味であり不安だからです。まして意味がないとなると、人は恐怖におちいります。

名前が分からなければ、名づけないままにそれが何なのかを、これまでのさまざまな記憶をたどり照らしあわせて、それに似たものを探し、「あれに似ているもの」くらいの見当で受けとめるかもしれません。

名付けは意味付けとかなり近いと考えられます。

のっぺらぼう、つまり名前がなく意味がないものとは出会えないのが、人における「見



る」であり「出会い」だと思われます。無意識のうちに、名付けたり意味付けをしてしまうのです。

さもなければ、見えないし出会えないと言えます。

\*

レトリックだけでなりたっているような文章を書きたいと思う時があります。

内容なんて無い様なもので、物と事の有り様がきわだつ。ただ言葉の形と模様と動きだけがきわだつ文章。そんな文章は「ありえない文章」と言うべきでしょう。

言い訳をさせていただくなら、あくまでもイメージと夢——それもありえない夢——を語っているのです。

こういうありえない夢があるかぎり書きつづけることができるのだとすれば、この夢が終わらないでほしいです。この夢の中で、ありえない文章をひたすら書くしかない。

必死にかく、もがき、あがくのです。書いても書いても「欠く」しかない世界。圧倒的に言葉は足りないし、見る果てがないし、切るにも切りがないし、分けても分からない。それが「欠く」しかない「書く」であり、「ありえない」文章の綾、言葉の綾なのです。

たとえば、たったいま書いた文章はレトリックだけでなりたっている書き方をめざして書きました。書かれていても何も言っていないのです。ひとり受けギャグの世界に似ていませんか？　じっさい、そうなのでしょう。

また、この書き方には外国語に翻訳するのがきわめて難しいという特徴があります。翻訳する人などいませんけど。

翻訳できない、つまり他の言語に置きかえられないとすれば、何かが書かれていても、じっさいには何も書かれていないからでしょう。書いても書いても欠いているだけ、書いても書いても掻いているだけ、書いても書いても藻掻き足掻いているだけ、だからです。

何も書かれていないものを別の言語にうつせるわけがありません。

抽象的、普遍的、客観的思考の埒外にあるとも言えそうです。翻訳とは、置きかえとは、抽象的な思考や操作——切り捨てた結果としての置き換え——が可能な場でこそ、実践されるのですから。

そもそも、言葉の綾（レトリック）では、綾（模様・姿・かたち）そのものが命ですから、切り捨てるものがないのです。言い換える（置き換える）こともできません。つまり、翻訳ができないという意味です。

うつす、写す、映す、移すためには、体（たい）を成していなければなりません。

体とは体裁、つまり「外から見える、かたちやありさま」なのですが、かたちだけ、さまだけで、なかみがないとなると、ある言語では「かたちやありさま」があるように見えても、別の言語に置きかえようとしたとたんに、「なかみ」が「から」だとバレてしまうという事態が生じます。

その言語だけで見ていると、なかみのないのが分かりにくいのです。

＊

のっぺらぼう、つまり名前も意味もストーリーもないものとは出会えないことは分かっています。でも、夢に見ることならできるのではないのでしょうか。夢の中で、人は正気ではないと考えられます。

常軌を逸している、荒唐無稽、とりとめがない、ありえない、それでいてすべてが肯定されている——これが夢ではないのでしょうか。夢ではすべてが肯定されて否定がない（じつは現実もそうなのかもしれませんが、覚めた意識はそうした状況で抗うすべを知っています）、これは夢のきわめて大切な特徴です。

言葉の綾だけでなりたっている文章——。書いてみたいです。そのためには夢の中に降りていかなければならないのかもしれませんが。とはいっても、夢の中での出来事を言葉にしたところで、それは言葉の世界になります。

夢には夢の文法があるように、言葉には言葉の文法があるはずですが、言葉には言葉の文法があるように、夢には夢の文法があるはず、ではなく。そうです。ここでは本末転倒な話をしているのです。さかしまとか、あべこべの世界なのです。

言葉は生きているという言葉の綾をあざ笑うかのように、生きていないのに死んだふりをする。そもそも生きていないものは死ねないはずなのに、死んだふりをしている。死んだふりのふりが空回りしている。

たとえば、いま上で書いたようなありえないさまが、言葉におけるのっぺらぼうのひとつの身振りなのではないかと思っています。そんな倒錯した身振りをしているのが言葉なのです。

ただし、その倒錯には人はふつう気づきません。見えているのに見えないからです。見えているのに見ていないからです。読む以前の話なのです。だから、言葉を見ることが大切です（もちろん、こんなことにこだわる必然も必要もふつうはありません、日常生活を送るさいには、むしろ害となります、ここでしているのは文学の話なのです、おそらく哲学の話でもないでしょう）。

言葉は生きていないのに生きたふりをするどころか、死んだふりをしているのです。ふりのふりがカラカラと回っている。まるで風車（かざぐるま）のように。

\*

朝の連続ドラマを見ていて、思わず引きこまれている自分に気づき、苦笑することがあります。テレビドラマにせよ、映画にせよ、演劇にせよ、振りをする身振りが基本にあるわけですが、連続ドラマはとてもしっかりやすく、ずっと入っていて、自分もその「振り」を容易に「なぞる」ことができます。

振りをするが基本のお芝居では、俳優が配役を演じています。当たり前なのですが、これはとても興味深いことだと思います。誰もがそれが「演技」つまり「振りをしている」と知っているのにそれを一時的に忘れるのですから。

それが現実のように思いこんでいるわけです。心の隅で、これは演技なのだと分かっているけれども、楽しむためにはその野暮な考えを捨てなければなりません。

振りだけがある世界。配役がどんどん変わる。既視感の連続。何かに運ばれていく快感。同じ身振りが繰り返される。似た光景が現われて消えていく。仮面が演じる。仮面が踊る。仮面の素顔が刻々と変化する。動きと表情だけがあるマスカレード。

そこには意味やドラマやストーリーやイメージがあるのですが、見る人がそうしたものを忘れる瞬間や持続したときがあるように思えてなりません。意味を失った「純粋な」振りが仮面とともに演じられている世界——。

たとえば、テレビのドラマを見ていても、そこに振りだけが回っているさまを見ることができの気がします。そうしたさまを見せるのは見方なのかもしれません。演技での役者による身振りというよりも、演技を見る者が、演じられた振りにどう触れ、どう振られるかなののかもしれません。

要するに、見る側の問題。言葉であれば、読む側の問題。となると、書きながら仕組んだり仕掛けることは無駄だということになりそうです。そうななのかもしれません。がっかりするのは欲深いからでしょう。

そもそも欲がない者が書くのでしょうか？　そう居直りたくなります。

「見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう」——そんな文章を書いてみたいです。

こうやって言葉の綾を織っていく。引用の織物をたばねて編んでいく。いまはそれしかできそうもない気がします。それでいいのだと言いつけています。

#スラヴォイ・ジジェク # ジャック・ラカン # 言葉の綾 # ヒッチコック # テレビドラマ # 仮面 # 身振り # 文学 # 翻訳 # 言葉 # 文字 # レトリック





Mの世界で生きる





＊

### 【小話】Mの世界で生きる

星野廉

2022年1月11日 12:14

「死ぬ死ぬ、わたし死にそう」と何度も訴える。いっこうに死にそうな気配がないのにです。「いいの？ わたし死にそうなの」そもそも生きてないのに訴えるのです。生きていないものが死ぬるわけがありません。

でも人情として、そう何度も言われるとついつい耳を傾けてしまいます。なにしろ、死にそうだと言っているのです。放っておけるわけがありません。これが人です。「死にそう」だと言われれば、いちおう耳を貸すのが人です。さもないと人にならずということになります。

生きていないのに、死にそうだと訴える。これが言葉です。「死ぬ死ぬ、わたし死にそう」と何度も言う。それについ耳を傾けてしまう。これがMの世界です。

文字どおりに取るのではなく、そういう状況や場面（動き）を思いえがいてみてください。寸劇とかコントだと思っていただくとわかりやすいかもしれません。プレイ、つまり演技、遊戯、競技です。

かまってちゃんの相手をするのは面倒くさいですよ。めちゃくちゃ面倒くさい。ままならないし、もどかしくもあります。こうした状況は不条理でもあると言えます。

生きていないのに死に真似をしようとしているのです。死んだ振りもします。身振りが空回りしているのです。振りだけがある。『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ猫の笑いと同じです。笑いだけが残っている。

＊

＊Mの世界：

基本は、教育と演技（演劇・振りをする）と遊戯。要するに、プレイ。

Mはどんな人？：

教育者（自分が気持ち良くなるためのストーリーと方法を相手に教える教師）。しつこい、根気強い。かまってちゃん。自己中だけど、快感を得るためなら少々のは我慢する。言っていることと望むことがしばしば真逆（たとえば、「駄目」は「OK」、「やめて」は「続けて」、「死にそう」は「めっちゃ気持ちいい」）。主導権は自分が握る。要するに、めんどくさい。最も重要なポイントは、Mはじつは「ご主人」であること。

Mの相手には、どんな人物が適するのか？：

従順。元気で健康体であることが望まれる。Mのお願いや注文（実は命令と指示）に根気よく従う良き生徒。要するに、Mの奴隷。必然的にMの協力者や「共犯者」に仕立てあげられてしまう。なお、Mの相手をMがするという状況は珍しくない。

Mの相手に最も向かないのは？：

S。

＊

Mの世界を単純化すると、いわゆるSMプレイの世界ですが、これは人の言語活動の比喩ではないかという気がします。激似なのです。言葉がご主人であるのは言うまでもありません。人は下僕であり奴隷にしかなりえません。

なにしろ、相手は生きてもいないのに死ぬ真似をし続けているのです。私たちは生きているかぎり、このプレイに付きあわなければなりません。このプレイをやめるのは人をやめるのに等しいからです。人の世界は、言葉の世界。言葉の世界はMの世界というわけです。

ややこしいですね。私もそう思います。わかりやすい例を挙げましょう。

たとえば、「真摯に」とか「スピード感をもって」と繰り返されているうちに、そうではないらしいと気づきはじめたという状況があります。これは「わかった」とか「知っている」でも、そうなのではないかと想像できます。

要するに、「やってる感」だけ。振りだけ。振りの空回りです。

それだけにとどまらず、「カフカ」とか「カフカを読んだ」とか「感動した」とか「精緻に読む」なんかでも同じことが起きているようです。「まさか、こんな分野でもか？」ですよ。

まだあります。「神秘」という言葉が出てくる文章やお話でも同じです。ふつう「神秘」と書かれていれば「神秘」について書いてあると思うのが人情ではありませんか。でも、よく読むと「神秘」とか「神秘的」については何も書かれていないのです。「神秘」という言葉が空回りしているからです。

「真理」でも同じです。「真理」を「真理」と決めただけなのに、つまり「真理」という言葉をつくっただけなのに、「真理」と書かれていれば「真理」だと思いきわわけです。各人が勝手に、です。

「真理と名づけて決めた」が空回りしているという意味です。空回りとは、大したことではなかったり、実体がないのに大騒ぎすることですね。「名づける」が空転する。あっさり言いましたが、とんでもない話なのです。

\*

駄目押しで言いますが、したがって、たとえば「論理」「可視化」という言葉がたくさん書かれていても、論理や可視化について書いてあるとはかぎりません。むしろ書いてないほうが多い気がします。読むとはキャベツやレタスの葉をはがすような作業なのですが、読んでいる最中には気づきません。

要するに、「やってる感」だけ。振りだけ。振りの空回りです。

これは、言葉という「代わりなもの」をもちいての遠隔操作や代理ゲームをしているからです。言葉をもちいるとは、足の痒いところを長靴の上から搔いているようなものだとイメージするとわかりやすいかもしれません。

搔いても、じつは搔いていないのです。書いても、じつは書いていないのです。同様に、かかれても、じつはかかれていないのです。「やってる感」だけ。振りだけ。振りの空回り。

言葉を文字どおりに取ると馬鹿を見るときも言えます。だから、話し方、書き方、辞書、生き方、人との付き合い方、「○○とは何か」、ビジネス、投資、哲学、宗教、心理学関連の本がコンスタントに売れるのです。

読んでためになるかどうかはわかりません。ところで、あなたは、上に並べたような本をこれまでに何冊買いましたか？ 答えは得られましたか？

もし、答えが得られないとすれば、人の決めた言葉が空回りしているからにほかなりません（キャベツやレタスの葉をはがしているのです）。この言葉とは、名詞だけでなく動詞でも形容詞でも同じです。言葉の集まりである、センテンスでも文章でも一冊の本でも同じです。

\*

言葉と付きあうとは、この空回りと付き合い、この空回りを身をもって生きることなのです。「身をもって」と書いたのは、生きた人がする身振りだからです。でも、相手である言葉は生きてないのです。それなのに、人はその声に耳を傾け、その身振りに見入り、その存在を受け入れてしまいます。

「死ぬ死ぬ、わたし死にそう」「いいの？ わたし死にそうなの」にえんえんと付きあうことになります。いまの私がそうです。いまのあなたがそうです。人であるかぎり例外はありません。

文字どおりに取るのではなく、そういう状況や場面（動き）を思いえがいてみてくだ

さい。寸劇とかコントだと思っていただくとわかりやすいかもしれません。プレイ、つまり演技、遊戯、競技です。

\*

言葉と付きあうとは、具体と抽象のあいだで綱渡りをする事です。言葉は音声であり空気のふるえでありインクの染みであり画素の集まりであるというのが具体です。声と文字と言い換えてもかまいません。一方、言葉の意味、辞書に書かれている語義、各人のいただくイメージが、抽象です。

この具体と抽象のあいだでゆれつつある自分をつねに意識し、けっきょくは抽象でしかありえない限界を承知しつつ、周到に抽象を回避しようとする身振りを言葉で演じた書き手がいます。その言葉の身振りは、じつにM的なのです。

どんな身振りかという、「死ぬ死ぬ、わたし死にそう」と何度も訴える。いっこうに死にそうな気配がないのにです。「いいの？ わたし死にそうなの」そもそも生きてないのに訴えるのです。そうです、Mを演じるのです。

MにはMを、です。なるほどと感心する戦略です。でも、書き手としてこのプレイ（遊戯・競技・演技）をするには、すごく忍耐が要ります。読むほうもすごく忍耐を必要とします。だから、あまり読まれません。

この「MにはMを」の文章は、読みにくいです。読む行為がキャベツやレタスの葉をはがすのに似ているとふつうは気づきませんが、この文章ではダイレクトに感じられます。

とはいうものの、「MにはMを」を演じても演じなくても、Mの世界で人は勝てないのです。書き手も読み手も勝てません。言葉のひとり勝ちの世界なのです。

「MにはMを」の文章の書き手は、それを承知で「MにはMを」という戦略をとりあえず選んでいる点が、決定的に重要です。

\*

でも、そんなMの世界を演じている、「MにはMを」の文章にも読み人がいます。なにしろ、その書き手は学術的に輝かしい経歴の持ち主でもあるのです。いまでこそ、そうなのですが、かつて最高学府の教員であったために、その人の文章を読まずにはいられない人がたくさんいました。ここにもひとりいます。授業を取っていたのです。

その「MにはMを」の名人の名前が蓮實重彦だと書かなくても書いても、「MにはMを」の話はできます。また、たとえば、ジル・ドゥルーズという固有名詞が書かれていなくても、ジル・ドゥルーズの言葉の身振りが日本語として演じられている文章がある一方で、ジル・ドゥルーズという固有名詞に満ちた文章に、ジル・ドゥルーズの言葉の身振りに逆らっているとしか思えない抽象が書かれているなんてこともざらにあります。

人それぞれ、文章いろいろ、です。こういうのは、いい悪いの問題ではありません。検証などできない問題であることは確かなようです。

ところで、あなたはキャベツやレタスの葉をはがすのは好きですか？

#言葉 # 蓮實重彦 # ジル・ドゥルーズ # ルイス・キャロル # 固有名詞 # 抽象 # 具象  
# 小話

空回りで空騒ぎする





＊

【小話】空回りで空騒ぎする

星野廉

2022年1月9日 07:53

人は「AをBだと決めた」だけなのに「AがBである」と思いこむ。

こういうことをやっていると、どうなるのかを考えてみましょう。その前に、なんでこうになってしまうのかを考えてみます。

みんなで作っているうちにそう思えてきた。

これは大いにありえますね。心当たりがあります。こういうことって自分を含めて人にはよくあります。人情と言ってもいいでしょう。

考えたこともない。

それが人である証拠だと思います。それが人である原点だとも言えそうです。言えそうなのではなくて、いえ、そうなのです。

「AをBだと決めた」のを忘れた。

これも大いにありえるのではないのでしょうか。人は覚えることが多すぎて、肝心なことやどうでもいいことの見境なく、どんどん忘れるようです。これも自分の問題として考えるとわかります。わかりすぎて怖くなるくらいです。ヒトとしての、あるいは個人としての認知機能の問題とも言えそうです。記憶には限界があるのです。

＊

人は「AをBだと決めた」だけなのに「AがBである」と思いこむ。

こういうことをやっている、どうなるのかを考えてみましょう。

Aが見たり触ったりできるものなら、まだましですが、Aが見ることも触ることもできないもの、つまり抽象的であったり、概念や観念だということになると、観念するしかなさそうです。お手上げという意味です。

どういうことかと言いますと、空回りが起きるのです。「AをBだと決める」はふつう「名づける」という形であらわれます。その結果が名前であり言葉です。

「名づける」という身振りが空回りするのです。そうすると空騒ぎが起こります。

大したことではなかったり、実体がないのに大騒ぎすることですね。「名づける」が空転する。あっさり言いましたが、とんでもない話なのです。

民主主義、正義、真理、事実、哲学、神、愛、美、本当、本当のもの、本物、偽者、フェイク……。

決めただけなのです。すったもんだが起きるのは当然です。

これは不都合や不具合が生じるどころの問題ではないのです。広い意味での人間関係、集団間や国家間や民族間や宗教間での争いや戦争にも至ります。あっさり言いましたが、ゆゆしい問題なのです。たぶん、妄想ではなく、もうそうなっているのです。

ですから、こうした事態は、私を含む人誰にとっても、対岸の火事ではなく家事であり、異常な状態ではなく常態なのです。言葉を持ってしまった人間であるかぎり、避けられない状況、つまり常況なのだと言えます。

\*

「名づける」が空回りしているとは、たとえば次のような形であらわれます。

・名づけられている実体がない。つまり、決めた言葉だけがある。

・その言葉（名詞だけでなく、動詞も形容詞もなんでもです）が、語義やイメージからほど遠い動きをする。

要するに、空騒ぎなのですが、これを「言葉のひとり歩き」と名づけたり、呼んだりする人がいます。言葉のひとり歩きなんて人ごとみたいな言い方ですが、まさに人ごとみたいに言うときにつかう口癖です。

「それはですね、〇〇という言葉がひとり歩きをしまして、私には責任が……」

このように言い訳でつかわれる言葉になっていることがきわめて多いので、「言葉のひとり歩き」というレトリック、つまり言い回しが誰かの口から出てきたときには気をつけましょう。

\*

「名づける」が空回りしているとは、たとえば次のような形であらわれます。

- ・名づけられている実体がない。つまり、決めた言葉だけがある。
- ・その言葉（名詞だけでなく、動詞も形容詞もなんでもです）が、語義やイメージからほど遠い動きをする。

「〇〇、読んだ？」「読んだよ」、「客観的事実と普遍的真実の差異は何なのだろう？」「……」、「愛と友情の違いについて考えているんだ」「すごい」、「人間としての存在および実在をまっとうするためには、本当の美しさの追求が重要だと思うの」「そ、そうだよね」、「聞ってる？」「ちゃんと聞いてますよ」「ほんと？」「嘘だと言うの？」

人が言葉をつかったり会話をするのは、人間関係を円滑にするためだと考えれば、こうした状況をふつうにやり過ごせばいいのだと思います。私もそうしています。これまでそうしてきたし、いまもそうしているし、これからもそうするでしょう。

また、難しそうな言葉や、何か意味がありそうな言い方を、目にしたり耳にすると、張りきったり、わくわくする人がいます。そういうのが苦手な人もいます。無視する人もいます。毛嫌いする人もいます。人それぞれです。

漢語系の言葉は厳めしくて「何かありげ」ですが、カタカナ語もそうです。シーニュ、アイデア、プラウダ、ゲシュタルト、エクリチュール、ディスタンス……みたいに。漢語と同様に、こうした言葉が日本語の文章の中でつかわれると、とたんに特別な「顔」や「表情」をまとうことを忘れてはなりません。旧ソ連を旅した政治家が「プラウダ、プラウダ」とさかんに誰もが口にしてるので感動したという話があります。「ほんとう、ほんとう」「そうだ、そうだ」という意味だったらしいのです（古い例で、ごめんなさい）。

「いやよ、やめて。ぜったいに、いや」「わかった」「なんで、やめるの?」「……」

これは、まさに「その言葉（名詞だけでなく、動詞も形容詞もなんでもです）が、語義やイメージからほど遠い動きをする」、ほんの一例です。言葉の空回りから起きた空騒ぎが、大騒ぎにならないければいいですね。ところで、いまの会話ですが、国家間でも見られる状況、いや常況なのです。「政治家同士の会話みたい」とおっしゃった方に、座布団三枚進呈させていただきます。

\*

人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か?」と問い、思い悩む生物である。

人は「○△X」という言葉を決めただけなのに、口にしてるうちに決めたことを忘れて、「○△Xは○△Xなんだ」と思いこむようになった。

こういうことをしていると、人は言葉の世界に迷いこむことになります。人の考える世界や宇宙は、じつは言葉の世界なのかもしれないという話なのです。

たとえば、「短い」と「長い」は反意語ではなくて、「大きくなる」と必ず（あるいは同時に）何か「小さくなる」ことがある。たとえば、「百年が過ぎた。」という「短い」言葉で「長い」時間を処理できる。

あくまでも、「たとえば」なのですが、これが言葉の世界なのであり、さらに言えば、

人の世界なのです。こうした不思議な世界を実感できる本があります。

正確に言うと、「○△Xは○△Xなんだ」と思いこんでいる人が、そう思いこんでいる自分に気づくかもしれない本なのです。

\*

ルイス・キャロル作の『不思議の国のアリス』です。これは、もう読んでいただくしかありません。何種類かの翻訳がありますが、どれでもかまいません。

私は、この『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ猫の話が好きです。猫が笑って、その笑いだけが残るといってお話です。

猫という物つまり具象が消えて、笑いという表情つまり抽象が残る――。

ルイス・キャロルって面白い話をとってもリアルに書いた人なのです。すごい作家だと思います。こんな書き手はほかに知りません。かなりこみいったややこしいことを子ども向けのお話という形でリアルに書ける人なのですから。

『不思議の国のアリス』とその続編の『鏡の国のアリス』には、難しい言葉、つまり辞書や哲学事典で調べるとか、ネット検索をしなければ、どういう意味なのか（どう決められたのか）がわからない言葉は、ぜんぜんつかわれていません。

それなのに、哲学者や文学研究者や論理学者と呼ばれる人たちが、たぶん一生懸命に読んで、難しい言葉をつかってああでもないこうでもない議論してきたのです。

それはどうでもいいことなのですが、この本を読みたい、またはもう一度読んでみたいという気持ちに結びつけば、うれしいです。あと、この本には駄洒落（言葉遊びなんて気取った言い方はしません）がたくさんでてきます。個人的にはそこがいちばん好きです。言葉が人の決めたものであると体感できます。

#言葉# ルイス・キャロル # 小話

ほのめかしとしての世界





＊

ほのめかしとしての世界

星野廉

2021年11月24日 13:38

＊

世界はほのめかす

ほのめかす世界

ほのめかしとしての世界

世界はほのめかしに満ちている

以上のフレーズが並んでいる、あるいは並べられているさまを見ていると、それぞれにほのめかしを感じます。同時に、四つ並んでいること、あるいは並べられていることにも、ほのめかしを感じないではいられません。

ほのめかしが気になるときがありません。

「ほのめかす」とは、ずれを感じているときの心の模様なのかもしれません。その模様とは揺れであり揺らぎです（いまずれと書きましたが、何がどうずれたのかは不明なので、擦れという振りがあただけだという気がします）。

対象が揺らぐのではなく、見ている側が揺れるのです。「ほのめかす」という身振りにおいては、送り手（話し手、書き手、制作者、動作主）の思いに関係なく、その身振りが起きるという点が決定的に重要な意味を持ちます。受け取る相手が勝手に揺らぐのです。

ほのめかす側のほのかな揺らぎが、複数の受け手側で増幅されたとき、隠喩や寓意に発展するのかもしれませんが。

その揺れはろうそくのほのおのようにかすかなものでしょう（劇的なものでも過激なものでもありません）。または、ちろちろと燃える炉のほのお。物静かで目立たず、かすかではありますが、その本質はほのおであり揺らいでいます。

「ほのめかす」の「ほの」が「ほのお」と関係あるのかはどうかは知りませんが、どうでもいいです。

「ほのめかす」には詮索や知（知性と知識）は似合わない気がします。いまここにある。その状態であれこれと思いをめぐらすことが、ほのめかしを楽しむこつだという気がします。そうなのです。ほのめかしは楽しむことができます。

いわゆる誤解やまちがいは、「ほのめかし」では意味を持ちません。

\*

ほのめかす

ほのめき

ほのめく

ほのぼの

ほんのり

ほのか

ほの

ほっ

ほ

は、ひ、ふ、へ、ほ  
ま、み、む、め、も

\*

世界がほのめかしに満ちていると感じるとすれば、それは苦しいでしょうね。何もかもが意味ありげに思えてくるのです。こうなるとほのめかしではなく、謎ではないでしょうか。

意味、謎。

フランスに難解な小説を書く作家がいて、大学生時代にその作品を「謎めている」と評した先生がいたのを思い出しました。「このようにBは謎めいた言葉を吐いていますが」というふうに、『背教者ユリアヌス』という小説を書いた作家でもあった教授は言いました。

このBという作家は肖像（写真）のない作家として知られていました。面白い人ですね。自己演出の名手だったのかもしれない。だからファンも多かったようです。

謎めている。意味ありげ。

この言い方の裏には、じつは謎などはないとか、意味があるようでないのではないか、という疑いの念を感じます。まさにほのめかしですね。「めく」とか「げ」は疑いの素なのでしょうか。

「もっともらしい」にも通じますね。「もっともらしい」なんて口にすると批判、場合によっては罵倒あるいは悪態です。もっともらしいものが、いろいろの原因になるのはうなずけます。

ちなみに、Bとしたのには深い意味はありません。好みからそうしたまでなのです。ごめんなさい。

\*

ほのめかすについて書いていると、ほのめかした書き方になってしまいます。うつるんです。

\*

上で触れたBというフランスの作家は、Thomas l'obscur（邦題は「謎の男トマ」）という小説を書いたのですが、obuscur というフランス語は英語の obscure に当たり、「不明瞭な、曖昧な」という意味を持ちます。

先日、フランスの現代思想について書かれた英語の文章を読んでいると、obscure という形容詞と obscurity という名詞がさかんにつかわれていて、なんでフランスの哲学者は、こう揃いも揃って曖昧な書き方をするのだという嘆きが書かれていて、同情してしまいました。

欧米で仕事をしてきた、ある文芸批評家が、第二次大戦後のフランス哲学の状況を、

\*「フランスはドイツによって再占領されている」

と、かつて言ったそうです。いや、嘆いたそうです。これを初めて聞いたとき、大学に入ったばかりの自分はびっくりしました。

話が違うじゃないか。

何しろ、「明晰ならざるものは、フランス語にあらず」という、あるフランス人がプロパガンダしたフレーズを信じきっていたのですから。迷ったあげく、ドイツ語よりフランス語に比重をかけて勉強しようと張り切っていたのですから。内なる自分に巣くっているモヤモヤから救ってくれるものを求めているのですから。

(.....)

そうか、せっかく米国に助けられて戦争に勝ったというのに、フランスはドイツによって、また侵され(=犯され)てしまったのか。いや、侵され(=犯され)続けているのか。

本当でした。大学生となり、お勉強をしていくについて、その当時の若いフランスの哲学者たちがこぞって、もう世を去ったドイツの哲学者たちの著作の注釈みたいなことに熱中している実態が判明してきました。

(拙文「ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その1）【引用の織物】」より引用)

\*

だいぶ前のことですが、翻訳の仕事をしていたころ、交渉術についての本の訳出にかかわったことがあります。調べ物をしながら、ビジネス、外交、政治、裁判の現場だけでなく、日常生活においても、人は交渉しているのだなあと感じました。

その本を出した出版社が、noteでアカウントをもっているのを最近知り、驚くとともに懐かしく思いました。森をイメージしたロゴと社名で、現在もいいお仕事をなさっています。いまのはほのめかしですね。読み手が知っているという前提でそれとなく言っているのですから、アリュージョン（言及）と呼ばれることがあります。ぼかしすぎると読んでいる人には通じませんが。

で、いまでも覚えているのは、外交における交渉の場では、遅刻したかしないか、どちら側が早く来たか、相手の仕草、姿勢、発声の仕方、視線、服装、テーブルに置かれた物の位置……、こうしたありとあらゆるものやことが、何らかの意味を持っているという話です。

疑心暗鬼という言葉を連想しました。なにもかもが意味を持っていて、その意味を解読しなければならないとしたら、苦しくないですか。被害妄想や強迫観念の世界です。

ほのめかしの面倒くさは、かまってちゃんに似ています。世界がかまってちゃんに満ちている状況を想像してください。面倒くさいどころか、発狂しますよ、きっと。

そういえば、この本を訳していて、当時は不動産王と呼ばれ、のちに合衆国大統領となった人物の言葉がやたら出てきたのを思い出しました。いまのもほのめかしです。言いくかたり口にしたくない場合に、置きかえて遠回しに言うという一種の婉曲法でしょうか（婉曲法とは、ふつうは便所をお手洗いと言い換えるような例を指しますが、こ

の場合には私の中では同じです、口にしたくないのです)。

\*

外交や国際政治や地政学といった領域では、ありとあらゆるものが意味やメッセージがあるものとして扱われます。

あの軍事練習はどういうシグナルを送っているのか。あの演習のおこなわれた日時と場所と、他の国際情勢とのタイミングから、指導者が危機的な心理状態にあると考えられる。あの演習の直前にあったパレードでの、指導者の顔色が悪く、視線が泳いでいたのは、健康状態に異変があるからではないか。

こうした意見や感想や印象が、マスコミで飛びかいます。いろんな人がいろんなことを言います。かまってちゃんに振りまわされているドMちゃんみたい。なにしろ、とてもうれしそうなのです。

間諜(久しぶりにつかう言葉です)、つまりスパイは国際政治の末端で働くひとたちです。スパイの本家である英国のスパイ小説は、じつに具体的な細部に満ち、丁寧に書かれていてぞくぞくします。

intelligence に防諜、諜報、諜報機関、諜報部員の意味があるのは、興味深いです。知能だけではないということです。AI の I であり、CIA の I でもあるわけですが、こういうのを目の当たりにすると、意味ありげに見えてきて、こうした符合を符号に感じてしまいます。

\*

英国のスパイ小説で思い出しましたが、伝統的な英国の小説は、ほのめかしと当てこすりに満ちています。それが読みにくさにつながっているといえそうです。

\*

世界は符号である。

世界は一つの大きなクエスチョンマークである。

世界は無数の謎の記号からなる大きな疑問符である。

でまかせに即席でつくったフレーズですが、なんだか謎めいて意味ありげに思えてしまいます。

全部が全部とは言いませんが、大半のほのめかしには実体がないのかもしれませんが。もちろん、意味もメッセージもないという意味です。

ふりがあるだけ。身振りの「ふり」です。

ふりをなぞる。なぞをなぞる。

世界は空疎なほのめかしである。

「ほのめかす」などじつはなく、この世にあるのは「ほのめかされる」ばかりである。

森羅万象とはパントマイムをする身体のない大道芸人の笑いである。

\*

以心伝心、腹芸、顔芸。

シュール、不条理、わけがわからない。

比喩、隠喩、暗喩、たとえ、寓意、象徴的。

におわす、暗示する。それとなく言う。当てこすり。言外の意味。行間を読む。余白を読む。オブラートに包む。裏読み。

連想。推理。霊視。邪推。解釈。理解。こじつけ。論理。

忖度。憶測。共同幻想。妄想、幻想。

＊

「MajiでNiowaseする5秒前」・「世界で一つだけのおわせ」・「におわせ3兄弟」・「におわせは突然に」・「CAN YOUにおわせ？」・「におわせは勝つ」・「世界中の誰よりきつにおわせ」・「硝子のおわせ」・「Addicted Toにおわせ」・「ロマンスのおわせさま」・「どんなさにおわせも。」・「におわせされるよりにおわせしたい」・「におわせするボンボコリン」・「ニオワセノムコウ」・「におわせするフォーチュンくっきー！」・「ずるイにおわせ」

3ほの・ほのめかしの不時着・あつまれほのめかしの森・ホノメカシノマスク・オンラインほのめかし・ほのめかしの刃・GOTOほのめかし・ほのめかしちゃん・ほのめかしなどあろうはずがありません・ぼーっとほのめかししてんじゃねーよ！・ほのめかし論法・ほのめかしずラブ・ほのめかしファースト・ほのめかしの2回生・げすほのめかし・安心して下さい、ほのめかししてますよ。・ほのめかしウォッチ・ホノメカシミクス・特定ほのめかし保護法・ブラックほのめかし・手ぶらでほのめかしさせるわけにはいかない・ほの活・イクほの・草食系ほのめかし・名ばかりほのめかし・ゲリラほのめかし・後期ほのめかし者・消えたほのめかし・ほのめかし王子・ほのトレ・ほのめかしがあるさ

『ライ麦畑でパントマイムして』・『ボクはイエローでホワイトで、ちょっとにおわせ』・『パントマイム写真集』・『超図解ほのめかし』・『暗示少年の事件簿』・『顔芸宣言』・『真夏の夜の腹芸』・『パントマイムする勇気』・『以心伝心を10倍楽しくする方法』・『パントマイムとパンタグラフの見分け方』・『暗示の時』・『金持ちパントマイムさん貧乏パントマイムさん』・『ほのめかしのかんづめ』・『だからあなたもおわせして』・『こんなに暗示していいのかしら』・『パントマイムタワー オカンとオイラと、時々、ゴットン』・『ノルウェイのパントマイム』・『腹芸記念日』・『君たちはどう暗示するか』・『きみのパントマイムをたべたい』・『誰のために顔芸するのか』・『世界の中心で、隠喩を叫ぶ』・『チーズはどこで暗示中なのか』・『寓意ちゃん』・『パリー・ホッターと以心伝心の部屋』・『ほのめかしの壁』・『老人と疑心暗鬼』・『におわせ失格』

※「語りえないものについては錯覚しなければならない」と「言葉は擬態【言葉は魔法】」の中にある「おふざけ」の「ほのめかし」バージョンです。

「ほのめかす」をテーマに書いていると、「ほのめかす」「ほのめかし」がなにやら「いかめしい」ものに見えてきます。無意識のうちに特権化しているのでしょうか。よくない傾向です。脱構築して停滞に流れをうながし凝りをほぐしてやる必要があります。こんな時にお祓いに似た儀式として、こういう馬鹿なことをやっています。「錯覚」や「擬態」についても同じです。



＊

難解、晦渋。

曖昧、謎、不可解。

こうした言葉がある種の魅力をもち、ある種の人たちを惹きつけてやまないのは事実のようです。

有り難く頂戴し、その前で身もだえしながらひれ伏すのです。

へそ天的というか、マゾッホ的状况だと思います。宙づり＝サスペンスは気持ちのいいものです。私も大好きです。

＊

ほのめかしは、送り手から離れ、おもに受け取る側の問題として生じますが、個人的なものから肥大し組織化される場合もあります。とくに顕著なのが、人文学や芸術の分野です。

マラルメもニーチェも結果的に曖昧放置プレイがうまい人だったという印象があります。ニーチェはがむしゃらに矛盾と逆説を具現し、マラルメは徹底してほのめかすという手法で読む者を曖昧に放置しました。

クロソフスキーはそんなニーチェに付き合っ曖昧放置プレイを試みましたが、なんかイマイチの感を拭えません。その点、ドゥルーズは病弱ながらも淡々とお仕事をし、結果的に曖昧放置プレイ感の濃い巨匠になりました。慕う弟子も多いですね。

禅の公案、世阿弥、芭蕉、そして腹芸という具合に、曖昧放置プレイがお家芸ではないかと思われるこの国にも、マラルメ、ニーチェ、ドゥルーズの信者が多いのは注目すべき現象ではないでしょうか。

ちなみに私は曖昧放置プレイ大好き人間です。上で挙げた固有名詞が載っている本をこれまでにどれだけ購入したことか。どれだけそれを読まずに処分したことか。これだ

けでも私のミーハーぶりがおわかりになると思います。

今挙げた固有名詞たち——曖昧放置プレイの名人——に共通するのは、真理とか事実とか悟りとか覚醒という言葉が世迷い言だと看破し、概念とか観念とか学術用語とかいう言葉が対応を欠く空虚な記号である、と生真面目に受け止めてしまったという点ではないでしょうか。

こうなると行き場を失います。そうした考え方や立場がほとんどなかった時代に孤立無援に近い状態でいたわけですから、その孤独感とよるべなさを想像すると感情移入のあまりに苦しくなるほどです。

この固有名詞たちが行き場を失った時に目を向けたのは言葉であり、言葉の綾、つまりレトリックであったのはうなずけます。

(拙文「言葉は外から来るもの」より引用)

とりわけ、ジャック・デリダ、ジャック・ラカン——ラカンの残したテキストは少ないのですが、だからこそ、結果的にソシュールやマラルメと同じく曖昧放置プレイの名手として名を残しているとも言えます、寡黙、場合によっては沈黙（死者は饒舌なレトリシャンです）と「テキストの不在」こそが最強のレトリックなのです——、ミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズといった書き手は、言葉の多義性や多層性、ひいては言語の限界性を意識したうえで文章（＝レトリック）をつづったのですから（ほんまかいな）、その文章について語る文章やその翻訳が、ルビや約物を使わざるをえないのは当然であり必然だという気がします（もちろんこれは趣味とレトリックの問題でもあり、使わない強者もいます）。

(拙文「振る/振られる」より引用)

ずいぶん乱暴な文章ですね。「曖昧放置プレイ」というのは、「ほのめかし」を私なりに置き換えた、まことに下品な言い回しですが、曖昧に放置するプレイというニュアンスがわかっていただけでしょか。

曖昧に放置されたかっこうになると、ふりだけ——いわば身体のないパントマイム——を眺めているのと、区別できなくなるのです。

極端な場合には、チェシャ猫の残した笑いみたいに過激なナンセンス＝ノンセンスになります。

チェシャ猫 - Wikipedia  
ja.wikipedia.org

\*

わかりにくい人。何を考えているのかわからない。本音をなかなか言わない。Aと言いながら、じつはBと言っているみたい。

こんなふうに言われてきた人を知っています。よく知っている人なので、ここでもばらしますが、じつは何も考えていないのです。ここだけの話ですよ。

何も書くべきことはない。書かなければならないことがない。こんなふうを考えている、ないない尽くしの人なのです。寂しいですね。

この人には言葉を並べる癖があります。書くことがないので、とりあえず言葉を並べて眺めながらじっと待っているのです。あまりにもかわいそうなので、出てやります。すると喜びます。それに味を占めているみたいです。

そうやって出てきた言葉をまた自分で引用する癖もあります。

言葉についての言葉しか書けない人です。物を描写するのが下手で、自覚もしているようです。じっさい、この人の書くものには、物や人や風景の描写がありません。

要するに、言葉の遊びという絵空事に終始しているともいえそうです。

そうです。お察しのとおり、あの人のことです。はい、とっても面倒くさい人ですよ。ごめんなさい。あの人に代わって、お詫び申し上げます。

でも、とても涙もろい人です。根はいい人だと信じているので、別れずにいます、影  
みために。長い付き合いをさせていただいております。

#言葉# 日本語# ほのめかす# 曖昧# 難解# マラルメ# ジャック・ラカン# ジャッ  
ク・デリダ# ソシユール# 辻邦生# モーリス・ブランショ# ジョージ・スタイナー

夢は第二の現実



＊

## 夢は第二の現実

星野廉

2021年11月14日 13:42

ちなみに、思いが勝手に動いたり暴走するのは、夢です（あるいは幻想や幻覚も）。ままならないという意味では夢は現実には似ているかもしれませんが。夢とは、いわば第二の現実です。その意味で、夢も外だという気がします。ままならないからこそ、人は夢に血道をあげるのです。

思いどおりになる夢なんて見てみたいですね。

でも、思いどおりになる夢が見られるのなら現実なんて要らなくなります。まさに現実から逃避して夢の世界に行きたくなるでしょうね。ずっと眠りつづけるという意味です。永眠。

（拙文「言葉をいじる」より引用）

私には、いったん投稿した記事をいじりまくるとい癖があります。「言葉をいじる」もいじりまくってました。上に引用したのが、いじっているうちに書き足した部分です。

現実ままならない。夢もままならない。それなら、夢は第二の現実だ。そんなふうに短絡していったわけです。

簡単には結びつかない関係のもの同士をいとも簡単に結びつけることを短絡というようです。要するに、こじつけであり矛盾であり無茶苦茶ではないでしょうか。

言語活動や思考や認識といういとなみの本質をついているような気がしないでもありません。なにしろ、「猫」というものと「猫・ねこ・ネコ・neko」という文字や音声を結びつけているくらいですから、人にとっての現実は無茶苦茶です。

現実には、なぜかそこにあります。有無を言わず、そこに立ちあらわれています。人はわけがわからないままに、そこに放り投げられているのです。

一方で、本来は関係ない者同士が結びついたり、当たり前の顔をして立ちあらわれて、踊りまくっているのが夢です。これも、無茶苦茶、滅茶苦茶です。現実には負けないくらい。

何もかもが肯定されて、そこにあり、そこで動いているのが夢。荒唐無稽で、とりとめがない。ただし、荒唐無稽とか無茶苦茶というのは、目が覚めて夢から「うつつ」に、つまり現実にもどったときに夢を思いかえしていただく思いです。

夢の中では、それが夢だとは意識しないし（「意識できるよ」とおっしゃるあなたに座布団一枚）、夢批判とか夢批評なんてできません（もちろん、夢分析や夢占いもできません）。

夢は思いどおりになりません。つまり、ままならない。やっぱり、第二の現実に思えてきます。

\*

話を変えます。

図式化すると以下ようになります。

現実：外（ままならない）

言葉：外と内（外と内の両面を兼ねそなえた便利なもの）

思い：内（ぐちゃぐちゃ、ままならない）

現実：外にあり、外そのもの（本来は言葉と無関係であり無縁である）である

言葉：外にあり、外そのものであると同時に、外から内に入りこむ

思い：内にある、得体の知れない＝本来は言葉にならないブラックボックス、実は外



これも「言葉をいじる」からの引用ですが、自分で書いたものとはいえ、あらためて見ると、うさんくさいです。荒唐無稽でもあります。夢を見て書いたとしか思えません。

とはいえ、自分が書いたものはかわいいものです。ちょっとだけ説明させてください。

現実と言葉は人の外にあって、思いどおりにならなくて、物でもある——言葉のうち、音声は空気の振動ですが、空気は物であり、ふるえは抽象です、一方の文字はたとえばインクという物質であり、同時に形という抽象です、音声と文字はどちらも物と抽象の両面を備えています——というのは何となくわかります。

それに加えて、思いが物ではないということまではわかりますが、外であるとはどういうことなのでしょう。これは「たとえ」だと考えましょう。

言葉の綾とも言えるでしょう。レトリックというもっともらしい外来語で呼ぶこともできますが、ここでは言葉の綾と呼びます。

ところで、綾って何でしょう？

辞書で調べると「模様・もよう」という言葉が見えたので、要するに形とか姿とか表情ではないかと感じました。抽象的なものであり、それを知覚するためには物や物質に助けてもらわなければならないということです。

それって、音声や文字のことじゃないですか？

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』に出てくるチェシャ猫の話を思い出します。猫が笑って、その笑いだけが残るというお話です。

チェシャ猫 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

猫という物つまり具象が消えて、笑いという表情つまり抽象が残る——。

ルイス・キャロルって面白い話をとてもリアルに書いた人ですね。私には難しすぎて苦手なのですが、すごい作家だと思います。かなりこみいったややこしいことを子ども向けのお話という形でリアルに書ける人なのですから。

このすごい作家についてすごいことを『意味の論理学』で書いたジル・ドゥルーズもすごい。すごい連続で、ごめんなさい。それくらいすごいんです。

そのすごさを実感するには、『不思議の国のアリス』と『意味の論理学』を読んでいただくのがいちばんだと思います。「なんも言えねー」状態になるか、「すごい」を連発するしかありません。個人の感想です。

河出文庫 意味の論理学〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオンとクロノス、そして「出来

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

言葉の綾の綾とは、模様のこと、模様とは具象と抽象を兼ねそなえているという意味で、音声や文字とそっくりである。音声と文字は言葉である。したがって、言葉の綾の綾とは言葉とそっくりである。つまり、模様は言葉とそっくりである。

言葉の綾とは言葉の言葉ということになりそうですが、不思議の国に迷いこみそうなので、ここでストップします。

\*

わかったようなわからないような話ですね。ある意味もどかしいです。ままたらなさを感じます。でも、それでいいのではないかとも思います。言葉の綾を文字通りにとって本気にすると馬鹿を見るという意味です。

これは『不思議の国のアリス』を読むと、体感的に実感できます。『意味の論理学』を読むと、頭で理解できます。

とはいうものの、模様は言葉とそっくりであるというのは、かなり言えている気がし

ます。

模様を、笑いのような表情とか、あるいは仕草とか、身振りと考えたら何となくわかるような気がします。形という意味では抽象だけど、その形を知覚したり認識するためには、その形が具体的な物で構成されていなければならない——ということでしょうか。

そう考えると、視覚でとらえている形そのものも模様と同じだということになります。ということは、見えるものすべてがチェシャ猫の笑いみたいなものになりそうです。

みなさん、笑いを思いうかべてみてください。誰の笑いでもいいです。できれば目をつむってください。待っています。

\*

見えましたか？

その笑って何でしょう？ あなたの頭（心でも魂でも脳でもいいです）の中に浮かんだ笑ってイメージですね。心象とか印象です。つまり、思いの一種ですよ。

その笑いを、あなたは自由にあやつれますか？ 心に浮かんだものを自由に、その動かしたり、形を変えたりできますか？ 自由自在にですよ。

べつに笑いじゃなくてもいいです。心に浮かんだもの、つまり思いを自由に操作することができますか？

私にはできません。たぶん、物じゃないからあやつれないのではないかという気がします。それが外なんです。思いは外なのです。正確には、内にある外です。

思いとは、内であって、得体の知れない、つまり本来は言葉にならないブラックボックスであり、実は外なんです。

ですから、笑いに実体はあるかとか、笑いとは何ぞやとか、上でやっていたように問うのはおそらく意味がありません。言葉の綾です。文字通りに取るとたぶん馬鹿を見ます。外という「たとえ」についても同じです。

＊

思いをあやつることは、人によってある程度できるかもしれません。ただし、夢のようにリアルな、視覚的であったり聴覚的であったり場合によっては触覚や味覚や臭覚をとまなうイメージを自在にあつかうことは無理なのではないでしょうか。ままならないのではないのでしょうか？

夢は、第二の現実だと思つづく思います。夢は内（思いの中）にあって、現実と同じくままならないし、あやつれないのです。思いどおりになる夢を見てみたいなあ。切にそう思います。

思いは思いどおりになりません。

夢レベルの思いを自由にあやつれたら素晴らしいでしょうね。もしそんなことができるなら、ままならない現実なんて要りません。ままならない夢も要りません。頭の中で、思いどおりにいろんなイメージをあやつってあげればいいのですから。

思いの中で何でもできるんですよ。どこへでも行けます。思いを思いどおりにできるのです。人の欲望には限りがありません。実に欲深い生き物なのです。

＊

話を戻します。

ちょっとだけなら可能だとしても、現実はいじれないしあやつれない。どうやら、思いも思いどおりにできそうもない。第二の現実である夢も、まず思いどおりならぬし、いじれない。

人生とは、つまり人として生きていくのは、ままならないことだらけ。

そのままならない森羅万象の中であって、唯一言葉だけが、そこそこいじれるしあやつれる。じっさいには、いじったりあやつれる気分にしてくれるだけみたいだけど、とりあえず、この何でもできるという気分を大切にしよう。

何しろ、言葉があって、ここまで来たのだから、だいじょうぶ。月にまで行けたじゃない。2000年問題に打ち勝ったじゃない。気温も上がったじゃない。これからもだいじょうぶに決まっている……。いや、やばいかも。

いずれにせよ、言葉に感謝。言葉なしに人は生きていけない。

#言葉 # 日本語 # 声 # 文字 # 模様 # 現実 # 思い # 夢 # エッセイ # 随想 # ルイス・キャロル # ジル・ドゥルーズ # 言葉の綾



## 意味の論理楽・その2【引用の織物】





＊

## 意味の論理楽・その2【引用の織物】

星野廉

2021年9月8日 07:58

目次

- ＊「もしかして、出来レース？」より
- ＊「カジノ人間主義」より
- ＊「何となく」より
- ＊出典
- ＊「もしかして、出来レース？」より

「わかる」って不思議だと思いませんか？ 自分には不思議で不思議でたまりません。「わからない」も、不思議です。きょうは、「わかる」ってことは、いったい、どんな「仕組み＝からくり」なのかを、考えてみたいです。哲学してみたいです。たまにはオヤジギャグなど、バンバン飛ばしながら、うつを紛らわしたいです。

ところで当ブログ日記では、やたら、くだらないギャグを飛ばしています。くだらないことは、十分承知しております。と、念のため言い添えておきます。で、自分なりに、ギャグが決まった時には、自己満足ですけど、とてもとても嬉しいです。

さて、「わかる」と「わからない」ということの「仕組み＝からくり」ですが、自分にとっては、昔から気になってしかたがない問題の1つです。こういうややこしいことは、科学者や、哲学者や哲学学者などに任せておけばいい、という考え方もあるでしょう。そうした意見のあることを重々承知したうえで、素人として素人らしく、あえて取り組んでみようと存じます。

で、ついでに説明しておきますが、哲学者と哲学学者とは違います。いわゆる哲学者は、「主に」自分の頭と体で考えたことを、書くなり、他の人に話したりします（※こ

では、後述のように「オリジナリティの有無」を問題にしていません、文字通りに取ってください。一方、哲学学者は、「主に」他の人の考えたことを、書くなり、他の人に話したりします。ここで、大切なのは「主に」です。「主に」は、「ほとんどの場合に」と同じくらいだと理解してください。

なぜかと申しますと、

\*ヒトに「独創性＝オリジナリティ」などは、備わっていない

からです。ヒトにとって、

\*知識や情報は、すべて既に誰かが言ったり書いたりした言葉だ、

という意味です。あらゆる知識や情報は、誰かの言葉の引用か、寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝ごった煮なのです。

せいぜいできることと言えば、これまで集積された言葉と想念を、ああでもない、こうでもない「組みかえる」手仕事＝ブリコラージュです。最近、発想法とか、創造的思考とかいう類の本が売られていますよね。イメージ的には、ブレインストーミングのパーソナル版という感じです。要するに、めちゃくちゃ、こじつけでもいいから、いろいろな言葉や想念を組み合わせる。言葉は下品ですが、頭の中を乱交＝オージー状態にしてしまうことです。

節操とか、正しい正しくないとか、真面目不真面目なんて、気にしてはいけません。とにかく、一か八かで「賭ける」のです。そのうちに「こんなんでしたけど～」と妙案が浮かぶという、ギャンブル＝ゲームを实践すること。それが思考すること、思想すること、あるいは哲学することだと思います。

その意味では、マラルメのやろうとしたことと、ちょっとダブります。マラルメにとって、詩作＝思索＝試作だったのです。と私は勝手に理解＝曲解＝たぶん誤解＝それでもOKしております。話が、それでした。ヒトには「独創性＝オリジナリティ」などは備わっていない、という話でしたね。

いや、そんなことはない。オリジナリティは存在する。特許権や著作権があるじゃないか。

と言う人たちもけっこういます、未だに。でも、その人たちは大変です。「オリジナリティは『存在しない』」ということを否定しちゃうと、その人たちは、

「オギャー！ ウギャー！」

と産声をあげて以来、自分自身がたったひとりで生きてきたことを、証明しなければなりません。とりわけ、母語を真似る＝学ぶことなく、ひとりだけで習得したことを証明しなければなりません。また、たとえば、太陽が地球の周りを回っているのではなく、地球のほうが太陽の周りを回っていることを、自力で知ったということを証明しなければなりません。

頭のいい人なら、口がうまいですから、証明しちゃうような気もします。言葉を用いれば、何とでも言える。何でもあり。言い換えるなら、黒を白と言いくるめることができる。というのが、言葉の特徴ですから、上記のことを言葉を用いて証明しても、ぜんぜん不思議はありません。だからこそ、人間様は、ここまでできたのですもの。なお、特許権と著作権に関しては、究極的にはお金とハンコの問題だ、とだけ言っておきます。この点については、いつか詳しく書きたいです。気になる方は、当ブログのバックナンバー「あなたなら、どうしますか？」（※安心してください。過去の記事を読まなくても分かるように書きますので）と、「やっぱり、ハンコは偉い」をご一読願います。

で、さっきの哲学者と哲学学者の話に戻ります。このブログでは記事を書き始めた初回から、一種の、

＊「哲学を庶民の手に」キャンペーン

みたいなことを、独りでやっています。「自分の頭と体で考える」とか、「哲学がしたい」が標語なのですが、「自分の頭と体で考える」というのは、比喩でして、きのうの記事の最後のほうで書いた、

> (1) ヒトは、言葉を使って考えることができる（※「言葉で考える」ではありません、「言葉の助けを借りて考える」という意味です、思考と言語との関係には、まだコンセンサスはないようです）。これが「言＝事分け」です。

> (2) ヒトは、体（※当然のことですが、頭も、お腹も、膀胱も、胃も、五感も、手足も、皮膚も体内にある何もかもを含みます）を使って考えることもできる。これが「身分け」です。

のうちの、(2) くらいの意味です。オリジナリティというものが存在する、という意味では、ぜんぜんありません。念のために申し添えておきます。現に、これまで、このブログで書いてきたことは、すべてが誰かの言葉の引用か、その言葉の断片の「寄せ集め＝コラージュ＝パッチワーク＝ごった煮」でした。そうした作業を「手仕事＝ブリコラージュ」として、やっていたのです。「乱交＝オーギー」していたんです。ヒトの書くもの、話すことで、そうでないものやことはありません。

で、さきほど書きました「哲学を庶民の手に」キャンペーンですけど、視点を変えてみましょう。現在の、政治家と呼ばれる人たちを思い浮かべてください。ついでに、現在活躍している作家と呼ばれる人たちを思い浮かべてください。できれば、その人たちの、経歴まで知っていると、いいんですけど、ふつうは知りませんよね、気にしませんよね、そんなこと。で、先週書いた「お口を空けて、あーん」という文章で、やや詳しく触れたことを、ここでかいつまんで説明します。

政治をやってお金を稼ぐことも、小説を書いて生計を立てることも、今では、いわゆる「偏差値」（※イヤな言葉です）の非常に高い、一部の大学出身者だけの特権ではなくなっている。つまり、エリートだけが独占する職業ではなくなっている。と、いうことを強調したいのです。昔は違いました。政治家や作家は、たいてい、いわゆる「いい大学」や「いい学校」を出た人たちがなる職業でした。もちろん、例外的な人物はいましたけど、少数でした。

国語の教科書を思い出してください。教科書に載っている文章を、読まされますよね。各文章の後ろのほうで、写真入りの作者の経歴って見かけませんでしたか？　自分は、国語が苦手で、授業も退屈だったので、よくそういう写真の顔にヒゲをつけたり、マユを鉛筆で濃くして、

ギャハハー！

なんて、ひとりで受けて喜んでいました。そういう写真の下とか横に、その文章を書いた小説家や詩人や評論家という肩書の人たちの略歴が載っていませんでしたか？　やた

ら、東大とか、京大とか、早稲田大とか、慶応大とか、書いてありませんでしたか？あれです。そのことを、言いたかったのです。お分かりいただけたでしょうか？ ちなみに、今挙げた大学名が、関東に集中しているのは、日本が中央集権国家を目指したからです。なお、私立の早稲田や慶応義塾は、国立の帝国大学への抵抗勢力でしたが、昔、そうした私立大学に通えたのは、裕福な家の子弟であったり、またはエリートだったと考えられます。

今は、違いますよね。試しに、現在の国会議員の一覧表なんかを検索して、学歴の部分だけでも見てみると、よく分かると思います。へーえ、と思う発見があるはずです。

もちろん、上で挙げた大学出身者は、現在も中枢を占めています。ただ、全体的に偏差値がかなり低くなっていることは、確かでしょう。ここで、偏差値などという、差別的な尺度を使って、話を進めなければならないのは、とても残念で悲しいことです。でも、こうした残念な事態を論じ、ひいては現状を打破するためには、現実を直視しないわけにはまいりません。ご理解いただければ幸いです。もっとも、政治家の場合には、二世や三世問題や、お金の、コネなどが絡みますので、事は以上述べたほど単純ではありませんが。

一方、文学の業界については、本屋さんに出向いて、ずらりと並んでいる文庫コーナーで、作者の略歴を片っ端から見ると、へーえと思うことがあるに違いありません。この業界では、かつての意味での「エリート」は、マイノリティになりつつあります。

で、哲学ですけど、哲学者とか哲学学者は、まだまだ、一部のエリートの特権という感じです。キャリアと呼ばれ、天下りや渡りで有名な上級の公務員といい勝負です。今、思い出しましたが、

日本人は思想したか？

というフレーズを読んで、反発を覚えませんか？ これって高飛車で、挑発的な響きを持つ文句ではありませんか？ 「あんた、すべての日本人に会って確認してから、そんな質問しているの？」とか、「そんな偉そうなこと、他人に尋ねる度胸がよくあるね」とか、言い返してやりたくありません？ ならないですか？ そうですよね。ふつう、こんなこと言われても、無視しますよね？ それが、今という時代でしょう。

「日本人は思想したか？」って、実は本のタイトルなんです。自分は読んでないので、何が書いてあるのか、誰が書いたのかも知りません。ただ、昔、新聞の下のほうにある本の広告で、その文字を見かけて、今、思い出しただけです。ところで、みなさん、思想してますよね？ 思考していますよね？ 哲学もしていますよね？

「思想」も「思考」も「哲学」も、別に難しいことではありません。それをしないで、ご飯が食べられないことは確かです。子どもを育てられないことも、確かです。誰もが、毎日やっていることなんです。「思想」も「思考」も「哲学」も、とどのつまりは、「よく考えること」。それも、頭だけではなく体を使って考えることだ、と個人的には解釈しています。

読んでもいない本のタイトルに、いちゃもんをつけるなんて、サイテーです。反省しています。でも、あと、ちょっとだけ言わせてください。「日本人は思想したか？」の答えが、その本の中で YES か NO か、または YES AND NO かは知りませんが、日本人を総称すると取られかねないセンテンスをタイトルにした以上、「思想したか？」と、過去形ではありますが、その「日本人」の中に、このブログを書いているアホや、あなたや、自分たちの身近な人たち、あるいは自分たちの先祖が含まれていることを願っています。というか、「日本人」を総称するなら、それくらいの他者への配慮と謙虚さをもって発言するべきではないでしょうか。お高くとまるのではなく。

なんて、難癖をつけているのは、今朝の散歩で犬の糞を踏みつけたから八つ当たりしているわけではなく、「自分・自分たち＝思想界（そんなものがあるとしての話ですけど）＝思想会」的なエリートの発想のにおいがしたからです。というか、自分の頭の中にまで土足で踏みこまれて、ジュッパヒトカラゲにされるのは、ごめんだ——。そう言いたかっただけです。

さて、「思想」や「思考」や「哲学」は、人それぞれにとって違う意味を持っています。これも確かなことです。というわけで、自分はこのブログで、自分なりに「哲学」しています。かなり、気まぐれで無精で省エネで、「頑張らない」をモットーにしてネガティブにぼちぼちとやっています。ただし、本気です。正気だとは言える自信はありませんが、本気です。

何だか、遠回りしちゃいました。きょうは、

> 「わかる」ってことは、いったい、どんな「仕組み＝からくり」なのかを、考えてみた

いです。

って、冒頭に書いたのでしたね。じゃあ、ぼちぼちいきます。で、結論というか、いちばん大切だと思っていることを、先に書きます。

\*すべては、「わかる」ように出来ている、

のではないのでしょうか？ 「はあ？」と感じられる方が、たくさんいらっしゃると思いますので、説明します。ヒトは、生まれて以来、いろいろなことを学びながら、育ちますよね。「学ぶ」＝「真似る」だという話を聞いたことがありますか？ 発音からして似ています、もんね。「まなぶ＝まねる＝まねぶ」。ダジャレっぽいですが、何となく、分かるような気がしませんか？ 大昔から比較的最近まで、いろんな国々に生きていた哲学者（※哲学学者も含めて）たちだけでなく、数学者たちや物理学者たちにいたる人たちまでが、

\*ヒトは、忘れていることを思い出すだけだ、

\*分かっているのに、うっかりして、分かっていることに気づかないだけだ、

\*思い出したことを、悟りだとか、発見だとか、名づけて大騒ぎしているだけだ、

とか、

\*「自分は分かんない」ってことを知るのが、大切なことだ、

\*分かんないことは、分かんないんだから、言葉にできない、

\*ヒトには「わかる」ことの限界があるし、「わからないこと」にも限界がある、

という意味のことを、書いたり、言ったりしてきた。そして、それを他の誰かが読んだり、聞いたりして、書いたり、言ったりしてきた、らしいのです。

自分は怠け者なうえに、忘れっぽいので、詳しいことは知りません。ですので、ただ「そうらしいのです」とだけ書いておきます。もっとも、上のような意見を述べた人は、少数派だという気はします。自分自身を、無知だとか忘れっぽいなどと認める、哲学者や哲学学者は、あまりいない、と考えられるからです。何しろ、お鼻が高い方々が圧倒

的に多いみたいです。

でも、もし上に書きつらねたような、哲学者や哲学学者や数学者や物理学者たちが言ったり書いたことが、「言えている＝本当らしい」としたら、笑えませんか？ 少なくとも、自分は笑っちゃいます。場合によっては、爆笑するかもしれません。だって、「やらせ」みたいなもんじゃないですか？ 本当は「わかっている」のに、または「忘れた」だけなのに、「わからない」とか「難問・難解だ」とか言って、額にしわを寄せ深刻そうに、のたまうなんて。これって、

\*もしかして、出来レース？

うっかり者たちの出来レース？（※「うっかり者たち」を「健忘症の人たち」と書くとしたのですが、記憶障害は病態や症候のようなので、使用を差し控えました）

「やらせ」「出来レース」「八百長」までは言わなくても、ほんの少し忘れっぽいからだ、と言えば笑えませんが、さもなきゃ笑っちゃいますよ、やっぱり。

要するに、「わかるということ」について、以前から不思議だと思っていたことは、

\*「わからない」って本当？

っていう、疑問なんです。ちょっと、ここでお断りしておきますが、今問題にしているのは「わからない」であり、「知らない」ではありません。両者はかなり似ていますが、違います。「知らない」については、いつか書きます。で、「わからない」ということですが、これは、「!？」ということですから、当然のことながら、この文章を書いている自分にも、わからない。つまり、疑問。要するに、忘れちゃっている！ 「えっと、えっと、何だっけ」状態なわけです。なお、笑っちゃいますよね。

ただし、この疑問については、頭と体の中を整理する必要があるので、後日、できれば、あすにでも詳しく書きたいです。マラルメさんとアツノさんに、ご登場願わなければなりません。きょうは、お二人とも、お忙しいそうです。ですので、いちおう、

ここまで書いたことのポイントを、箇条書きにしてまとめます。



- (0) ヒトは、わからないことを、わかると信じているらしい（※これが、原点です）
- (1) ヒトは、わかることしか、わからないらしい（※これじゃ、身も蓋もないですね、ちょっと細工をしましょう）
- (2) ヒトは、わかっていることしか、わからないらしい（※少し、元気が出ませんか？）
- (3) ヒトは、わかっているのに、とぼけているらしい（※何だか、悪者にされた気分になりますね、じゃあ、こんなのは、どうですか？）
- (4) ヒトは、わかっていたことを、忘れているらしい（※いくらか責任が軽くなった気がしませんか？）
- (5) ヒトは、わかっていたことを、忘れそうになっているらしい（※いくぶん救われた気持ちになっていただければ幸いです）

以上です。

念のために、再度書きますが、本気です。正気とは言いませんが、本気です。

またもや、だらだらとした長い文章になりました。きょうは、特に後半が読みにくかったことを、お詫び申し上げます。今のところ、自分には、あのようにはか書けません。できれば、あす、あの続きを書きたいです。（「もしかして、出来レース？」より）

\* 「カジノ人間主義」より

ヒトは、分かっていることを、すっとぼけて分かっていないと言い張っているらしい。あるいは、分かっていることを、うっかりして分かっていないと勘違いしているらしい。

ということは、「うん、分かる、分かる」「そうか、分かった!」「なるほど」「おお、すっきりした」というのは、結果として一種の「やらせ」、または「出来レース」なのではないか。

これが、きのう書いたことの要約です。

\*

で、きょうは、きのうみたいに、やyasiい文章にしたいくないので、結論からズバツと書きます。

\*やっぱり、「分かる・分かっている」とは、「出来レース」、または「八百長」らしい。

です。「なるほど、おお、すっきりした」と、言っていたいただけますでしょうか？

駄目ですよね。

やらせで、いいから、せめて、「分からないわけでもないけど……」くらいは、どなたかに言ってほしかったんですけど、やっぱり駄目ですね。

「畏れ多くも、人間様の「分かる」という、いとなみを、「やらせ」だの「出来レース」だの、「八百長」だのなんて言うやつなど、無礼極まりない不届き者だ。打ち首にいたす」

あるいは、

「それを言っちゃ、おしめえだよ、このばかたれめが。ひっこめ」

といった幻聴が、難聴の耳に聞こえるんですけど。

\*

きょうは、それどころじゃないのです。いずれにせよ、夢も希望もないような、どつちらけ(=極度に興ざめである=非常にしらけたさま)、のお話をしているんですよ。さっき聞こえた幻聴のように、それを言ったらおしまいだ、みたいなお話をしているのです。で、きょうもマラルメ師ならびに泉アツノさんがご多忙だということなので、マ

ラルメ師の噂話を、ここでこっそりしてみたいと思います。で（※相変わらず「で」が多くですみません、この癖、なかなか直らない＝治らないようです、「で」ないと先に進めないんです）、

マラルメは（※いらっしゃらないと、いきなり呼び捨てです）、フランスの詩人でした。当然のことながら、詩を残しています。そのマラルメの、とある詩について、とある発見があったということを、今思い出しました。記憶は定かではありません。ほぼ、次のような話だったと思います。

マラルメを扱った卒論か修士論文かで、ある学生がマラルメの詩を分析した。で、その詩のなかに、ステファヌ・マラルメの姓だか名だか忘れましたが、とにかく名が織り込まれていたというお話です。

ソウ・ホワット？（英） エ・アロール？（仏） ナ・ウント？（独） で、それがどうした？（日）

という、感じですよ。普通の反応は——。でも、いちおう、これって大発見だったわけですよ。遠く離れた東洋の端っこ（※ファー・イースト＝極東＝何という、侮蔑的な表現！）に位置する島に住む一学生が、「難解＝わけ分かんない＝これ『なんかい』のう？」で、本国フランスの人たちでさえ読みもしない、マラルメの詩を「解読」した？ アンクルワヤーブル＝アンビリバボ＝信じられない！ と、おフランスでも、一部の方々がお騒ぎになったとか、ならなかったとか、いうお話なんです。

要するに、マラルメさんも、自作の詩に署名を忍ばせるなんて、おちゃめで粋なことをやっていたのね。というだけの、お話なんです。

＊

ちょっと話をずらします。定型詩って、お聞きになったこと、ありませんか？ 難しいことじゃありません。ほら、「5・7・5 プラス季語」の俳句という、定型詩。「5・7・5・7・7の三十一文字（＝みそひともじ＝アラサー）」の短歌という、定型詩。この国にも、昔からありますよね。苦勞して音節の数を合わせて、「できたー！」なんて言って喜ぶ。あれ、です。

ただ、フランスや、他のヨーロッパの国々の定型詩の場合には、「韻を踏む」とか、「音節の数を合わせる」とか、ちょっとややこしいんです。自分も大学時代に、英語やフランス語の詩を、授業で読まされたり、暗唱させられたりしました。慣れると、母語でないにもかかわらず、それなりに「口に出して読んでみると、心地よいなあ」という気分の一端に触れることができます。「韻を踏む」は、漢詩にもあるんですけど、覚えていらっしゃるいませんか？ 個人的には、ちんぷんかんぷんでした。このダジャレって、漢語＝中国語と関係あるらしいのですが、漢文で苦労した自分には、そのダジャレの「わけ分かんない」イメージが分かるような気がします。

ここまで話したのですから、思い切って「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」っていう、

>ヨーロッパの定型詩の一端

に、触れてみませんか？

「韻を踏む」と「音節の数を合わせる」ですが、自分は専門家ではないので、自分なりにリフォームして説明いたします。ただイメージだけ（※ちょっとだけ）、感じ取っていただければ、それでけっこうです。例を挙げて、やってみますね。では、いきます。

(例1)

セブン	(3)
イレブン	(4)
イイキブン	(5)

(例2)

スカット	(3 or 4)
サワヤカ (ka)	(4)
コカ (ka)	(2)
コオラ (ra)	(2 or 3)

上の2つの例を見て、なんとなく、分かるような気がしませんか？ どれも、

\*語呂がいい。覚えやすい。

この記憶しやすいということが、ポイントです。そもそも、暗唱しやすいように、「韻

を踏む」と「音節の数を合わせる」という定型が作られたという話です。詩はもとは口承文学（※口づてに語り継がれ歌い継がれてきた神話や昔話や詩歌）だったようですから、その名残でしょうか？

で、(例1)の「ブン」「ブン」「ブン」っていうのは、完璧に「韻を踏んで」います。(3)(4)(5)は、音節の数です。(例2)の場合には、(ka)(ka)(ra)と、(a)が共通していますね。こういうのも、あります。「韻を踏んで」います。

ちゃんとした定型詩の場合には、たとえば、「ブン」「ブン」「パラ」「パラ」「ブン」「ブン」とか、「ブン」「パラ」「ブン」「パラ」「ブン」「パラ」みたいに、きれいに並びます。すごいですね。ダジャレと同じくらい、作るのが大変そうですね。ダジャレと「韻を踏む」は、基本的に同じ作業だと勝手に理解しております。

ただし、(例1)(例2)ともに、音節の数は不ぞろいです。ちゃんとした定型詩では、音節の数をそろえなければ、ならないんですよ。上の例のような短い詩がヨーロッパにはあるわけないみたいですから、音節の数は、10とか20くらいはざらにあったと記憶しておりますが、正確なことは、すっかり忘れちゃいました。いずれにしても、オヤジギャグと同じく、それなりの苦労がありそうです。ご苦労さまって感じです。

＊

以上、すごく大ざっぱに「韻」と「音節の数」をそろえるということ、説明しました。専門家からは、「この、でたらめやろうが！」と罵倒されそうです。ここでは、イメージだけさえ、何となくつかめばいいのですから、悪態をつかれても知らん顔しておきます。

でも、不思議に思いませんか？ どうして、上で書いたみたいに、「韻」と「音節の数」をそろえるのに、血道をあげたり、中には命をかける人もいるんでしょう？ 理由は2つくらい、ありそうです。

1つは、さきほど述べたように、口調をよくして記憶しやすくする、ためです。起源が、口承文学ってやつだからです。確かに、「セブン、イレブン、イイキブン」なんて、語呂がよくて「いい気分」になり、しかも覚えやすいですね。それは、納得できるような気がします。2つめの理由は、そういうダジャレ、いや、「芸＝技＝テクニク」が上手だと、尊敬されるそうなんです。「わざ」とらしさが、「芸」や「術」になる。ふーん、

そんなもんですかね。

マラルメの話に戻ります。以上見てきたように、ヨーロッパの定型詩には、面倒くさい約束事があります。俳句や和歌を考えると、「わか」のように、偶然性= accident = アクシデントに左右されます。運にも左右されます。難しく言うと、偶然と必然の間を彷徨（=うろうろさまよう）するわけです。

#### \*偶然と必然

哲学っぽいですね。「存在と無」みたいに。で、マラルメって人は、偶然性と必然性との、非常に意識的だった詩人なんです。あれほど、偶然と必然にこだわって詩作=思索=試作した人はいなかったんじゃないか、なんて思ったりもします。ウィキペディアで「マラルメ」を検索して、ざあっと目を通せば、だいたいの感じがつかめます。それだけで十分です。考えて読んじゃ、駄目です。絶対に深入りしてはなりません。深入りすると、あそこが危うくなりますよ。内緒の話ですけど。

偶然と必然っていうと難しそうに聞こえますが、簡単に言えば、ダジャレやオヤジギャグも、偶然と必然の間で、おろおろ、うろうろしながら、作ります。賭け事=ギャンブルも、同じです。ギャンブルの達人には、偶然の中に必然を読む特殊な才能がありますね。うらやましいなあ、格好いいなあ、なんて自分は思います。イ・ビョンホン主演の、ギャンブラーの生きざまをテーマにした韓国ドラマを見ての感想ですけど、この気持ち分かっていただけかもしれませんか？

ものすごく単純化して説明します。サイコロを振ったとします。2の目が続けて2回出て、その次に3の目が3回出たと仮定しましょう。2 2 3 3ですね。あるいは、最初に2の目が出て、次に3の目が出て、その次に2が出て、さらに3が出たとします。2 3 2 3ですね。すると、「にーにーさんさん」「にーさんにーさん」という2つの「おにいさん」というタイトルの短い詩ができたことになります。

馬鹿みたいな説明ですが、そんな感じです。

\*

で、サイコロだと、そうした目が出る確率はかなり低いでしょう。でも、サイコロの目が語の数くらいたくさんあったと考えてください。韻を踏んだり、音節の数を合わせ

ることのできる確率は、相当高いのではないのでしょうか。そう考えると、ヨーロッパでおびただしい数の定型詩が作られてきたのは、当然だという気がします。何しろ、サイコロを振った場合には、6つの目のいずれかしかでないのに比べ、

\*言葉=語という「サイコロ」(※言うまでもなく比喻です)を振る

ならば、韻を踏み音節を合わせた語の連なりなど、本物のサイコロに比べれば、比較的簡単に定型詩を作ることができるはずです。

\*定型詩を作る行為とサイコロを振る行為の共通項=偶然と必然とのからみ合い=マラルメがこだわったこと

とは、そんな感じですよ。以上は、ど素人の曲解=誤解=与太話でした。

\*

で、言葉が「書ける」という不思議ないとなみが(※よく考えると不思議じゃありませんか？ えっつ、ぜんぜん不思議じゃない？ 失礼しました)、「賭ける」(=ギャンブルをする)に限りなく近いということに関しても、マラルメほど意識的な詩人はいなかった。何しろ、「エイヤツ」とサイコロを振る名人ですから。いきなりですが、

\*カジノ資本主義

って、言葉をお聞きになったこと、ありませんか？ このブログでは、「投資って何だろう？ お金って何だろう？」という文章で、ちょっとだけ触れました。自分は、経済や経済学には、めちゃうちゃ弱いのですが、

\*カジノ資本主義というのは、資本主義がいくところまでいっちゃって、ギャンブルみたいにゲーム化しちゃった。

そんなイメージで勝手に理解しています。また、

\*ケインズの経済学の研究と、ケインズの株式狂いとの関係は、投資と投機(=ばくち)との関係によく似ている。

つまり、両ペアは酷似＝激似＝ほぼ同じ、と勝手に理解しています。ですので、そうした素人の出まかせとして、この続きを読んでいただきたいのですが、よろしいでしょうか？

＊

で、思うんですけど、やっぱり資本主義って、やりすぎではないでしょうか？ 金融工学か証券化か投資か市場か相場か、何だか知りませんが、ギャンブルしてませんか？ どさくさにまぎれて小細工していませんか？ 素人を馬鹿にした玄人が、人の禪で相撲をとっていませんか？ 一部の人が甘い汁を吸っていませんか？ 国同士のレベルでも国民間のレベルでも、貧富の格差が大幅に拡大してきていませんか？ でも、いったん始めちゃったし、世界中に広まってしまったし、中国までやってるし、イスラム圏もやっているし——もう、降りられない状態になっちゃっているのでは、ないでしょうか？ ヒトは、本質的に、

＊ギャンブル依存症

では、ないのでしょうか？

＊

都合により、ここで、変調 or 偏重 or 移調 or 胃腸します。これから先、多少、ノイズが入りますが、気にしないで読み進んでください。

＊やっぱり、出来レース、やらせ、八百長らしい。気づいているくせに、あるいは、気がついていないふりをして、または、すっかり忘れて、やらせを本当だと思いこんでいる、もしくは、思いこもうと自分をだましている。

＊ある種のスポーツ（※あえて、名指ししません）や、ある種のテレビ番組（※あえて、名指ししません）と同じです。嘘、作りもの、フィクション、編集済み、情報操作されたもの、筋書きなしに見せかけて本当は筋書きがあるもの——そういうものを見て、ヒトは何とも思わなくなっている。心の底では、嘘だと分かっている、嘘だと思えば楽しめるから、「ただ見ている」。実質的傍観者状態。重度の思考停止状態。

＊悪いと分かっている、間違っていると分かっている、正しくない分かっている、正



直じゃないと分かっている。とどのつまりは泥棒や搾取だと分かっている。でも、都合が悪いから、そういうことは忘れる、あるいは、忘れたふりをする、または、すっかり忘れてしまっている。

\*思い出そうと努力すれば、思い出すことができる、学び直すこともできる、再発見することもできる、「分かった!」と叫ぶこともできる。そうなのに、忘れている。思い出そうとしていない。そうした気迫も努力もみられない。都合が悪いから、必要がないから、という言い訳が心の奥底にある。

\*へたなことを口にした、実行に移すと、他のヒトたちから、寄ってたかっていじめられたり、場合によっては、消されるから、思い出さないし、分かれようもしないし、実際に忘れてしまっているし、分からなくなっている。

\*「分かる」は「分ける」ことだから、見えたり手にしているものは断片だけ。細切れ状態。要するに、現実も事実も真実も、まだらにしか分からない。「分かる」「分からない」ということは、ふるいにかけて、選(よ)り分けること。そのふるいに、かからないものは、分からない。そういう仕組みになっている。

\*ヒトは、まだら模様の世界を見ている。おそらく、そのまだら模様はヒトに共通している。だから、ある程度、話が通じる。ただし、通じ合えないこともかなり多い。ひょっとすると、相手に通じているという認識は、個人レベルの錯覚かもしれない。

\*ヒトは、知覚され記号化され信号化されデジタル化された情報を、シナプスとかいう導線と回路を通して、まだらに脳で処理している。その導線も回路も、無限ではなく有限の質と量のものしか通さない。ノイズは、抑制されている。そうやって、脳の過熱による機能不全を防ぐ仕組みが存在する。それでも、ノイズは駆逐できない。除去できない。

\*カジノ資本主義というものは、上に書きつづったヒトの行動とすごく似ている。激似。酷似。かなりの部分がダブっている、かぶっている、そっくりと言ってもいい。

\*答えが最初から出ている、出来レース。筋書きが最初からある、やらせ。何か黒い目的があって仕組まれている、八百長。

※すべてがぴったり当てはまり、すべてが正しいとされ、すべてが分かるような仕組みができています。「分かる」は言葉、ヒトが勝手に自分を基準にして決めたもの。だから、「分かる」と「分からない」とは反意語ではなく、表裏一体。観測者の位置によって見え方が変わる、玉虫色。

※真理や実体なんて、哲学や科学の出来レース。それを支えているものが、表象という名の代理人。何でも代行屋さん。まいどありー。おおきに。儲けさせてもらっております。

※Aだと思っているものは、括弧にくくられたA、つまり「A」。それを、(括弧なしの)Aだと思いこんでいる。さもなきゃ、人間=ヒトなんて、やってられないよー。確かにね。その通りだ。それこそが真理だ。トゥルースだ。ヴェリテだ。誰も否定できない真実だ。

※だから、大丈夫。このままで、大丈夫。「仕組み」とか「からくり」なんて、ちゃちゃを入れる、ふざけたやつは、くたばってしまえ。二葉亭四迷。浮雲。そんなやつは、人間様じゃない。ひとでなしだ。

※

とにかくヒトには出来レースが多すぎやしませんか？ その原因は、Aの代わりに「Aではないもの」を代用するという、「表象の働き」にはほかならない。代用品を使っているから、ぶれるし、ずれる。これ、当たり前のこと。カツラと同じ。

だから、「表象という仕組み」をかかえて生きるしかない、偶然と必然の間で「うろろうろおろおろ」するしかない、こうしたヒトのギャングラーぶりを、このブログでは、

※カジノ人間主義

と呼ぶことにします。Casino-Homo-sapiensism。カジノ・ホモ・サピエンシズム。そんなことを言っている自分もヒトの子ですから、さっきから、あちこち、ぶれています。ぶれまくっております。標的は狙っているつもりなのですが、ぶれて、ずれて仕方ない。このへんで、ブレを修正し、「分かる」「分からない」に的を絞ります。

＊

では、軌道修正します。

★知覚：とりあえず、必要のあるものしか知覚しない。都合の悪いものは知覚しない。たとえば、「見る」「聞く」という行動が、いかに選別と排除に満ちたものであるかは、誰もが日々体験している。テレビを例にとれば、すぐに分かる。画像と音声伝える全情報を、視覚と聴覚が残らず知覚していたら、そのヒト、頭＝脳が爆発してしまうでしょう。

★知る：ゲーデルさんの何とか定理や、ヴィトゲンシュタインさんのつづやき集を持ち出すまでもなく、ヒトの知にはリミットがある、枠がある、囲いがある。つまり、知ることが可能なことしか、知ることができない。ひっくり返して言うなら、知ることができることだけ通す、便利な「回路＝ふるい」が存在する。それ以外のものは、通しません。でも、どういうわけか、ノイズというものが入り込む。どうやら、ヒトの「分かる」は欠陥品らしい。とはいうものの、リコールや回収してくれる存在が見当たらないため、「ま、いっか」でやるしかない。

★学ぶ：これは、手垢の付いたダジャレ＝語源に習えば、「まねる」ことである。赤ん坊のころから、ヒトは真似が実にうまい。真似られないことは真似ない習性が、しみこんでいる。三つ子の魂百まで。人類は、みな、きょうだい。だから、水中でエラなどつかって、「生きる＝息る」真似など、できっこないのは、先刻承知。仙石イエス。やっぱり、都合のいいこと、必要なことしか、ヒトは学びません。

何しろ、ヒトは、賢くて抜け目がないのです。

以上、3ヶの★が、きょうのまとめです。ただ、こういうことを書いてみると、罰（ばち）が当たります。どういうことかという、不毛な状況に到達します。不毛は文字通り、毛が生えない、けなし、なさけない。実が実らない状態。みなし（※ご、とは差別語になるから、付け加えません）。かわいそうな、ハッチ。

ここまで、お読みくださり、どうもありがとうございました。感謝しています。よかったら、また、来てください。待ってます。（「カジノ人間主義」より）

＊「何となく」より

＊何となく生きている。

みなさんのなかで、そんな感覚をおもちなっている方も、たぶんいらっしゃるかと思います。自分の場合、そんな心もちでいることが、よくあります。さもないと、抑うつが悪化するという事情もあります。とにかく、そうしていると楽なことは確かです。

＊「自分が」生きている意味＝「自分の」人生の意味については、あまり深く考えないほうが、生きやすい

と言えそうです。でも、

＊「一般論として」生きている意味＝「一般論として」人生の意味について考える

というズルをすると、話はがらりと変わります。個人的には、これが、

＊いい気分転換＝気晴らしになる

のです。自分が注射 or 手術されるのを考えるのは嫌だけど、世間一般のレベルで「注射 or 手術される」ことを考えると、恐怖心が薄れる、というのに少し似ています。でも、自分が注射をされたり、手術を受けるのが大好きだという人も、世間にはいます。実際、そういう人から話を聞いたことがあります。その人の場合は、歯科医院で抜歯することなのですけど。それは、さておき、

＊「個人の問題」を「一般論」に置き換える

のって、やっぱり、「ずるい」と思います。「ずるい」⇒「ずる賢い」⇒「賢い」とみなすという「ずるい」考え方＝操作もあります。いずれにせよ、「ずるい」ことには変わりはありません。で、厚顔に＝いけしゃあしゃあと、そのズルをしますと、

＊ヒトという種は、何となく生きていることができない生き物である。

また

＊ヒトという種は、生きていることに意味を見いだそうとする生き物である。

とか言えそうです。これには、

\*ヒトは「何となく」なんていって、すっとぼけながら、実は「何となく」なんて生きていない

という前提があります。ヒトという種は何となく生きていない、と言っているわけですから、

\*たぶんに、他の生物を見下した言い方だ

とも言えます。でも、見下すつもりなどぜんぜんありません。なぜなら、「何となく生きていることができない」も、「生きていることに意味を見いだそうとする」も、自分にとっては別に優れた資質＝特性＝習性だとは思えないからです。むしろ、

\*ヒトという種は、惰性で＝何となく、「何となく生きていることができない」＝「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行＝実演している。

からです。「惰性」というと、ネガティブな響きがありますね。でも、「何となく」というと、ネガティブな響きは薄れる＝「許せる」ような気がしませんか。さらに、次のようにも言えます。

\*ヒトという種は、惰性で＝何となく＝「経路」に沿って、「何となく生きていることができない」＝「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行＝実演している。

\*

実は、たった今書いたフレーズが、きょうのテーマ＝いちばん言いたいことなのです。ここで、ちょっと脱線させてください。このブログの文章では、やたら、

\*「＝」

をつかいます。これは、もちろん、わざとやっているのです。なぜ、わざわざそんなこ

とをしているのかと申しますと、わざ＝方法＝戦略としてやっているのです。言い換えると、

\*意味＝進行方向を固定させたくない

つまり、文＝フレーズ＝センテンスを、

\*停滞させたい＝つまづかせたい＝踏みはずしたい＝吃音させたい（※「吃音」はあくまでも比喻です。不快な気持ちになられた方に、お詫び申し上げます。ごめんなさい。）

または、

\*すっきりさせたくない

からなのです。

\*「これしかない」や「簡潔に」や「単純明快に」や「流れるように」の逆

です。すっきりした文章も大好きですけど、

\*「すっきり」は、何かをそぎ落とした＝何かを排除（＝選別）した結果である

および、

\*「すっきり」は、面倒なことを放り出す＝放棄するという横着＝怠惰の産物である

ことを思い出しましょう。彫琢や推敲の結果なんかじゃありません。「ま、いっか」＝妥協＝「テキトーにみつころう」の結果です。それどころか、ある意味では、

\*「すっきり」は、「ズル・ずるい」と「消す＝殺める」を行った、大雑把で血生臭い結果

とも言えるのです。

\* Simple is beautiful.

とは、言葉や文章に関する限り、誠意に欠けた美辞麗句でしかありません。

以上が、冗漫＝冗長＝散漫＝わかりにくい＝ごちゃごちゃした文章を書いているアホの、言い訳＝弁解＝戦略の説明＝「堪忍してちょ」＝脱線です。とはいえ、この脱線は、きょうの本筋と大いに関係があるのです。

＊

で、さきほどの「惰性で＝何となく＝「経路」に沿って」に、話をもどしますが、

＊「「経路」に沿って」

と言うと、何だかわけが分からなくなると思います。「経路」というのは、このブログで、最近、このアホが馬鹿みたいによくつかっている、

＊きわめて「個人語」的色彩の濃い言葉＝自分で勝手につかっている言葉＝自己満足の言葉＝自分受けする言葉＝他人には通じそうもない言葉

です。

ですので、この言葉がこのブログでどのようなつかい方をされているのかを、ご存じない方、および、きのうの記事を読んだけれど、「経路」なんてどうでもいいとお思いになっている方のために、きのうの記事から、必要な部分だけを少し改変＝変奏＝変装＝編曲して、引用させていただきます。

＊「経路」には一定した意味はない。

＊「経路」＝「線路」は意識されない。

＊「経路」＝「線路」は、敷かれている＝引かれているが、意識されない。

＊「経路」の中心的なイメージは、「すじ＝方向＝進行」である。

＊「経路」＝「意味」とは、分からないものである。

＊分かるものは、「経路」＝「意味」ではない。

＊分かったとたんに、「経路」＝「意味」ではなくなる。

以上のフレーズ＝言葉を並べたところで、さっきのフレーズ＝言葉を、以下にコピペしますので、申し訳ありませんが、もう一度読んでください。

＊ヒトという種は、惰性で＝何となく＝「経路」に沿って、「何となく生きていることができない」＝「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行＝実演している。

ということなのです。少しは、分かりやすくなりましたか？ 駄目？ じゃあ、駄目押しに、ものすごく、簡単に＝すっきりさせてみます。

＊何となく「何となくでない」をしている。

です。矛盾に思えますか？ 論理的ではないとお思いになりますか？ 「矛盾している」とか、「論理的ではない」とお感じになれば、こちらの

＊イメージが通じた

と言えそうです。通じたのが、「イメージ」であることに注目してください。「意味」「考えていること」「メッセージ」ではなく、

＊あくまでも「イメージ」

です。

＊イメージとは、とても、テキトー＝気まぐれ＝大雑把＝でまかせ的＝頼りにならない＝不安定なものである、と想定している

と考えてください。ですから、

＊「矛盾している」あるいは「論理的ではない」と感じて、いっこうに差支えがない

のです。イメージのテキトーさについては、「あらわれる・あらわす (8)」（安心してください。過去の記事を読まなくても分かるように書きますので）で、かなり詳細に論じましたので、ご興味のある方は、ご一読願います。どれくらいテキトーかを知っていたくために、その記事からちょっとだけコピペしてみます。

＊ imagine のアナグラムは enigma (英語で、謎、謎の人) + i (虚数単位)。image のアナグラムは、magie (仏語で、魔法、魔術)。「マジ」で、あやしい。imago ⇒ amigo (西語で、男性の友人) とはいえ、気を許してはならぬ。



以上のフレーズが、引用ですけど、英語の image の動詞形である imagine が曲者でして、

\*言霊の幸ふ国 (=ことだまのさきはうくに) (\*意味は広辞苑でお調べください) の言葉で、「分光する=分ける」と、imagine のアナグラムは「imigane =意味がねえ=意味がない=「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』」、あるいは、「iminage =意味なげ=「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、の『意味なげ』」とも読める

というテキストぶりなのです。えっつ? 「テキストなのは、imagine ではなくて、おまえだろう」ですか? そう言われると、返す言葉がありません。その通りでございます。

\*

で、要するに、

\*イメージを扱おうとするならば、矛盾、論理、筋道、真偽といった「凡庸な」フィクション=物語の出る幕ではなく、むしろ、去年ノーベル物理学を受賞した3人の日本出身の学者たちによる、受賞の対象となった研究論文に見られる「摩訶不思議な」=「非凡な」=「荒唐無稽ともいえる」フィクション=物語に出てくるたぐいの言葉たちの表情=仕草=動きこそが、主役を演じる。

のです。ですから、

\*「矛盾している」あるいは「論理的ではない」とは、褒め言葉である

と言えないこともありません。

\*現代物理学では、イメージが重視されているらしい

と妄想しております。しかも、

\*そのイメージは、たぶん「矛盾している」あるいは「論理的ではない」の乱舞=不条理演劇=「伝染るんです or ぼのぼの」=「わけわかんない」=「禅問答」(\*「禅問答」という言葉はあまり好きではないのですが、理由は禅僧が位が高いほど偉そうにしているからという単純な理由だけなのですが、人によっては、この言葉でイメージ

が分かっただけの気がするので挙げておきます) を演じている

みたいなのです。

\*現代物理学は、「 $1 + 1 = 2$ 」や「犬が西を向けば、尻尾は東を向く」の世界ではない。

みたいなのです。

と、妄想して=決めつけて=思い込んでおります。

くどいですが、もう一度、書きます=コピペします。

★

\*ヒトという種は、惰性で=何となく=「経路」に沿って、「何となく生きていることができない」=「生きていることに意味を見いだそうとする」という行為を、日々実行=実演している。

ということなのです。ものすごく、簡単に=すっきりさせてみます。

\*何となく「何となくでない」をしている。

です。

★

以上の説得=説明の方法は、イメージを伝えるために、どちらかというと理屈=論理に訴えています。倒錯したやり方です。次に、変奏=変装=言葉の置換えという方法で、みなさんへの説得=説明を試してみます。

\*「我思う、ゆえに我あり = Je pense, donc je suis.」 by デカルト

↓

「ぼーっとする、ゆえに我あり」 by アホ in 「ぼーっとする、ゆえに我あり」 & 「不自由さ (2)」

↓

「何となく、ゆえに何となくにあらず」

↓

「経路＝線路」に沿って、「経路＝線路」を外れる」

↓

「線路」に沿いつつ、同時に脱線する」

↓

「A」でありながら、同時に「Aではない」である」

↓

「何か」でありながら、その「何か」ではない」

いざ試してみると、依然として、どちらかというと理屈＝論理に訴えています。やっぱり、これしか道＝手はないのでしょうか。それとも、

\*人工言語という、フィクション＝いかさまの体系＝「圧倒的な偶然性に支配されている宇宙のなかで、細々と人為的な必然性をつくりあげ、それを信奉しながら、ある程度の有効性に賭けたツール」に頼る

べきなのでしょうか。

別の説得＝説明の方法として、今度は、きのうの記事に書いた、辞書での言葉の料理法＝説明の仕方1)～5)までのうち、

3) 見出しの言葉をつかった例文を挙げて、ほのめかそうとする。＝「Aは、『PがAしたらQが起きた』みたいにつかうのだけど、分かるかしら」。

を試してみましょう。あれっつ！　きのうの記事からコピペをしようとしたら、その記事のなかで

\*「意味」＝「経路」

を説明しようとした結果、出てきたのが、上にコピペした、いくつかのフレーズだったことに気づきました。こういうのを

\*堂々巡り＝「あら、また、あんたじゃないの」

というのですね。「だめだ、こりゃ」的状况ですね。でも、めげずにやってみます。別のフレーズで試せば、何とかなるのではないかと、「何となく」思います。では、いきます。

＊

- ＊意味は分からないけど、何となく、お経を読んでいる。
- ＊意味は分からないけど、何となく、その歌をうたっている。
- ＊意味は分からないけど、何となく、お風呂に入っている。
- ＊意味は分からないけど、何となく、ご飯を食べた。
- ＊意味は分からないけど、何となく、選挙で〇〇党の(CE)に投票した。
- ＊意味は分からないけど、何となく、戦争で人を殺めた。
- ＊意味は分からないけど、何となく、この△年間自動車を運転してきた。
- ＊意味は分からないけど、何となく、レジ袋使用をやめてブランド製のエコバッグをつかっていて、たくさんあるダサいもらいもののエコバッグは押し入れに突っ込んだままだ。
- ＊意味は分からないけど、何となく、地球温暖化を助長してきたらしい。
- ＊意味は分からないけど、何となく、大不況になっちゃったみたい。
- ＊意味は分からないけど、何となく、神様を信じていることになっている。
- ＊意味は分からないけど、何となく、この惑星がやばい方向にむかっている気がする。
- ＊意味は分からないけど、何となく、すごく悪い＝罪深いことをしている気がする。

もう、これくらいで、よろしいですよ。

＊何となく「何となくでない」をしている。

の意味が、体感できてきたのではないのでしょうか。

次に、ヒトにとって、わりと苦手な時間的経過の処理に挑戦しましょう。いえ、難しいことではありません。ここでは、ただフレーズの最後＝文末をちょっといじるだけです。

- ＊何となく「とんでもないこと」をしている。
- ＊何となく「とんでもないこと」をした。
- ＊何となく「とんでもないこと」をしてきた。
- ＊何となく「とんでもないこと」をしつつある。
- ＊何となく「とんでもないこと」をするだろう。
- ＊何となく「とんでもないこと」をし続けてきた。
- ＊何となく「とんでもないこと」をし続ける。
- ＊何となく「とんでもないこと」をし続けるだろう。

こう並べてみると、空間的な広がりだけでなく、時間的な広がりも体感できて、

\* 「何となく」は「とんでもない」ではないだろうか？

と「何となく」思えてきませんか？ きょう、みなさんに、このアホがどうしても、訴えたいことは、それなんです。

この記事の冒頭で、いきなり、

\* 「何となく」は「とんでもない」のだ。

なんて申しあげても、

\* 「はあ？」で、片付けられてしまった

にちがいません。それが、とうぜんだと思います。自分でも、いきなり、そう言われたら、

\* 「はあ？」

ですもの。今なら、

\* 「何となく」は「とんでもない」のだ。

と書いても、それほど抵抗感＝「わけわかんない」はないのではないのでしょうか。

\* 知らず知らずのうちに、大変なこと＝罪なことをしている

とか

\* 無意識のうちに、多大な影響＝危害＝被害を及ぼしている

とか

というふうに読みかえていただいても、大差ありません。

\*

ここでまた話は、ずれますが、

\* 「何となく」の正反対

であるはずの

\*間違っただけは何もしていないのに＝然るべきことをちゃんとしているのに＝言われた通りにしているのに、やることなすことがうまくいかない

という状況がテーマになっている小説を思い出しました。きのうの記事でも出てきた、

\*ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert : 1821-1880) 作の『ブヴァールとペキュシェ』(Bouvard et Pécuchet)

です。個人的には、この作品は小説ではなく、

\*宗教色のない、むしろ、自然科学的な意味での、一種の「預言書」

だと思っているのですが。テーマが大きすぎて、ここでは扱えませんので、万が一ご興味のある方は、実物をお読み願います。あえて、言えば、

\*ヒトは、何となくうまくやっているつもりで、何となく途方もなくズレたことをやっている

みたいな「お馬鹿な」＝「真面目な」話を書いてあります。

\*

で、

\* 「何となく」は「とんでもない」のだ。

に話をもどします。大切な点は、

\* 「何となく」が、きょうの日替わり定食のメニュー的「経路」の意味

なのです。ごちゃごちゃぐだぐだ書いていますから、もう、お忘れになったと存じますが、さきほど、

\* 「経路」には一定した意味はない。

と書きましたように、「経路」は、その日によって意味が変わることがあるのです。ですから、「きょうの日替わり定食のメニュー的」という修飾語をつけました。たとえば、これから先の記事で「経路」の意味が変わっている可能性は高いと言えます。

ちなみに、きのうの記事では、

\* 「経路」は「意味」という「意味」だ。

みたいなことを書いていました。きょうは、

\* 「経路」とは、「何となく」であり「とんでもない」だ。

です。見通しとしては、今後、

\* 「経路」は「刻印」である。

みたいな話になる感じがします。

\* 刻印 = DNA = 運命 = 宿命 = 「どうにもとまらない」 = 「因果」 = 「業（ごう）」 = G  
O = さだめ = 「リセット不可能性」 = 「駄目」.....

という連鎖があたまたに浮かびます。あくまでも、見通しですので、変更もあり得ますけど.....。なお、こうした一連の言葉たちが、出てくる心境については、「カジノ人間主義」という、個人的に非常に愛着のある記事と呼応しているのです。ご一読いただければ幸いです。その記事では、「経路」が

\* 「出来レース」

という言葉で登場しています。

\*

ところで、最近、

\* 自然言語と人工言語

について、すごく気になって仕方ありません。めちゃくちゃ苦手な人工言語をちょっと「お勉強」してみたくなりました。で、しばらく、その「お勉強」に専念し、このブログはお休みさせていただきます。

こんにゃく、いや、絹ごし豆腐ほどの柔な根性しかないアホのすることですので、すぐに挫折するのは目に見えています。いちおう、やってみます。

\*

ごちゃごちゃぐだぐだした文章を、我慢して、ここまで読んでくださった、心優しいあなたに、感謝いたします。どうもありがとうございました。では、また、再開=再会のときまで。

何となく それでは済まぬ 出来レース（「何となく」より）

\*出典

この記事は、過去の記事からの引用からなるパッチワークです。各断片の出所は以下の記事やサイトにあります。お訪ねいただければ嬉しいです。

\*「もしかして、出来レース？」

\*「カジノ人間主義」

\*「何となく」

#ジル・ドゥルーズ# フロベール # フローベール # マラルメ # イメージ # 蓮實重彦  
# 言葉# 意味 # 辞書 # 定型詩 # 日本語 # 散文 # 表象 # エッセイ



## 意味の論理楽・その1【引用の織物】



＊

## 意味の論理楽・その1【引用の織物】

星野廉

2021年9月7日 15:41

目次

＊「ああでもあり、こうでもある」より

＊「かつらはずれる」より

＊「差別化」より

＊「いみのいみ」より

＊出典

＊「ああでもあり、こうでもある」より

あなたはSですか、それともMですか？

この質問をエッチな意味でとってくださって、けっこうです。どうでしょう？ あなたはサディスト（or サディスティック）ですか、それとも、マゾヒスト（or マゾヒスティック）ですか？ どちらでも、ないですか？ 両方の要素がありますか？ 時と場合によりますか？ TPO次第で変わるから一定していない、ですか？

ジル・ドゥルーズという人の書いた本の邦訳である『マゾッホとサド』の訳者が、蓮実重彦＝蓮實重彦氏です。内容や詳細はすっかり忘れましたが、要約すると、

＊いわゆるSとMとは反意語でない

ということが書かれていたと記憶しています。比喩的に言えば、反意語というより、両者のベクトルが違うという意味だったような気がします。これもまた、蓮実重彦＝蓮實重彦氏が、何かを書いていらっやったことですが、マルセル・ブルースト作の、例のとつともなく長い小説『失われた時を求めて』は、「長い」の反対が「短い」ではないことをめぐって書かれた作品である、という意味の文を読んだ覚えがあります。間違っていたら、ごめんなさい。

というわけで、正直なところ、「快=気持ちいい」と「不快=気持ちよくない」を反対の感情、あるいは感覚としてとらえていいのかどうか、整理がつかないのです。みなさんは、どうお考えですか？ ややこしいですよ。たぶん、言葉が欠陥品であるということに加えて、ヒトが言葉という欠陥品に「慣れきっている=依存しきっている=疑いを持たなくなっている」ために、いわば「落とし穴=陥穽=罠」に、はまり込んでいるのではないかと、思えてならないのです。

上で、超常現象の話をしましたよね。「超常現象」の対義語が「日常」だと仮定してみましょう。日常の中で——その真偽は別にして——たまに超常現象という話題をテレビや本や雑誌で見聞きするからこそ、わくわくどきどきもし、不思議だという気持ちを堪能できるのではないのでしょうか？ また、曲芸や類まれな才能の話もしましたよね。曲芸やサーカスは、本来、「ハレ=晴れ=非日常」の時に催されるものだった、という考え方があります。

一方、「ハレ=晴れ=非日常」の反対は、「ケ=曇=日常」だとされています。「ケ=曇=日常」の世界に生きるヒトが、たまに「ハレ=晴れ=非日常」の時空を作り、そこでお祭りや儀礼を行い、その刺身のつまとして、曲芸やサーカスや芝居=劇といった娯楽=芸能を催すからこそ、そうした娯楽=芸能が妖しげで、これまた、わくわくどきどきするものだったのではないのでしょうか？ 毎日が正月やお祭り、毎日が超常現象だったら、ヒトは飽きるどころか、不思議を堪能できなくなり、たぶん、辟易=閉口=うんざりしてしまうでしょう。

ですので、

\* 「AかBか」だけでなく「AもBも」という際のAとBとは、「一見」相反するものでなければ、ヒトは満足=納得できない。

そんな気がします。この「一見」が曲者ですね。ヒトが、反対だと思いこんでいれば、それでいいのだ。そのように大雑把に考えるのが楽なのですが、そういうスタンスを「杜撰=いい加減=テキトー=手抜き=ちょっと違うのではないかと」、自分なんかは感じてしまうのです。損な性格だと思います。こんなことを考えても、いいことなど、これっぽっちもないのですから。でも、やっぱり、考えちゃうんですよ。困ったものです。

反意語=反対語=対義語については、保留したほうが、よさそうです。近いうちに、また、ああでもないこうでもない、ああでもありこうでもある、と考えながら書きたいと思います。（「ああでもあり、こうでもある」より）

\*「かつらはずれる」より

\*『善悪の彼岸』

という本の名前を、お聞きになったことがありますか？ 書いたのは、ニーチェという人です。「善 vs. 悪」という反対語の図式を「ひょいと」か「びょんと」か「ひゅっと」か「ばきゅーんと」か、知りませんが、とにかく、「越えて=超えて」しまったみたいなのです。

自分は、その本の日本語訳を、かなり長い間持っていました。そして、辞書みたいに、ところどころを拾い読みしていた時期がありました。でも、何が書いてあるのか、よく分かりませんでした。過去形なのは、どこかで無くしたからです。残念ながら、その内容については何も覚えていません。

ただ、その本のただならぬ気配と言うか、醸し出す雰囲気と言うか、それだけは、頭ではなく体が覚えています。

\*反意語とか、対義語とか、反対語なんて、嘘だ

と、体が覚えているのです。言霊恐怖症の自分としては、怖いのですが、いつか、この大問題について書いてみたいです。ヒトをヒトにならしめている、ずれの本尊である、言語=論理を相手に、おふざけをしてみたいです。で、『善悪の彼岸』という本を書いた人が、次のように言ったそうです。

\*神は死んだ。

勇気ありますね。ちょっとやそつとでは、真似ができることじゃありません。大文字の God ですよ。一神教の神様ですよ。小文字で複数の gods、つまり、寛大なお心をお持ちの、八百万（やおよろず）の神々のうちの、一部ではないのですよ。ファンダメンタリ

ズムの元祖みたいな人たちが、圧倒的多数だった時代に、よくもまあ、そんな大それたことを言うなんて、尊敬しちゃいます。ダジャレの神様の1人であった、ジャック・デリダ氏によると、Godと「言葉=ロゴス=論理」には、ふかーい関係があるそうなんです。

\*紙、神、髪、加味、かみ、咬み、守、上、噛み、加美、香美、可美、カミ。

今、並べたのは、ウィンドウズについているワードというワープロソフトを使って、「かみ」と入力した結果です。言霊のおどろおどろしい気配を、ひしひしと感ずますね。

言葉遊びが、いっぱいできそうです。うずうずします。でも、きょうは止めておきます。特に「髪」は止めておきます。なにしろ、「神は死んだ」なんて、大それたフレーズを引用してしまったのだし、「かつら」の話をしてしまったのだし、「ずれ・ずれ」なんて話もしてしまったのですから。ここで、また取り乱したら、さきほど関係者の方々に謝罪した意味がなくなってしまいます。きょうは自重します。（「かつらはずれる」より）

\*「差別化」より

\*ヒトは、飽きっぽく、しかも忘れっぽい生き物である。

これは日々実感しています。自分の言動を考えても、まわりにいる人たちの言動を見ても、テレビや新聞やウェブサイトを見ても、つくづくそう思います。で、きのう書きましたように、反意語=反対語=対義語=異義語であると、とりあえず共通の認識があるらしい数々のペアの言葉たちに対し、自分はかなりの疑問を抱いているのです。

自分が見聞きするすべてのペアについて、そうした不信感を持っているのですから、大変です。別に、そんなことを気にせず生きていくのが楽に決まっています。それは百も承知です。百歩譲って、そうしたペアが反対であると認めてしまい、たとえば、このブログで記事を書いていくとか、そんな心持ちでやり過ごしていくとか、そんなことができれば、気楽だし、うつも悪化しないだろうなあ、と思います。でも、できそうもないのです。

ただ、いちいち反対語のペアが出てくるたびに、それ突っかかっていたら、しんどくて仕方ありません。ですので、反対語のペアを、このさい十把ひとからげにして、気持

ちの整理だけをしておこうという姑息な手段を選択しようと決めました。で、次のような仮説（かせつ）を仮設（かせつ）しておきたいと思います。以下のAとBは、いわゆる反意語＝反対語＝対義語＝異義語のペアだと考えられているものです。

(1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。写真のネガとポジが代表的な例。AからBへ、BからAへの移行が、ほぼ瞬間的に可能であるという特徴を持つ。また「一瞬にして自分を変える」「ポジティブをネガティブに転じる」に類似した、ある種の分野で用いられている、レトリック＝言葉の遊び＝キャッチコピー＝宣伝文句＝惹句＝作り話＝トリック＝錯覚＝嘘という、応用例もある。この中に含めてよさそうなペアの候補としては、愛と憎、快と不快、「いや＝だめ」と「ええ・はい＝いいわ・いいよ」、幸と不幸、うれピーとかなピー、味方と敵、友達と見知らぬ人、痴漢とたまたま電車内で隣合わせた人、前進と後退、進化と退化、などが怪しい。

(2) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「範囲語」であるらしい。AとBの意味の素（もと）は、かなり混じりあっているにもかかわらず、言葉の響きによって、反対の意味であるという印象を招いていると推測される。つまり、構成要素が同じ「範囲＝枠」の中で入り乱れている。構造的には、連続体という比喩も有効であろう。また、時間的推移により、構成要素間での位置関係が変化しやすい。また、そもそもペアが反意であるという根拠＝理由が薄い＝弱い場合も、ここに含めていいと考えられる。変化に注目した場合には、プリズムのイメージが近い。見方や視点を変えると、異なったもののように知覚されるという特徴がある。正規品と類似品、オトナとコドモ、単数と複数、悪人と善人、聖人と流神（とくしん）者、聖人と俗人、超人とふつーの人、すごいひとと凡人、本物と偽物、本人と影武者、本人と偽者、天動説と地動説、「ヒトは空を飛べる」と「ヒトは空を飛べない」、幽霊の存在の肯定と幽霊の存在の否定、「(人間関係における)上」と「(人間関係における)下」、などが典型例かもしれない。この中に含めてよさそうな他のペアの候補としては、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、ハレとケ、「本当です」と「間違えました」などが怪しい。

(3) AとBは、「反対語」というよりも、むしろ「相対語」であるらしい。AとBの間には、反対関係ではなく、相対的な「位相＝段階＝階段＝雛壇（ひなだん）」が存在すると推察される。したがって、その階段のどこにいるかによって、反対関係とは言えない関係が生じる。多くの場合、測定器や測定用機器によって物理的に観察でき、かつまた数値化可能だという特徴を備えている。以下の典型例は、比喩としてではなく、物理的に確認可能な場合を想定していることに注意されたい。熱いと冷たい、暑いと寒い、右と左、無痛と苦痛（※SMではなく医学的意味で）、厚いと薄い、高いと低い、長いと短い、遠いと近い、「でかい」と「ちっちゃい」、「これだけ」と「こんなに」、東洋と西洋、速いと遅い、すっぴんと厚化粧、など。

ここで、ひと休みしてよろしいでしょうか？ みなさんも、お疲れになったのではないのでしょうか？ 少しだけ、話をずらしましょう。反対の意味を表すのに、漢語系の日本語の単語に「無」「不」「反」「非」「脱」といった語を頭に被せますよね。まるで、「否定のかつら」みたいです。英語にも、ありますよね。

\* unhappy「不幸な」、immoral「不道德な」、antisocial「反社会的な」、disorder「無秩序」、irregular「不規則な」、illogical「非論理的な」、ignorance「無知」、deodorant「脱臭剤」、nonsense「無意味」、anarchy「無政府状態」

よく見ると、おなじみの単語が透けて見えませんか？ おもしろいですね。一見するだけでは、どうなっているのか分からないものもあります。たとえば、上記の ignorance「無知」ですが、これは語源的には i- という「否定のかつら」＋「gnor(ance) = know」と考えるらしいです。だから、無知=知らない、となるみたいです。なるほど、という感じですね。

最後に挙げた anarchy「無政府状態」は、アナーキーと読めば、なんだあれかあ、という感じの単語ですが、手元にある辞書によると、a- という「否定のかつら」＋「archy = 指導者」と説明してあります。ですので、monarchy とは「モノクロ (=単色)」や、このブログみたいな「モノブログ (=孤独ブログ)」の「モノ」、つまり、「1つ、1人」＋「指導者」で、「君主制、君主国」となるとのこと。なるほど。

\*

で、

(4) AとBは、「対義語」というよりも、むしろ「大儀語」であるらしい。AとBの間に、対立関係ないし反対関係を見出すことは容易に見えて、実は難しい。哲学、論理学、倫理学、数学、ひいては「言葉遊び=レトリック」のテーマとして、しばしば論じられてきたが、結論は出なかったもよう。これから先も、結論は出ないと予想される。この種の議論は、七面倒くさく、骨がおれ、徒労に終わることが特徴。一部のマニアおよびオタク向け。脳科学に救いを求める向きもあるが、その有効性は未知=絶望的。典型例は、存在と無、有と無、虚と実、戦争と平和、現実と非現実、現実と仮想現実、フィクションとノンフィクション、事実と虚構、嘘と真(まこと)、始まりと終わり、身体と精神、平面と局面、点と線、直線と曲線、罪と罰、天国と地獄、この世とあの世、オトコと



オンナ、キミたち女の子とボクたち男の子（※ただし、ここではオスとメスという生物学的要素を除いた抽象語）、など。

(5) AとBは、「対義語」といよりも、むしろ「大疑語」であるらしい。大いに主観的な解釈が、さまざまな人たちによってなされている、極めていかがわしいペアである。と解釈できる点が、いかがわしさに輪をかけていると言えなくもない。(1)(2)(3)(4)、および次の(6)と重複する。典型例は、幸と不幸、前進と後退、真と偽、善と悪、正と誤、聖と俗、虚と実、現実と非現実、嘘と真(まこと)、など。

(6) AとBは、「異義語」というよりも、むしろ「異議語」であるらしい(※両者の漢字の違いをよく見てください)。反対関係にあるのではなく、複数の利害関係者＝ステークホルダー間の意見の相違や虚偽や策謀などが根底として存在する、「混乱＝闘い＝戦い＝喧嘩＝生存競争＝仁義なきたたかい」であると推測される。口語体＝悪態＝罵倒で、表現されるのが特徴。利害関係に基づくものであるために、しばしば同一ないし同様の表現として立ち現れる。例は以下の通り。「言った」と「言っていない」、「やったろー」と「やってねー」、「良かった」と「悪かった」、「関係ねー」と「責任とれ」、「おまえが悪い」と「おまえが悪い」、「失礼しちゃうわ」と「失礼しちゃうわ」、「とんでもないわ〜」と「とんでもないわ〜」、「おだまり」と「おだまり」、「馬鹿野郎」と「馬鹿野郎」、「今に見ている」と「今に見ている」、「某国の将軍様」と「某大都市の知事」、「真似すんな」と「真似すんな」など。

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。世界を「まだら」状にしか知覚および認識できないヒトが、長年にわたって使用してきたことにより、慣例的に反対の関係にあると「誤解＝事実誤認＝錯覚」されていると推測可能な言葉のペア。補完関係があるという見方も可能かもしれない。静と動、絶対と相対、客観と主観、客体と主体、「分かった」と「分からない」、「知っている」と「忘れている」、きれいと汚い、可能と不可能、シャチョーとペーパー、お偉いさんと市民、濃いと薄い、あそことここ、善と悪(※倫理的意味ではなく、この惑星に対してのヒトの影響度)、神と悪魔(※ただし、諸説あり)、ヒトと動物、優と劣、高等と劣等、理系と文系、〇〇党と△△党、右派と左派、保守と革新、主流派と非主流派、〇〇党XX派と〇〇党□□派、「某国の将軍様」と「某大都市の知事」(※また出ちゃった)など。

(8) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「別物」であるらしい。しかし、存在である以上、根本においては、つながっているとも推測される。ベクトルが違うのに、歴史的経緯や、ゴタゴタ＝騒動や、錯誤や、陰謀によって、反対の

関係があるとみなされているとおぼしきペア。典型例は、資本主義と共産主義、塩と砂糖、社会主義と共産主義、SとM、〇〇教と△△教、〇〇派と△△派、〇〇流と△△流、一時期のテレビと一時期のラジオ、シロとクロ、まなとかな、タロとジロ、など。

なお、以上の8つの定義のそれぞれの出だしの総括的センテンスの語尾が、すべて「らしい」となっているのは、それを一つひとつ検証するのが、実にしんどそうだからです。自分は、哲学と「心中する」(※比喻です、当ブログは自〇サイトでは断じてありません、念のため)気はあっても、反意語=反対語=対義語と「心中する」(※比喻です、当ブログは〇殺サイトでは断じてありません、念のため)気は毛頭ありません。

＊

>ヒトは、飽きっぽく、しかも忘れっぽい生き物である。

でしたよね。いったん、さきほどの話題に戻りますが、

＊反意語とは、ヒトが本当は体で分かっている、あるいはかつて体で知っていたことを忘れた結果として陥っている錯覚から生じる言葉のペアである

と、簡単にまとめさせてください。何しろ、

＊ヒトは、「〇△X」という言葉を作り、その次に「〇△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである

からなのです。

で、次のお話に移ります。きのうは、

>ヒトには、他人と同じでいることに安心感を抱く一方で、他人と違っていることへの欲求を抱く習性がある

と、

>「制服=ユニフォーム= uniform =画一的=そっくり」を着ることの気楽さと一体感も「いい=快感である」し、「私服=私だけは別=他の人とは違うのよ」を着て自己主張や自己顕示をするのも「いい=快感である」

という2つの仮説から、本日の文章の冒頭で引用した

>ヒトは、みんなと同じでありたいと同時に、目立ちたいという気持ちを持っている。なぜなら、ヒトは、「落ち着きがない＝飽きやすい＝好奇心が強い＝浮気性の」生き物であり、じっとしてられないからである。具体的に例を挙げると、もし動物園でヒトを檻に閉じ込めて飼育したら、園内でもっともノイローゼにかかりやすい動物となるであろう。

という新たな仮説へと、話を強引に持って行ったのでした。その強引さ＝大雑把さ＝杜撰さの裏には、

>正直なところ、「快＝気持ちいい」と「不快＝気持ちよくない」を反対の感情、あるいは感覚としてとらえていいのかどうか、整理がつかないのです。みなさんは、どうお考えですか？ ややこしいですね。たぶん、言葉が欠陥品であるということに加えて、ヒトが言葉という欠陥品に「慣れきっている＝依存しきっている＝疑いを持たなくなっている」ために、いわば「落とし穴＝陥穽＝罠」に、はまり込んでいるのではないかと、思えてならないのです。

ときのう書いた迷いがあったからです。

で、さきほど反意語について、いちおうのケリをつけた結果、「快＝気持ちいい」と「不快＝気持ちよくない」は、上述の

(1) AとBは、「反意語」というよりも、むしろ「表裏一体」であるらしい。

に該当するのではないかと、とりあえずの結論を得ました。ですので、「表裏一体」について、もう少し説明を加えさせてください。「表裏一体」の関係にあるAとBとは、たがいにほぼ瞬間的にAからBへ、またBからAへと移行＝変化＝転換することができます。「AでありBでもある」という説明の仕方も可能だと思います。ただし、

(7) AとBは、反意語＝反対語＝対義語＝異義語というよりも、むしろ「同意語＝同義語」であるらしい。

とは、違います。(7)は、あくまでも「A=B」であり、「表裏一体」よりは「一心同体」というイメージです。(1)と(7)は確かに、非常によく似ています。何が似ているかと申しますと、「そっくりだ」という点がそっくりなのです。おふぎけに聞こえたら、ご

めんなさい。(「差別化」より)

\* 「いみのいみ」より

意味について考えています。きっかけは、数日前に書いた記事なので、以下に引用させていただきます。

★ ★

まず、きのうの記事から引用させていただきます。

★

\*意味が分からないのに、うたう・となえる・はなす・くちにする・ひとにつたえる・かく・しるす・おぼえる

ということは、

\*特殊な話ではない

のです。

\*よくある話

なのです。たとえば、

\*お経、保育園・幼稚園でのお歌の時間、学校の授業での音読、カラオケボックスでの覚えたての歌の練習、お習字、今流行の写経、文字を習いたてのコドモたち、言葉を習いたてのヒトたち、新聞の音読、プレゼン、役人の書いた答弁書を国会で読みあげる大臣、国会の議場での速記、裁判での答弁書の朗読、自分の書いたブログ記事を読み返しているこのアホ.....

今挙げた例には、明らかに意味が分からずに行っている行為=動作もあれば、意味がある程度分かっているかに思える行為=動作もありそうです。でも、個人的には、これらの行為=動作すべてが、

\*意味が分かってやっているようで、そうではない

と思えてなりません。悪い意味で言っているのではありません。

\*「良い悪い」といった次元の話ではない

のです。

\*意味が分からないけど、やっている

むしろ、それが、

\*ヒトという種にとっては、ふつうなのだ

と言いたいのです。このことについては、いつか、あらためて考え、書いてみたいとも思っています。

★

以上が引用ですが、「いつか、あらためて考え、書いてみたい」の「いつか」が「きょう」になりました。

★ ★

以上が引用なのですが、

\*「★ ★」 B 「★ ★」のなかに、「★」 A 「★」

つまり

\*「★ ★」 「★」・・・「★」 「★ ★」

というサンドイッチ型の引用になりました。Bは、当ブログの過去記事である「あわいあわい・経路・表層 (1)」のなかの一節で、Aは、やはり過去記事「まつはいつまでも、まつ」の一節です。

\*いちばん単純な「入れ子構造」

ということになるのでしょうか。

\*BのなかにAが入っている

という構造です。このブログでは、自己輸血=自己引用をよくやっていますが、こんな場合もあるのですね。今までにも、無意識にやったことがあるのかもしれませんが、きょうは、

\*えっっ!?

という感じで意識しました。で、

\*このことについては、いつか、あらためて考え、書いてみたいとも思っています。

↓

\*「いつか、あらためて考え、書いてみたい」の「いつか」が「きょう」になりました。

↓

\*「いつか、あらためて考え、書いてみたい」の「いつか」が、再度「きょう」になりました。

というわけです。2度も引用するなんて、よほど気になる部分を引用したのだと思います。

ここで、

\*「引用」

について考えてみましょう。上の例で言うと、

\*AをBという形で引用したとき、BはAの「注釈」となる

と言えるような気がします。そう考えるならば、きょうは

\*Aの「注釈」であるBを「注釈」するCという「注釈」をつくる

とも言えます。でも、これは言葉の遊び＝レトリック＝論理ごっこであり、

\*言葉は何とでも言える

という曲者（くせもの）ですから、別の言い方もできます。たとえば、きょうは、

\*Bは無視して、あらたにAを再び「引用」してCという「注釈」をつくる

と言っても、いっこうに差し支えはありません。というか、むしろ、

\*ヒトを含む森羅万象は、常に変わりつつある。

という立場から、

\*Aを書いた時の自分と、Bを書いた時の自分と、Cを書こうとしている今の自分は、それぞれが異なっている＝変化している＝ずれている

と言ったほうが、A、および、Bに書かれている内容＝テーマ＝意味＝「経路（＝筋道）」に沿っている、と言えそうです。ということは、

\*引用とは「注釈」であると同時に「変奏」でもある

とも言えそうです。

\*

実は、今書いてきたような、

\*形式論理もどきの言葉の操作

が、とても苦手なのです。だから、「形式論理」ではなく、あくまでも「もどき」なのですが、イメージで言うと、「XはY、だから、Zになる」みたいな筋道の立て方が、大の苦手なのです。それよりも、

\*勘＝感＝観＝疍を頼りにする

つまり、「Xでえ、Yでえ、Zなんですう」みたいな、うじうじした「ま、いっか」主義＝でまかせ主義的な、話の進め方のほうがずっと楽です。みなさんは、どうですかあ？

＊

先週の後半あたりから、

＊意味って何だろう？

と考え続けています。こういう時には、よく似た感じ＝感字の言葉をさがして、並べてみてじっと見つめながら、「ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもない」をします。

きょうの記事のために、きのう用意した走り書きメモの一部を、以下に書き抜きます＝引用します。

＊「いみ・意味・異味・忌み・忌・齋／い・意・異・衣・違・位・囲・謂・畏・唯・移・緯・依・委・為・惟・彙・齋／わけ・分け・訳・別け・分ける・別ける・分かる・判る・解る・別る・分かつ・別つ・わかち・ひきわけ／内容・コンテンツ・メッセージ・ねらい・価値・重要性・区別・筋道・道理・条理・事情・理由・子細・いきさつ／そうか・あ、そう・なるほど・アハッ・ほうー・うんうん・うむうむ・やっぱりね・はーあ・ふーん・ふーむ」

以上の言葉や文字をご覧になって、

＊意味の意味

が何となくお分かりになったでしょうか？ それとも、わけ分かんなくなってきたでしょうか？ 自分の場合には、後者、つまり、

＊わけわかんない状態

になってきました。ところで、わけわかるヒトなんているんでしょうか？

みなさんのなかで、国語辞典を引いていてがっかりした経験をお持ちの方は、いらっしやいませんか？



※Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、Aが書いてあった。

という状況です。かつて、

※個性を打ち出さなければ売れない

というような辞書の販売合戦みたいなものがあった時期がありました。国語辞典であって、次に英和辞典でもあったような気がします。言語学の新しい波の成果が、辞書という形で結実しはじめた時期だったのでないか、と今になって思ったりしています。

個人的な印象＝感想＝思い込み＝思い過ごしかもしれません。いずれにせよ、そうした時期を経て、現在市販されている辞書では、上記の、がっかりする状況はいくぶん改善されたように思います。

※孫引き

という言葉があります。辞書の場合であれば、

※ある「権威ある＝威張った＝売れ筋の＝学会のボスが弟子や出版社の社員をこき使う形で製作された」辞書

を、他の出版社がそっくり真似たり、ちょっと変えて新発売することです。むかしの辞書は、その「孫引き」が多かったようです。

※「コピペ」

は、今始まった話ではないということですね。

※

※現在は、PCとネットがあるため、コピペが飛躍的にやりやすくなった

というのが、正確な言い方だと思います。で、国語辞典を引く場合には、

※Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、A

が書いてあった。

は、「いくぶん」減ってきましたが、

\*Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、Cが書いてあり、Cを調べて見たら、Aが書いてあった。

みたいな状況が出てきたり、

\*Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、ちゃんとAの「説明」が書いてある。

みたいな、わりとマシな=良心的な=がっかりさせない状況も経験するようになってきました。でも、主流は、やはり、

\*Aの意味を知ろうとして、Aを調べてみると、Bが書いてあって、Bを調べたら、Aが書いてあった。

のような気がします。

\*

で、手持の複数の国語辞典をあらためて飛ばし読みしてみて、辞書に書いてあることは、以下の5つのパターンに分けられるのではないかと、思いました。

1) 見出しの言葉を、別のほぼ同じ長さの言葉に言い換える。

= 「Aは、Bなのよ。あと、Cとも言えるかも」。

2) 見出しの言葉を、それより長い言葉で言い換える=説明する。

= 「Aは、XがYしてZとなることなの」。

3) 見出しの言葉をつかった例文を挙げて、ほのめかそうとする。

= 「Aは、『PがAしたらQが起きた』みたいにつかうのだけど、分かるかしら」。

4) 見出しの言葉の、語源や成り立ちを説明する。  
= 「Aは、もともとHがIするって意味だったの」。

5) 見出しの言葉の、語源や成り立ちを説明する。  
= 「Aは、もともとHがIするって意味だったの。でもね、どこかのアホがAとJが似ているものだから、Kという意味にもなっちゃったのよ=「転じた」=「訛った」=「～の意か」。

そう思うと、

\*辞書をつくる

のって大変ですね。でも、

\*お手本がある

と、「こんなふうによればいいのか」「こんなふうによれば=ごまかせばいいのか」「こんなふうによてきとーによておけばいいのか」という具合に、

\*真似る

ことができます。要するに、

\*辞書にも、以前からあるやり方=「経路」=パターンがあり、それを真似る=なぞる

ことで、何とかなる部分がほとんどを占めている気がします。ということは、

\*辞書をつくるさいには、各見出しの言葉の意味を考える必要はない

とも言えそうです。

\*意味は、既に決まっている

のです。あとは、

\*どう料理するか=どう差別化するか

ですが、その

\*料理法＝差別化の余地は、かなり限られている

と思います。

\*意味を、新しくつくるわけにはいかない

からです。早い話が、

\*辞書が似たり寄ったりになるのは仕方がない。＝辞書がまちまち・多種多様であったら困る。

ということです。でも、ときどき、1冊の辞書のなかで、

\*困った＝変わった語義の説明が見られる

場合があります。「困った＝変わった」というのは主観的なレベルの話です。部分的な話ですけど、

\*ちょっと「困った＝変わった」みたいなニュアンスで、よく議論される国語辞典

がありますよね。あえて名指しませんが、

\*〇〇さん

なんて、「さん」づけされている辞書です。ここにもありますが、

\*「かぞえ方」

という便利なデータが載っているなので、よく利用します。個人的には、その語義が、特に「困った＝変わった＝個性的な」ものだという印象はあまりしません。語の説明が、分かりやすく、例文も適切でいい辞書だと思います。

\*「困った＝変わった」が「高じる＝エスカレート＝とちくるう」

と

\*アンブローズ・ビアス (Ambrose Gwinnett Bierce : 1842-1914?) のものした、『悪魔の辞典』 (The Devil's Dictionary)

みたいになります。いい辞書だと思います。この辞典を手本に自分版の『悪魔の辞典』を目指している人たちがたくさんいました。現在もたくさんいるようです。へそ曲がりとしては、こういう良書が、さまざまな分野でたくさん出てくることを願っています。

\*

『悪魔の辞典』とは趣が違いますが、

\*フランスの作家、ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert : 1821-1880) が『紋切型事典』 (Dictionnaire des idées reçues)

という、考えようによっては、ヒトの言語活動を根底から揺さぶるような衝撃的な事典＝辞典を著しました。しかし、書かれた当時のフランスの諸風俗に通じていないと分からないところが多くて、現在の日本では受け入れられにくい「作品」です。だからこそ、

\*何も考えないで＝感じないで、パブロフのワンちゃん状態で行動しているヒトという種に鉄槌を下す

ために、誰か、

\*新しい『紋切型事典』 (Dictionnaire des idées reçues)

を書いてくれないかなあ、と切に願っています。かつて、自分で書いてみようと思って取り組みはじめたものの、力不足を感じて挫折したことを思い出しました。この辞典が、現在、つくりにくいのは、

\*紋切型＝「ヒトびとの思考停止を常態化させている、ある特定の言葉やフレーズやイメージ」が移り変わる速度が速すぎる時代をむかえている

ことと

\*紋切型は、グローバルなレベルよりも、圧倒的にローカルな現象として立ちあらわれ

る

からです。

\* 「ウィキペディア」のように日々の更新が可能なネット上の辞典として、多言語バージョンをリンクさせた形でヒトびとに運営させる

という手=手法=方法も考えられますが、掲示板みたいに混乱をきたすのがオチでしょう。

\*

話が、だいぶずれてしまいました。

このところ、ずっと考えている

\*意味

というのは、以上述べてきた辞書的な

\*意味ではない

のです。ただし、『紋切型事典』は大いに関係ありますが、そのことについては、機会をあらためて書くつもりです。

なにしろ、ちょっと

\*説明しにくい意味

なのです。さきほど書きました、辞書に書かれているパターンで言うなら、

3) 見出しの言葉をつかった例文を挙げて、ほのめかそうとする。= 「Aは、『PがAしたらQが起きた』みたいにつかうのだけど、分かるかしら」。

で説明してみます。冒頭で引用した、

\*意味が分からないけど、やっている。

とか

\*人生 or 世界 or 宇宙 or 森羅万象に意味なんてあるの？

とか

\*この消しゴムの意味

とか

\*そんなの無意味だよ。

とか

\*意味って何？

とか

\*意味の意味

と言う時の「意味」なのです。で、その

\*意味が分からないけど、やっている。

という文=センテンス=フレーズにある

\*「やっている」

が、何をやっているのかと申しますと、冒頭で引用した、

\*お経、保育園・幼稚園でのお歌の時間、学校の授業での音読、カラオケボックスでの覚えたての歌の練習、お習字、今流行の写経、文字を習いたてのコどもたち、言葉を習いたてのヒトたち、新聞の音読、プレゼン、役人の書いた答弁書を国会で読みあげる大臣、国会の議場での速記、裁判での答弁書の朗読、自分の書いたブログ記事を読み返しているこのアホ.....

といったことに加えて、

※道を歩いている、おしっこをしている、PCのキーボードで文字を書いている、テレビを見ている、庭の草木に水をやっている、ご飯を食べている、お風呂に入っている、財布を覗いて小銭をかぞえている.....

といったことも含む、ごくふつうの動作をするさいに、それを

※意味が分からないけど、やっている。

と言う時の

※「意味」

なのです。

※意味が分からないけど、やっている。 = 何となく、やっている。

と、単純に＝形式的に考えた場合、

※意味とは、分からないものである

と言えるような気がするのです。言い換えると、

※分かるものは、意味ではない。

となります。

※分かったとたんに、意味でなくなる

ものとも言えそうです。

※「それって、「無意味」ってことじゃないの？」

と問われれば、

※「そう、みたいです」

と答えると思います。

※「そうです」とは、答えない



と思いますけど。どうしてかと申しますと、

\* 「無意味」には、意味がある

ために、躊躇（ちゅうちょ）してしまうのです。というのも、広辞苑にも、新明解国語辞典（あっ、言っちゃった！）にも、

\* 「無意味」が見出しになっていて、その語義＝意味が書いてある

のです。

\* 「無意味」には「意味」がある

のです。

で、その語義＝意味を読んでも、このところずっと考えている

\* 意味とは意味が違う

という気がします。たとえば、さっき例に挙げた、

\* 道を歩いている or おしっこをしている意味

と言った場合には、その「意味」は

\* 理由・事情・わけ

という意味にもとれますよね。そういう意味ではありません。

\* 意義・価値・重要性

とも違います。いちばん近いのは、

\* 「経路」

だと思います。この「経路」という言葉は、先週あたりから、さかんにこのブログでつかうようになったのですが、

\*一定した意味がない

のです。でも、すごく気に入っています。

\*けいろ・経路・径路・毛色

と、分光=書き分けることができます。最後の毛色なんて、前の2つの書き方とは関係がないはずなのに、つながって=つなげてしまうのが、

\*このブログの「経路」

なのです。

\*

\*「経路」のコア・イメージ(=中心的なイメージ)は、「すじ」=「方向」=「進行」

です。

\*「スタイル・くせ・流儀・方法・パターン・旋律・ルール・型・順序・いきさつ・経緯・規則性・必然性の影・持続性」

という意味にもなり得ます。で、

\*「道を歩いている or おしっこをしている意味」というフレーズでの、「意味」は「いきさつ」に近い

と思います。その場合の「いきさつ」は「事情」や「わけ」とも言い換えることができそうです。

\*どういう、「いきさつ=事情=わけ」で、道を歩いている or おしっこをしているのか？

という文=センテンスがつかれますが、「経路」を尋ねている場合には、歩く場合には、「どこへ行くのか？」=「行き先」、「何のために行くのか？」=「目的・理由」を質問し

ているわけではありません。

これは、「歩く」という行為に「方向」が伴うために、そういう質問になり得るというだけのことです。もっと漠然とした質問なのです。漠然というのは、トリトメがないということです。

\*「歩いている」という動作をしている「意味=いきさつ=事情=わけ」を尋ねている

のです。答えようがなくなりますね。それなんです。

\*歩いている行為に、「意味=いきさつ=事情=わけ」なんてない

のです。

\*「歩く」という「経路」=「線路」が敷かれている=引かれているから、歩いているだけ

なのです。「おしっこをする」の場合のほうが、「歩く」のように「方向」なんていう要素がないため、分かりやすいと思います。

\*出そうだから、出している=出ているだけ

です。

\*「生理的=医学的」な「理由=事情」があるからだ

とも言えます。その意味では、

\*「生理的=医学的」な「理由=事情」は「経路」=「線路」である

と言っていいと思います。でも、それが、おしっこをするヒトに、あくまでも、

\*意識されない限りにおいて

です。

\*「経路」=「線路」は、敷かれている=引かれているが、意識されない。

という点が、きわめて重要です。

\*「経路」＝「線路」は意識されないから、「無意味」とは異なる

のです。さきほど、

\*意味とは、分からないものである

\*分かるものは、意味ではない。

\*分かったとたんに、意味でなくなる

と書いたのは、そういう意味です。

\*

そろそろ、家事をする時間が近づいてきました。

ここまでお読みいただいた方に、お礼申し上げます。どうも、ありがとうございました。では、また。

なぞるとき 立ちあらわれる 意味の影（「いみのいみ」より）

\*出典

この記事は、過去の記事からの引用からなるパッチワークです。各断片の出所は以下の記事やサイトにあります。お訪ねいただければ嬉しいです。

\*「ああでもあり、こうでもある」

\*「かつらはずれる」

\*「差別化」

\*「いみのいみ」

#ジル・ドゥルーズ # フロバール # フローバール # 蓮實重彦 # 言葉 # 意味 # 辞書 # 日

本語 # 散文 # 表象 # エッセイ

---

意味の意味と戯れる PART II

---

著 星野廉

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---